て元麿の『自分は見た』が巷に出た。殊に『自分は見た』は詩壇の喧しい議論を醸した。僕は此の二冊を神田の東京堂で買つて、往來で愛讀したが、僕が愛を以て買つた詩集は、此の二冊と、それから少し前に出た高村光太郎の『道程』とであつた。續いて柳虹の『勝利』、宗治の『ぬかるみの街道』、暮鳥の『風は草木にささやいた』が出版され、一方雜誌では福田正夫の『民衆』、柳虹の『現代詩歌』、汪洋の『新進詩人』、惣之助の『太洋の岸邊』、暮鳥の『苦惱者』、宗治の『地上の翼』、近藤經一等の『愛の本』が出た。僕も亦この年に始めて雜誌『韻律』を始め、續いて『詩の本』を發刊した。そしてホイットマンが漸次流行し、ブレークが柳宗悅によつて廣まり、英米のイマジズムが紹介され、トラウベルの七十歳が記念された。僕が前田鐵之助（當時春聲と號した）と深い友情に繫がれたのも、惣之助、幸次郎、宗治を知つたのも、柳虹、史光と逢つたのも、詩の會へ屬々顔を出し始めたのも皆この年である。逢つて再び逢はぬ人に松本福督、加藤純之輔がある。その會食、激論、散歩、朗讀、會合のすべてが僕には本當に懷しい思ひ出である。又スウエデエンボルグやボオやヴエルレエヌやストリンドベリイやヴエルハラン、さてはミケランゼロやシヤバンヌやセザンヌが、あの頃の日常生活の中への親しい顔として僕に再び現れてもくる。

大正八年日本詩集の第一卷が出た。これに依つて大正詩壇の結束的活動は愈々白日化した。同時に露風の『日本象徵詩集』がそれに拮抗し、又、西條、北村初雄、柳澤、矢野目源一、熊田、霜田等の

『詩王』が發刊されて前田鐵之助がそれを編輯し、又北原派の『詩篇』が岩佐賴太郎、矢部季等によつて刊行された。此の年には省吾の『大地の愛』、碎花の『地の子』、犀星の『第二愛の詩集』、八十の『砂金』、元麿の『虹』、譯詩集では春月の『ゲエテ詩集』、柳虹の『ヴエルレーヌ詩集』、碎花の『ホイットマンの草の葉』等が出てゐる。そしてホイットマンの百年祭、ダヌンチオ飛來の報と、詩壇は段々賑はつて來た。しかし此の年の末に、僕は詩をやめて長篇小說を書くために、詩卷を去つて出雲に隱れた。從つて以後數ヶ年の詩壇には、すべて間接に觸れてゐたばかりである。そして僅かに前田鐵之助、佐藤惣之助、陶山篤太郎、伊藤喬信、それから少し遲れて金子光晴と交信をしてゐるに過ぎなかつた。もつとも斯うはいふものの矢張り詩を忘れかね、知友を忘れかねて、遠くから斷えず詩壇を眺めてはゐた。

大正九年。さうした僕の目にうつる限りのところでは、童謠が流行り、カズンスが印度に去り、バリモンドが日本の詩を書き、岩野泡鳴が死に、正夫の劇詩『哀樂兒』が始めて出で、福士の『展望』、鐵之助の『韻律と獨語』、村山槐多の詩集、白秋詩集第一卷、藻風の『時の流に』、露風の『蘆間の幻影』譯詩集では西條の『靜かなる眉』『白孔雀』、昇曙夢の『ろしあ民謠集』、正夫のトラウベル、春月のハイネ、碎花のカアペンタア、耿之介のワイルド、上田敏の『牧羊神』、堀口大學の『失はれた寶玉』、新城和一のヴエルハラン、齋藤勇のブラウニング、中山昌樹のダンテの『神曲』、ユーゴーの『東方の詩』

等が田舍の本屋の店頭にも出た。惣之助は『滿月の川』を贈つてくれた。新聞の文藝欄が目立つて詩を載せ始めたのも、雨情の童謠が廣く讀まれ出したのも、多分この年である。

大正十年。先づ島崎藤村の生誕五十年が記念され『現代詩人選集』が出ると、次いでキィッの百年忌が營まれた。そして詩話會に最初の動搖が來た。白秋、耿之介、八十、允、藻風は詩話會を去つて新詩會を起し、又井上康文、尾崎喜八、霜田史光、多田不二、澤ゆき子、大藤治郎、宵島俊吉等は別に詩人會を組織して『新詩人』を發刊した。詩話會側ではそれらとの對抗上、又機も熟しての結果、雜誌『日本詩人』を發刊して舞臺とし、兼ねて新人の登龍門ともした。以後柳虹、幸次郎、省吾、正夫、惣之助等が交替編輯に當つた。詩壇の紛糾が玆にきざし始める。更に又、尾崎喜八、大藤治郎、中野秀人、長谷川巳之吉、赤松月船等が雜誌「詩聖」に據り金子光晴、陶山篤太郎が惑星となつて詩壇に隱見し、ダダイズムが芽生え、朔太郎對福士のリズム論が始まり、平戸廉吉が日本未來派運動の宣言をし、ブーシュキンの「エフゲニィ・オネーギン」が僕達を感動させた。詩壇は日一日と目まぐるしい。

大正十一年。一月にクローデルが日本に來た。福士、光晴、佐藤一英、國木田虎雄等が「樂園」を始め、惣之助元麿が「嵐」を多田不二が「帆船」を、と同人雜誌が絶えず僕に贈られてくるにつれて僕も再び詩の發表を衝動された。そして田舍で「極光」を發刊して、惣之助、篤太郎、喜八、不二、恩地孝四郎、野口米次郎、朔太郎、辻潤等にも書いて貰ひ、又一方「帆船」「嵐」「新詩人」、それから白

秋の「詩と音樂」や「日本詩人」や新聞などにも顏を見せ始めた。この年、興味ある詩壇の論爭としては、白秋對白鳥福田、それから尾崎の「詩の書き換へ」の議論があり、詩集には惣之助の「荒野の娘」「華やかな散歩」「琉球風物詩集」、大藤治郎の「忘れた顏」、尾崎喜八の「空と樹木」、有明詩集、柳虹の「預言」、白秋の「觀相の秋」、千家の「夜の河」「炎天」佐藤一英の「晴天」がある。僕も亦この年に「東京市」を出版した。

大正十二年。既に新詩會とも離れた西條八十が「棕櫚の會」を起すし、千家と宮崎丈二が「詩」を始めるし、內藤鋤策の「かなりや」が生れるといふ風に、この年も亦相當多事に進みかけたが、九月一日の大震災で、詩壇の活動がぱつたり止り、震災詩集「災禍の上に」の刊行と共にこの年は過ぎ去つた。「詩聖」「詩と音樂」の二大雜誌も廢刊した。靜かに詩壇とは別の立場で續けられてゐた興謝野寛の「明星」はこの時廢刊したが又は續刊したか記憶にないが、この雜誌での高村光太郎、竹友藻風等の活動は記憶に殘つてゐる。そしてこの年、僕は再び上京した。

この年に出版された詩集で僕の讀んだものは、「上田敏詩集」、有島武郎の「ホイットマン詩集」、佐藤春夫の「我が一九二二年」、山內義雄の「佛蘭西詩集」、白秋の「水墨集」、久保正夫の「ダンテ詩集」、特に金子光晴の「こがね蟲」等であり、新興詩人のものとしては松本淳三の「二足獸の歌へる」、渡邊渡の「天上の砂」、神戸雄一の「空と木橋との秋」、國木田虎雄の「鷗」、南江二郎の「舞姫の死」、宵島俊吉

の「朝の微風」、大關五郎の「大關五郎詩集」、角田竹夫の「微笑拒絶」、三石勝五郎の「散華樂」、田邊若男の「自然兒の出發」、高橋元吉の「耽視」、高橋新吉の「ダダイスト新吉の詩」等である。

大正十三年。表面平穩である。詩話會がイエーツ號、バイロン百年紀念號、トラウベル追悼號等を出し、又賞を懸けて新詩人號を出し、これによつて鈴木顯兒、齋藤康一郎、後藤大治、安井龍、佐々木秀光、麻布垣太郎、大野勇次、田邊憲二郎、村井武生等が紹介され、又第一回の詩人祭が築地小劇場で行はれた位のもの、詩集も澤山出るには出たが、暮鳥の「風は草木にささやいた」、尾崎喜八の「高層雲の下」、陶山篤太郎の「銅牌」、宮崎丈二の「爽やかな空」、相川俊孝の「萬物昇天」、高木斐瑳雄の「昧爽の花」、ヨネノグチ代表詩、富田碎花の「登高行」、佐藤惣之助の「水を歩みて」、西谷勢之介の「或る夢の貌」、千家元麿の「眞夏の夢」、福田正夫の「耕人の手」、野村吉哉の「星の音樂」、宮崎賢治の「春と修羅」、原丈の「草地を歩む」、中山啓の「火星」、大野勇次の「幽棲美學」、瀬田彌太郎の「愛の長詩」、阪中正夫の「六月は羽搏く」、泉浩郎の「曠野の彼方を行く者」、新島榮治の「隣人」位が記憶にあるだけである。とりわけ評判のよかつたのは陶山篤太郎の「銅牌」であつた。が、詩壇は此の平穩の中で、鬱勃たる轉向と隆替とへ向ひつつあつた。地方詩運動が日に月に、且つ全國的に盛んになつて新人の擡頭を促す一方では、プロレタリア詩派の運動が目立つて來るし、又詩話會そのものの平板と墮勢とが稍々飽かれて、惹いて赤松月船の詩話會解散論となり、種々の問題を惹起した。岡本潤、萩原恭次

郎、壺井繁治、松本淳三、野村吉哉、伊福部隆輝、重廣虎雄等の擡頭を見たのもこの年で、日本詩集を向ふに廻した「日本左翼戰線詩集」などの刊行もあつた。山村暮鳥が死んだのは、たしかこの年の暮であつたか？

大正十四年。この年位詩壇の新人舊人が諸共に活躍した年は今迄になかつた。僕はこの年度の「日本詩集」を萬朝報紙上で評して、便宜上その特色を時代的特質、心象的特質、氣稟的特質の三つに別け、第一のものとしては相川俊孝、角田竹夫、中野秀人、萩原恭次郎、橋爪健等の活動を、第二のものとしては介春、一英、惣之助、春夫、杉江重英、不二、南江二郎、朔太郎、藤田健次、犀星等の活動を、第三のものとしては春月、石川善助、柳虹、醉茗、省吾、篤太郎、元麿、光太郎、斐瑳雄、碎花、中村恭二郎、米次郎、正夫、松原至大、鐵之助、勝五郎、丈二、喜八、暮鳥等の活動を擧げ、そして如上三つの傾向が歴然とした天下三分の形を示したことを指摘したが、これを詩集の上から見ると又實に旺盛なもので、すぐに念頭に浮んでくるものだけでも百册に近い。今、思ひ出す儘にその大部分を列擧するなら、この年の詩壇の形勢が一目瞭然とするだらう。

大木篤夫「風・光・木の葉」、山村暮鳥「雲」、汪洋「世界の民衆に」「一人の思想より」「泣菫詩集」、雨情「のきばのすゞめ」、深尾須磨子「呪咀」「斑猫」「焦燥」、正夫「筑波の白百合」「死の島の美女」「死の子守唄」「輝ける薔薇」、竹内勝太郎「林のなか」、岡村二一「幻想君臨」、矢野目源一「聖瑪利亞の騎士」、春月

「自然の惠み」、白秋「季節の窓」、悟堂「武藏野」「かはたれの花」、省吾「青春の地へ」「青空を見る」、大藤治郎「西歐を行く」、朔太郎「純情小曲集」、宗治「靜かなる時」、横山美智子「生命の花」、萩原恭次郎「死刑宣告」、赤松月船「秋冷」、高群逸枝「東京は熱病にかゝつてゐる」、米次郎「表象抒情詩」、山崎泰雄「郊外風詩篇」、松村又一「野天に歌ふ」、松原至大「海の愛」、梶浦正之「鳶色の月」、それから飜譯では高村光太郎のヴェルハランの「天上の炎」、中山昌樹のダンテの「饗宴」、村山知義のトルラアの「燕の書」、鐵之助の「ジャム詩集」、幡谷正雄のテニスン及びゲエテの小曲集、光晴の「近代佛蘭西詩集」、堀口大學の「月下の一群」及びアポリネールの「動物詩集」、春月の「ハイネ小曲集」、正夫のイエーツの「陰影の水の上」、省吾の「理想國の處女」、畔上賢造の「ブラウニング信仰詩」等があり。

アンソロヂイには新潮社版の「明治大正詩選」とアルス版の「現代日本詩選」がある。

更に新進の詩人の詩集には

北川冬彦「三半規管喪失」、澁谷榮一「夜行列車」、木島俊太郎「祝電」、村井武生「樹蔭の椅子」、竹村浩「高原を行く」、秋山登「馬の花簪」、吉原重雄「雛潭」、田邊憲次郎「眩ゆい青蟲」、本澤浩二郎「蒼ざめし指」、石井季治「雲を招く」、ドン・ザッキィ「白痴の夢」、八木重吉「秋の瞳」、小方又星「古典的な風景」、安井龍「風のない樹木」、田中清一「永遠への思慕」、栗間久「虛空盃」、石原亮「森に眠る」、英美子「白橋の上に」、橘不二雄「腕の欠伸」、田中幸雄「憂鬱は燃える」、間司つねみ「海のほとり」、佐藤寛

「葦枯の土」、中田忠太郎「かひつぶりの卵」、能村潔「はるそだつ」、尾形龜之助「色ガラスの街」、星川清躬「石の門」、等、枚擧に堪えない。以上は僕の寄贈を受けたものだけだが、まだ此の他にも二三十册はある筈である。

更に又雜誌では渡邊渡の「近代詩歌」、佐藤惣之助の「詩の家」、福富菁兒の「面」、霜田史光の「日本民謠」、ドン・ザッキィの「世界詩人」、赤松月船の「朝」、田中清一の「詩神」、勝田香月の「自由詩人」等が新たに生れ、又新鋭數十人の組織した詩人協會の機關誌「抒情詩」は、月船、隆輝、光晴、篤太郎、悟堂、渡、康文、二一、喜八を編輯委員として活躍した。

又「日本詩人」の第二新詩人號の計畫によつて詩壇へ出て來た新人に黃瀛、栗木幸次郎、新良孝平、上田敏雄、森脇達夫、柴山晴美、市島三千雄、塚原嘉重、安西冬衛等がある。尙詩話會では藤村建碑記念號、露西亞現代詩壇號等を出し、河井醉茗の五十年生誕記念を擧行した。詩壇鬱然として旺盛なる哉である。

大正十五年の詩壇も亦盛んだつた。重なる詩集だけを擧げて置かう。加藤介春の「眼と眼」、佐藤八郎の「爪色の雨」、清水暉吉の「自畫像」、伊藤喬信の「北方人」、廣瀨操吉の「雲雀」、佐藤惣之助の「浮かれ鴛鴦」、白鳥省吾の「野茨の道」、千家元麿の「夏草」、大木篤夫の「秋に見る夢」、井上康文の「華麗な十字街」、野村吉哉の「三角形の太陽」、大鹿卓の「兵隊」、宮崎孝政の「風」、高橋新吉の「祇園祭り」、中

田信子の「女神七柱」、山村暮鳥の「月夜の牡丹」、田中清一の「彷徨へる希臘の神々」、杉江重英の「夢の中の街」、北川冬彦の「檢溫器と花」、竹內勝太郎の「春の樂器」、小野十三郎の「半分開いた窓」、吉田一穗の「海の聖母」等の他に、新進諸君のも亦多かつた。

一方犀星は小說界に健鬪し、童謠小曲の類も流行し、正夫は叙事詩劇詩を物しての後小說に行き、柳虹は新律格論を主張し、朔太郎又評論に努め、省吾は新たに大地舍を起した。又、喜八、光太郎、光晴、潤、篤夫、三好十郎、手塚武、清水孝祐、草野心平、芳賀融等の活動を見、西川勉は聯想詩派を、伊福部隆輝は後期自由詩を提唱し、短詩運動が目立ち、清水暉吉、幡谷正雄、長沼重隆、野川隆の外國詩壇紹介があり、宮木喜久雄、國井淳一、岡田刀水士等の外、女流では從來の須磨子、ゆき子信子、順子、花世、山口宇多子等の後に擡頭した森三千代、目次緋紗子、戸塚八重子、英美子、友谷靜榮、天野靜子、高群逸枝、林芙美子、坂本繁子、碧靜江其他の活躍があつた。そして大藤治郎が夭折し、野口米次郎が生誕五十年を詩壇から祝はれた。

斯くて又々多事な此の一年が終らうとする年末近くに當つて、突如詩壇のメルストロームが始まつたのである。尾崎、井上、中西、陶山、金子、勝承夫の署名による公開狀、川路、惣之助、白鳥、千家、多田、朔太郎、福田、百田の署名による詩話會解散聲明、詩話會々員の總會、解散署名者除名、と事は順次事件的になり社會的になつて行き、果ては七十餘名の會員を擁して詩壇中樞機關の觀があ

つた詩話會が、十ヶ年の歷史を遺して、全然崩壞してしまつたことは、諸君の眼にまだ新しい事實である。と同時に一方では北原白秋の「近代風景」が起り、伊福部隆、輝松本淳三、芳賀融等の「純文學」が起り、渡邊渡の「太平洋詩人」には岡本潤、萩原恭次郎等が據つた。そして地方では京都の「京都詩人」、名古屋の「新生」等有力な雜誌の活動が一段と白熱化して來た。

以上三木北原から始まつて、詩話會のカタストロフに終る、大正十五年間の詩壇の素描を試みたが今後の詩壇、昭和詩界の未來こそ樂しみである。詩話會がなくなつた現在のところでは、既成詩壇の詩人達は概ね自己の城砦に據つてゐる。福田正夫には「詩神」がある。川路柳虹には「炬火」がある。白鳥省吾には「地上樂園」がある。佐藤惣之助には「詩之家」がある。百田宗治には「椎の木」がある。西條八十には「愛誦」がある。多田不二には「帆船」がある。室生犀星には「驢馬」がある。この他、前田鐵之助の「詩洋」、林信一の「犀」、宮崎、瀨川、大黑、杉江の「森林」「烽火」「亞」「銅鑼」、等中々隆盛である。又一方には「抒情詩」が中央集權を排して復活し、尾崎喜八は此の騷擾の中から靜かに個人雜誌「待望」を出し始めた。

今後かゝる形勢が、分散のまゝでゐるか、或ひは何等かの連衡合併を見るか、乃至は時代の何等かの移動陶汰を見るか、今のところでは豫測の限りでない。何にしても善き個人の力こそ鼓舞し、且つ信賴すべきものだと僕は思つてゐる。大正詩壇よ、さらば！　そして往け！　新らしい光明へ！　眞

大正十五年の詩壇概觀

白鳥省吾

序言

今年の詩壇は相當活氣あつたものと言つてよい、詩壇不振の聲のみを云ふのが能でもあるまい。文壇劇壇の賑やかさに比例して詩壇また多事であつた。行くべきところに良き進展を示してゐた。

先づ詩集の夥しい刊行である。それを單に印刷慾の滿足のためと片づけるのは當らない。それは多く詩壇への第一歩として第一詩集の自費出版であつて、出版界の不況は殊にも詩集の刊行を手控へさした觀があるが、詩集全體の數は可なり多い。

第二に中央地方をひきくるめての夥しい詩誌の刊行である。中央に於ては詩人が個人的旗色を鮮明にするために發刊されたもの多く、地方の詩誌の多いのは特に今年に始まつた現象ではないが、青年

子女の新詩に對する情熱と詩の普及化を表現してゐるものと見る。この勢ひで詩が普及して行つたならば、詩がジャーナリズムに取り殘されてゐることを憂ふるに足らぬ。詩を眞に愛する人々の群によつて詩壇が立派に維持される日が來る。一般の群衆にいはゆる大衆文藝風に通俗小說風に叫びかける必要は毫もないのである。

澎湃たる詩の潮を氾濫せしめよ。

大正十五年の詩壇はその徑路を進んでゐる。

重なる詩集

重なる詩集として擧ぐべきは、定名ある詩人のものゝうち、本質的なものでは、先づ千家元麿の『夏草』（七月）を擧ぐべきである。五百六十頁の大册の詩集で、現代詩人のうち最も多作なる同氏の最近數年間の詩集で、自然に對して人生に對していつも若々しい感激を持ち、樂しげに詩を書いてゐる童心を失はぬ詩に充ちてゐる。內容は現實的、時とすると寫生的で、言葉は平明で、聯や句の長短は絕對自由なものである。この作者として長所短所の兩面を示す代表的な詩集であらう。故山村暮鳥の『月夜の牡丹』（七月）も、簡素なる同氏の晩年の詩風を示し、よい意味での童謠民謠風のものがある、

かく晩年の詩が整理され出版されたのは喜びである。

三木露風の「神と人」(七月)は嘗て出版したトラピスト詩集の「良心」「信仰の曙」に次ぐものとして出版された。神に對する敬虔なる心持はわかるが、藝術の詩としては著しくその衰へを感じさせ、詩心の硬化、技巧の拙劣が目につく。過去の詩を集めた「三木露風詩集」も出た。故三富朽葉の遺稿の出版も特記に値する。

多田不二の「夜の一部」(四月)が現代詩人叢書の第十九篇として出版された。「惱める森林」以後の第二詩集で、獨逸風の幽暗と眞實さを持つてゐた。

その外には私が五月創設した大地舍の第一回出版として詩集「茨野の道」だけである。

斯く見てくれば、いはゆる市價ある詩集として出版されたのは少い。その他、小曲集としては西條八十の「巴里小曲集」(四月)百田宗治の「北風と薔薇」(三月)川路柳虹の「黑い蝶」(十一月)室生犀星の「野いばら」がある。

新進の詩集

新進の詩集のうちで最も好評であつたのは、大鹿卓の『兵隊』(八月)であつた。在來の詩の韻律と

異る印象的な呼吸のもとに書いた詩で、或る新鮮さを感じさせたのである。內容は感覺的である。この詩に對しては都會風の技巧を愛する人にはひどく好きになれ、素朴なる純情をなだらかに示す側にはさほどでないといふやうな賛否兩方面がある。

永らく雜誌「森林」を刊行して、地味ではあるが實力を認められてゐた森林社の同人が詩集を出したことも注目をひいた。宮崎孝政の「風」(九月)杉江重英の「夢の中の街」(十月)である。

中田信子の「女神七柱」(七月)は日本の古代から近代までの女性をうたへる詩を集めたものとして異色があつた。

田中清一の「彷徨へる希臘の神々」(六月)は、その第三詩集で、詩感の方向が明るい希臘精神を持つたものであつた。

福原清の「ボヘミヤの歌」は純である美はしい抒情詩集であつた。その他、擧ぐべきはサトウ、ハチローの「爪色の雨」(五月)、廣瀨操吉の「雲雀」(六月)平木二六の「若冠」(三月)千石喜久の「文明の宣布」(六月)久保田彦保の「駿馬」(七月)古賀殘星の「空に翳す」(八月)木川新太郎の「狂舞の轍」(五月)清水暉吉の「自畫像」(五月)一瀨直行の「都會の雲」(六月)伊藤喬信の「北方人」(八月)佐々木秀光の「一人凝る」(十月)森脇達夫の「並木道」(十一月)佐藤英麿の「光」(十月)北川冬彦の「檢溫器と花」(十月)村野四郎の「艮」(十月)武田秋郎の「幻想曲」(七月)佐川信一の「合掌」(九月)竹

中久七の「端艇詩集」(七月) 吉田一穂の「海の聖母」(十一月) はいづれも、みな第一詩集であつて個性を鮮明にしたものである。

プロレタリヤ派のうちでは野村吉哉の「三角形の太陽」(六月) があり、若き農民の叫びを代表したものに、澁谷定輔の「野良に叫ぶ」(七月) がある。

詩劇・叙事詩・散文詩

この三つの分野に就いては、とかくの評があるにかゝはらず、日本に於ても目ぼしい作品が現はれるやうになつた。試作時代とも言へるが、べつにそう甚しく泰西に對してひけ目を感ずる必要もない

一月に聚芳閣から出版された「日本詩劇集」には、福田正夫、清水晴吉、井上康文、南江二郎、中田信子、岩井信實、白鳥省吾の作品を收めてある。

その他、詩劇の創作としては見るべきもの殆んどなく、千石喜久が地上樂園十、十一、に亘つて「ソクラテスの死」全三幕のうち二幕を發表した位であり、飜譯としてはやはり同誌に清水晴吉が、イエーツやコラムの詩劇を紹介した。

叙事詩の方面は福田正夫の「幻の麗人」「破れ胡蝶」が出版された。前者は婦人畫報に後者は少女畫

報に連載されたもので、讀物としての筋の興味はあるが、藝術的價値に於ては、もつと前途のあるものであつた。

これらの研究としては私が「日本叙事詩史」(改造四月號) と「日本詩劇史」(日本詩人一月より六月まで連載) を發表した。明治大正のそれの研究である。

散文詩集としては井上康文の「華麗なる十字街」が出た。

年鑑詩集その他

詩話會編の年鑑「日本詩集」(五月) は第八集を出して、新人として、八木重吉、田邊憲次郎、宮木喜久雄、國井淳一、能村潔、田中清一、大鹿卓、泉浩郎、岡田刀水士を推薦した。

詩話會は十月十五日讀賣新聞紙上に於て、委員の名によつて詩壇更新のために解散を聲明したが、新進の十數名はそれを專斷として更に公開狀を發して、委員の除名を告げたりしたが、結局、解散するに至つた。

その他、松江詩話會から年刊第一集「青柳の雨」(四月) が出て、栗間久その他四人の作を收め、松村又一編のもとに「關西新詩選」(九月) が出て、關西詩人を總括した報告を示し、名古屋に於ては「東

海詩集第一輯大正十五年版」(十月)を出し、その運動が、中央の歩武と合して、整然として來た。

民謠童謠

童謠詩人會は「日本童謠集」第二集である一九二六年版を七月出版した。童謠詩人三十餘氏の外に一般投稿から優秀なものをそれと殆んど同量に採錄した。前年度のものが童謠詩人だけのであるよりも、新しい意義を示した。

童謠詩人叢書として、北原白秋の「からたちの花」(六月)野口雨情の「螢の燈臺」(六月)三木露風の「小鳥の友」(十一月)川路柳虹の「鸚鵡の唄」(十一月)が出た。三木露風は更にアルスから「お日さま」を出した。

童謠集としては白鳥省吾の「黃金のたんぽぽ」(六月)小田俊夫の「栗鼠の顏が見たかつた」(六月)が出た。

民謠方面でも童謠とひとしく、かくべつの進展も見せないが、野口雨情の「おさんだいしよさま」が出版され、大關五郎の「煙草のけむり」(四月)が出て、地方の新進のものでは、藤淵忠一の「青塗船」益子德三の「豆の葉」が出た、民謠運動は地方から起つて來べきものと思ふので、地方詩人に私

はその研究と創作をすゝめる。

北原白秋氏はその講談社の民謠選のなかから優秀なものを選んで「現代民謠選集」を出した。嘗てまた明治四十二年に「日本童謠大全」の名の下に春陽堂から出版されたものが「日本民謠大全」として復刻されたのも民謠の普及化を語るものであらう。

昨年の秋から年一回づゝ、明治神宮外苑の日本青年館で催される「鄕土舞踊と民謠」の會も好箇の企てであり、民謠の尊さを知らせる力ともなり、ラヂオの普及はまた各地の民謠を都會人にきかせる機運をつくつた。

そうしたところからも新しい民謠をよまれる機運ともなり、古い民謠の研究熱をそゝるであらう、民謠の研究家としては高野班山、藤澤衞彥、湯淺竹山人等が各々熱心に發表した。私の「叙事民謠の研究」(本誌六月號)もこれまであまり人の手をつけない方面のものであつた。

詩の雜誌

詩の雜誌としては若山牧水氏が五月創刊した「詩歌時代」が詩、童謠、民謠、俳句、和歌といふあらゆる韻文の綜合を計畫して華々しく發刊されたが、(十月號)限り廢刊。「日本詩人」は詩話會の解散

と共に六卷十一號を以て廢刊して、詩壇寂寞の感あらしめた。

その他、今年になつて創刊になつたのは地上樂園（六月）川路柳虹の「炬火」（五月）百田宗治の「椎の木」（十月）北原白秋の「近代風景」（十一月）西條八十の「愛誦」（五月）驢馬（五月）詩文學（十一月）等がある。前年度からひきつゞいてるものに、田中清一主筆の「詩神」佐藤惣之助の「詩の家」正富汪洋の「新進詩人」等がある。

評論

「日本詩人」八月號に發表した川路柳虹の「詩に於ける內容律の否定」は、昨年三月に同誌に發表した「新律格論」のつゞきであつて、昨年私が萬朝報紙上で寸評を試みた關係上、それにも言及したことであり、自由詩の根本問題として可なり重要だと思ふので、私はこれに對して更に「日本詩人」九月號及び「地上樂園」九月號に比較的詳しく論じたのである。私のは徹底したる內容律の肯定であるので、その點かなりの間隔あるが。その後、川路君からは議論としての回答をきくことが出來なかつたが、いづれ今後もそれだけで終らない興味ある問題である。荻原朔太郎の「日本詩人」十月號に發表した「自由詩の矛盾觀念」といふ長論文は川路君を右傾として詩の形式の完成を求むるものとし私を

左傾として散文化を平氣とするものゝやうに說いてゐたが、說きかたはさう形付けてしまへば都合がいゝが、論理の筋は不明確である。近代詩の特質は古い抒情詩の型を內容形式ともに破るところにあるので、要するに詩の概念から解放された「新しい詩」の目標をどうするかといふことをきはめねばならないだらう。ともかく「日本詩人」も無くなつて見れば活氣ある惜しまれる雜誌であつた。

その他

飜譯として堀口大學の「月下の一群」「空しき花束」があり、矢野峰人、富田碎花、幡谷正雄等の英詩の研究、長沼重隆の「ホイットマン研究」にも見るべきものがあつた。詩に關するものでは、川路柳虹の「作詩の新研究」（一月）井上康文の「現代の詩史と詩講話」（一月）中西悟堂の大正詩讀本二卷。北原白秋の感想集「風景は動く」（六月）私の「詩と農民生活」（二月）「詩の創作と鑑賞」（十一月）等がある。

作品表と詩

壹月

詩・散文詩

『近代風景』忘れもの（河井酔茗）建設（川路柳虹）山茶花（佐藤惣之助）苔から苔へあるいてゆく人（大手拓次）空車（府川惠造）雪の川（平木二六）北國（木水彌三郎）翠（岡崎清一郎）浴女（竹中郁）あさり（藪田義雄）黒子生涯（近藤東）寢息（岩佐頼太郎）マニキュアーをする夫人（矢部季）眺望（長尾豐）秋が近い（赤松月船）受胎（百田宗治）田家の月夜（北原白秋）吉原（萩原朔太郎）冬は來らんとす（三木露風）ほのほのくらがりに此一隊はすぎゆく（大手拓次）鮭鑵詰製造餘錄（川上澄生）貧乏の詩（岡崎清一郎）生きた風景（小原義生）曇天の停車場（尾形龜之助）茶の花（本澤浩二郎）

『愛誦』初冬の日ざし（富田碎花）短詩（下田惟直）孕める秋（横山青娥）額の上の蛔の與る觸感（加藤憲治）薔薇（佐伯孝夫）愛唱（シモンズ、寺下辰夫）旅を想ふ（柴山晴美）はつれ（西條八十）エスパハンの薔薇（ルコント・ド・リイル、堀口大學譯）イヴンヂエリン（ロングフエロー、清水暉吉譯）

『詩神』雪に就て（山村暮鳥）少年篇四篇（大鹿卓）冬薔薇（梶浦正之）眞夜中の誕生（田中清一）立木集七篇（百田宗治）鶯鳥よ、とべ（佐藤惣之助）若者よ（千家元麿）暗黑の踊り（福田正夫）家（尾形龜之助）新らしき海へ（手塚武）貧しい勤人（田邊耕一郎）雪の夜路（宮本吉次）曇つた港町點景（竹内越村）秋夜（栗間久）淫賣婦（青木茂若）やいたをたてる母子（坂本遼）雜題（平木二六）第四階級（草野心平）船（神谷暢）

『地上樂園』現世（白鳥省吾）收穫の火（木川新太郎）漂流者の墓（國井淳一）煉瓦の建物（三上英生）北海黎明詩篇（大澤重夫）瞑想（泉浩郎）南支那遊詩拾遺（中村恭二郎）悲しき送放者（胡麻政和）秋夜（高橋たか子）大機趣（月原橙一郎）

『驢馬』萬年大學生の作者に（中野重治）昨年は靜かな日だつた（窪川鶴次郎）女車掌（宮木喜久雄）ギヨム・アポリネエル詩抄（堀辰雄譯）

『椎の木』深夜（高村光太郎）少年（佐藤惣之助）天上の聲（菊池ゆき）幼年（丸山薫）かなりや（岡本唉子）雪もよひ（野長瀨正夫）大空に（後藤八重子）ポナパルト（三好達治）待つてゐる（レニエ、三好達治譯）水（青木茂若）忍路（伊藤整）鐵橋の秋（山口斌）犬（安藤眞澄）出勤（飯島貞）

『森林』偶感（百田宗治）未來（佐藤清）詩七篇（杉江重英）おもひで（宮崎孝政）

『詩之家』無爲譚（佐藤惣之助）弱いからである風吹き樣がある（倉持玉之助）鰯（門脇英鎭）新生（英美子）くずれた樂器（山田忠夫）無題（境川羊介）木の實と少女（壺田花子）秋・山（栗間久）長女詩篇（岩間芳雪）驢馬の鳴く夕方（久保田彦保）流產された詩（潮田武雄）晴雪の朝（天野靜子）冬の生誕（椎橋好）悲しき牛牽き（藪田久雄）空の寫實派（高島茂）銀鱗哀唱（戸塚八重子）望郷（竹中久七）浮浪兒（渡邊修三）朝顔（清水房之丞）

『詩壇消息』或る晩（千家元麿）石（角田竹夫）陶器（小畠貞一）放馬所（石川善助）海三點（平木二六）遠く想ひを馳せて（宮本吉次）安息のない夜（西谷勢之介）蚊帳（田邊耕一郎）仇役は誰か（岡村二一）夜（神戸雄一）無殘なる美少女に吠える（草野心平）孤獨（大埜勇次）柿（坂本哲郎）立つて行け（大澤重夫）燕（神谷暢二）煙草（村井武生）星と樹木の世界（小方又星）

『新進詩人』掌上の噴水（吉川則比古）落葉を聽く（小田信一）私の詩に與へる（安部宙之助）秋（小島與三郎）都會（井上恒二）ほほづき連禱（川上賤緒）鐘の音（宮川克巳）

『炬火』偏心性（野口米次郎）森の中（モレアス・堀口大學）農家（山崎泰雄）動物園衰亡（大鹿卓）おまへを憶ふ詩（福原清）睡眠と眼覺（村野四郎）墓（都築益世）追憶を捨てる（今岡弘）

『犀』猫は火のそばに（ジヤム、前田鐵之助譯）孤獨（林信一）花火（春山行夫）ヒヨコ（北川冬彥）窓と鉢植と私（柴山義雄）夜明前（加藤猛太郎）年暮（小島與三郎）冬になる空（多賀圭三郎）夜雨（福富菁兒）

『烽火』月と地球（生田花世）支笏湖畔（加藤愛夫）園栗（麻生恒太郎）

『帆船』北國のピエロ（大谷忠一郎）驢馬（大谷忠一郎）浮かない顔（鈴木顔兒）暮れがたを歩む（阿部哲）私たちは持つてゐる白と黑（栗木幸次郎）某停車場附近の風景（小田揚）意想詩（多田不二）明るく暗い心（平澤貞二郎）燕（笹澤美明）火事（デーメル、笹澤美明譯）

『詩洋』物語詩（前田鐵之助）黃牛と薊の花（中西悟堂）黎明の公園（阿野赤鳥）高原の秋（井上誠）佛蘭西アルプス小景（山口宇多子）思郷（佐伯郁郎）まぼろしの船（伊

藤喬信)黄昏の露臺に(田中令三)涙ぐましき沈默(宮本正清)電信工夫の歌へる(塚原嘉重)冬を迎へる詩(岡より子)内在寂光篇(長岡孝一)山貌(鹽月武彦) 風と落葉(野路白虹)アンリ・ド・レニエ詩抄(前田鐵之助譯)

『現代文藝』樂園(北川冬彦)ドン(田邊若男)あくがれ(岩間純)春の山(江口章子)

『詩文學』墓場にて(大藤治郎)三面記事の歌 (三輪猛雄)清閑(深尾須磨子)大都會(重廣虎雄) 私は憂鬱な一日を過した(江森盛彌)疲勞(今井武治)存在の眞中にて(村松正俊)人間(相川俊孝)無題(高橋新吉)麥の穗をふみ(廣澤一雄)クロポトキン追想(ダントン、新居格譯)

『待望』武州烏山 (散文詩) ブランデンブルグ司伴樂(散文詩)夜、林をぬけて、追憶(尾崎喜八)

『原始』愚かな夢(生田春月)

『白山詩人』友に送る詩(山本和夫)栗(乾直惠)窓 (長尾和男)水兵(河本正義)

『京都詩人』僕は急ぐ(福田正夫)野の夕暮(中西悟堂)

毀れた樂器(北川冬彦)詩一篇 (宮崎孝政) 雪かみなり(小畠貞一)落葉の中(坂本茂子)赤い旗(中山伸)寂心哲學(柴山晴美)民國十五年の園遊會(安西冬衛)十一月の午後(尾形龜之助)日曜(兒玉笛麿)朝と黄昏(井上康文)

ひとり歩く(大黒貞勝)京(吉田一穗)きのふのはな(岩井信實)笑ひくづれる女 (岩佐賴太郎)焚火(角田竹夫)冷たい感情 (杉江重英)古き市街 (瀧口武士) 野の殘照(栗間久) 冬夜 (黄瀛) Parinivāna (相川俊孝)京都にて(金子光晴)弱い草花(岩井信實)

『新生』最期の素描(堀場正夫)草原にて(鵜飼選吉)靜夜の蜃氣樓(安井龍)秋(棚木一良)街をゆく妖女 (永瀨清子)警察署と月(素木若之助)友へ(野々部逸二) ぢつと目をとぢて(中山伸)初冬(高木斐瑳雄)

『亞』煙突と十二月の畫(尾形龜之助)薪(安西冬衛)羽子板(瀧口武士)

『圓筒帽』自由大佐の服に就て(上田敏雄)出漁 (大谷東策)狂人と鏡(今埜紫藻)駱駝(河見一三)未墾林(小熊秀雄)ちゆうりつぷ四瓣(涼木優輝)悲戀(塚田武四)生の神秘と悅び(廣瀨操吉)

『農民詩人』無產者の戰ひ、無政府の詩、マルキストの葬式(遠地輝武)

『詩學』能樂師清阿彌(南江二郎)

『綠林』眞人間(久保格)冬の晩(後藤宗一郎)

『艸畑』秋日和(中野友英)山茶花 (岩崎二郎) 水の上(鳥井健吉)柿の木(田尾榮一)

『花畑』とかげ(菊田一夫)向日葵(安藤一郎)樹蔭のおやつ(古河定子)化粧(深水澄子)沼に沈んだ鐘の話・叙事詩(平享爾)

『亞細亞詩脈』冬(佐藤清)無題(恩地孝)雪の日に (岩田よしの)歪められた笛(後藤郁子)明暗(上田忠男) 淫賣婦(郡山弘史)チェッ(内野健兒) 產土詩抄(ソロゲーブ、加藤郁哉譯)

『詩と戲曲』生活を足に見た、若い女、こゝろよき洋風おとなしい風景、コンポジション、赤い風船(野村達二)

『圓筒』カニ(北川冬彦)惡夢(北條昂)少女(山田義雄)

『島田磐也パンフレット』童心詩篇(磐也)

『孔雀』戀の棺 (西條八十) 詩と煙草 (間司つれみ)

ADIEU (杉浦伊作)一匙のココア(宮崎紗久子)

『歡祭』白梅(水島滿久男)慾心(神山時雄) 告別(宮本重)時の觸手(湯川宗二)詩十一篇(江口隼人)

『聖樹』影に(富田碎花)冬(大橋眞弓)海(關澤げんじ)笑ひを賣る座(半井康次郎)雨(奥田茂湖)空の韻律 (永井叔)冬(鈴木詩郎)

『街』霜解(松崎仲雄)港(井田貞衞)黑(角田種三)花火(齋藤さい)燈下(伊藤信吉)

『羅甸區』晩課書(佐藤英麿)桂魚(金子光晴) 島(神谷暢) Albert Samain の雪(春山行夫)杉(加藤直一) 都市の欲情(東野純)挽歌(吉田一穗)墓地(大鹿卓)

『詩魔』深更(館高重)カナリヤと理髮師(菊地亮)思慕の手をのべる(井上康文)友へ(久芳開)人間と言ふものは(山田義雄)ラ、クラルテの塑像(山本純三) なにもかもわびしい(壺田花子)友情を感ずる(岩間芳雪)

『野獸群』空よもつと照つてくれ (江口隼人)地球(廣澤一雄)

『アクシオン』薄暗い部屋にて(壺井繁次) 寂光(三好十郎)秋の歌(上野壯夫)

『咄』黄昏は寂し(室木豐春)洛南夏宵思慕(西村和文)眞晝の寂寥圖(栗間久)雪(青木茂若) 黄昏の病室(祓川光義)

『蜂』雪・朝(岩間純)囚人馬車(柘植桃夫)朝の風景(杉浦杜夫)炬火(三枝幸夫)兵隊であれば青春よ・蜂よ(中村由來人)

『黎明』鍬と山茶花、無花果、古風な樹木等 (星野胤弘)

『紀伊詩人』秋(高井みたび) 雨の日の待合室(福井久治) ある喫茶店で(安本隆太郎) 蒼さびた田園(胡麻政和)

『凡庸詩人』桃色の座布團(清水清)岩梨の實の赤に熟れる頃(和田信夫)農村傳統(鈴木健太郎)

『現代』海上風靜(白鳥省吾)雪夜のわかれ(川路柳虹)

『婦人之友』歎息(佐藤春夫) 呼び出してくれ(室生犀星)

『時事新報』詩壇更新(佐藤惣之助) 狂想曲(佐藤惣之助)哀憐(佐藤惣之助)少年文學(佐藤惣之助)

『報知新聞』女身禮讃(中田信子)

『中央新聞』子を辭す(田中聖二)星を仰いで、野原へ出よう、山を登る(金井新作)魚(江口隼人)網島印象(竹内越村)

『少女畫報』空翔ける美女・叙事詩(福田正夫)

『少年倶樂部』太陽の方へ(千家元麿)

『生活者』火星が出てゐる(高村光太郎) 寂寞(高橋元吉)詩四篇(宮崎丈二)散文詩二つ(吉田泰司)

『文藝公論』ブルジョアのお嬢さんに贈る(萩原恭次郎)死滅の向ふに(松本淳三)

『令女界』追羽子の歌(生田春月)すかんぽ(竹久夢二)フラスコ(金子光晴)

『新青年』印旛おとし(北原白秋)

『若草』私の詩(尾崎喜八)わが家(赤松月船)版畫風なもの(石川善助)星のない夜(梶浦正之) 地下道(西谷勢之助)靜日(神谷暢二)ある心の風景(友谷靜榮)夜霧(村井武生)御告の鐘(春山行夫)棒の穗(勝承夫)

童謡・民謡・小曲

『近代風景』硯に彫られた白い鷺(平木二六)寢るときのおいのり(サトウ・ハチロー)角笛(渡邊波光)海岸(北原白秋)

『愛誦』異國(西條八十)秋雨(春山行夫) 戀(間司つれみ)

『詩神』山の彷徨者の唄(前田いさむ)三篇(松村又一)財布の唄(大關五郎)

『地上樂園』農民小唄(中村孝助)

『雄辯』世界の子供(北原白秋)越の山々(川路柳虹)

『苦樂』美男(西條八十)船頭さん(北原白秋)

『アサヒグラフ』兎子兎(野口雨情)

『少女畫報』さびしき初春(下田惟直) 日記の扉に(加藤まさを)ゆふぐれ(水谷まさる) 都の冬(サトウ・ハチロー)

『子供の友』キイロイクダモノ(河井酔茗)雪ンなかの

すゞめ(葛原しげる)にげた風船(西條八十)

『コドモノクニ』すべり橋(北原白秋)ニイサンキタナ(葛原しげる)寶船(野口雨情)

『少年倶樂部』沼べり(北原白秋)

『コドモアサヒ』汽車みち(北原白秋) 角兵衛獅子(藤田健次) サンタクロース(西條八十)

『キング』ころ〳〵ころ橋(北原白秋)

『少女倶樂部』風(北原白秋)あの雲で(濱田廣介)靴のあと(水谷まさる)マリヤさま(百田宗治) 歌留多の宵(川路柳虹)およ羽根小羽根(西條八十)門松(野口雨情)新春の歌(加藤まさを)勿忘草(竹久夢二)

『令女界』春さむく(西條八十)

『赤い鳥』ゐろり、森の裏、かりうど(北原白秋)

『幼年倶樂部』いぬのそり、伊勢えび(北原白秋)

『愛兒の友』豆自動車(北原白秋)

『新青年』印旛おとし、宵(北原白秋)

『婦人倶樂部』うら島(北原白秋)

『福岡日日新聞』兵隊さん(北原白秋)

『週刊朝日』畑の國から來た話(松本淳三)赤い鳥と與平さん(福田正夫)

『コドモノクニ』だれがえらい?(西條八十)今すぐちやん(水谷まさる)九匹と十匹(濱田廣介)

『コドモアサヒ』兎のアンテナ(葛原しげる)おしまひの鐘(水谷まさる)シロクマノスケート(福田正夫)

評論・批評・紹介・研究

『改造』ラムボオとヴエルレエヌ(堀口大學)詩の消滅(西脇順三郎)

『近代風景』朝は呼ぶ(北原白秋)新風景感(茅野蕭々)未知の追求(富田碎花)讀詩有言(西川勉)詩壇時評(赤松月船)

『愛誦』山上憶良(横山青娥)バイロンを巡りて(幡谷正雄)マラルメの象徴的手法(西條八十) 近代英誌研究(寺下辰夫)

『詩神』詩話會から日本詩會へ(服部嘉香) ヨネ・ノグチ論(手塚武)詩の先驗(川路柳虹) 新時代萬歲(萩原朔太郎)『流れの秘密』(清水晴吉)萩原恭次郎君に答ふ(大埜勇次)近著雜感(青木茂若)所謂短詩の一考察(坂本精

市)新著詩集批評(梶浦正之)『海の聖母』に就て(神谷暢)

『地上樂園』朝鮮の農民歌謠(金敎熄)

『驢馬』詩に關する二三の斷片(中野重治)

『椎の木』象徵について(萩原朔太郎)蜂の小舍にて(春山行夫)

『詩壇消息』評論二つ(角田竹夫)親切な批評(大澤重夫)日本人にして英國詩壇の人々(大埜勇次)

『新進詩人』東洋より(正富汪洋)珊瑚礁(安部宙之助)

『犀』『檢溫器と花』讀後感(福富菁兒)

『烽火』『東海詩集』雜觀(鈴木惣之助)

『帆船』詩壇月評(平澤貞二郎)

『詩文學』新民謠論斷片(伊福部隆輝)新しき詩壇建築の爲め(芳賀融)行動と示唆(小野十三郎)荻原恭次郎論(松澤保和)大正十五年度詩壇回顧(三瀨雄二郎)本年度の女流詩人は(坂本茂子)

『原始』無產階級藝術論の根本問題(伊福部隆輝)無政府主義運動史(新居格)自然發生と目的意識(小野十三郎)プロ文學論批判(芳賀融)

『京都詩人』續近代詩劇論(南江二郎)詩集『檢溫器と花』の讀後感(見玉笛麿)『海の聖母』の橫顏(松本青三)

『新生』中山伸の『北の窓』批評(伴野憲、厚見他嶺夫、野々部逸二、高木斐瑳雄)

『農民詩人』自由人の觀點より、村落自治の理論と農民文藝の要點(遠地輝武)

『詩學』自然主義・理想主義・表現主義(マックス・デリイ、富岡益五郎譯)

『亞細亞詩脈』薄穢ない詩旗(內野健兒)

『歡祭』放浪派序說(江口隼人)

『野獸群』階級文學私見(中野秀人)

『アクシオン』近代ゴシックと日夏耿之介(三好十郎)

『時事新報』詩の建設(川路柳虹)

『報知新聞』フイリップ(赤松月船)

『都新聞』自らを語る(野口米次郎)讀書餘錄(尾崎喜八)

『中央新聞』詩人の向上運動(竹內越村)

『文藝公論』無產階級藝術運動の方向轉換(伊福部隆輝)日本詩壇の現狀を論ず(芳賀融)共同戰線の崩壞(小野十三郎)

『讀賣新聞』現プロレ文藝論の根本的缺陷(伊福部隆輝)『星は殞つ』を讀む(生田花世)

『若草』三人の女性詩人(波邊波)

『炬火』自由詩の可能と誤謬(川路柳虹)「檢溫器と花」(村野四郎)鑛質の美(山崎泰雄)「空しき花束」(倉橋彌一)東海詩集(都築益也)

感想・隨筆・紀行・小品

『改造』晩年の石川啄木(金田一京助)

『近代風景』無題錄(蒲原有明)舌足らずの表現(野口米次郎)ベルセフオオネ(竹友藻風)愚庵のこと(河井酔茗)筑波から(橫瀨夜雨)フリップ・ルムプのこと(北原白秋)

『詩神』足下の世界(野口米次郎)トラウベル訪問記(長沼重隆)

『椎の木』臘月日錄(室生犀星)雜筆(百田宗治)

『詩之家』寸人野筆(佐藤惣之助)

『詩壇消息』詩壇の目高(加藤介春)詩壇的斷想(岡村二一)更然洞漫筆(西谷勢之介)回向院(平木二六)詩と個性(野村吉哉)生きる悲哀(廣瀨操吉)私の第二の子供(中田信子)藝術と生活雜感(宮崎丈二)馬鹿囃(相川俊孝)富士のある窓から(田邊耕一郎)詩壇から葬らるべき人々(草野心平)ガリレオのことその他(神谷暢二)良心(英美子)病床雜記(清水晖吉)一人一黨(坂本哲郎)

『犀』凡兆の句(百田宗治)FRAGMENT(北川冬彥)明窓雜筆(百田宗治)

『烽火』詩についての言葉(生田春月)フランシス・ジャムの日曜(西崎滿洲郎)

『帆船』點魚莊冷言(多田不二)金柑の砂糖煮(笹澤美明)じゅん・こ・きん(鈴木顯兒)

『詩洋』アンリ・ド・レニエ(メタクサ)

『現代文藝』抒情小曲愛誦(井上康文)

『詩文學』ランプの村から(大藤治郎)感想感想(遠地輝武)詩を生む心(三輪猛雄)斷想(尾瀨敬止)一言(大木雄三)

『待望』讀者への言葉(尾崎喜八)

『白山文學』確認したい氣持(勝承夫)家出した彼女(大村主計)

『京都詩人』自殺した詩人スターリングを悼む(清水晖吉)寂しき書齋(高梨直郎)綠竹青々(岩井信實)

『圓筒帽』福田正夫氏最近の態度(小熊秀雄)混沌禮讚(河見一三)明日の自由詩(涼木優輝)

『亞細亞詩脈』をとこ・をとめを慕ふお話(上田忠男)

『詩覽』三富朽葉を憶ふ(佐藤一英)ALBUM(春山行

夫）

『週刊朝日』年頭隨筆（野口米次郎）映畫と戀愛と女性（井上康文）

『生活者』森の中で（片山敏彦）

『讀賣新聞』直ちに讀者と握手したい（百田宗治）處女雪に描く（井上康文）玩具製造を始める（サトウ・ハチロー）冬日雜筆（中西悟堂）

『令女界』遙かにも遠い冬（高村光太郎）

『若草』新しいといふこと（佐藤春夫）『都の花から』（横瀨夜雨）ペンの神樣（野村吉哉）ある日・翌日（萩原恭次郎）

『女性』フレツプ・トリツプ（北原白秋）

『新潮』新時代に望む（萩原朔太郎）

小說・戲曲

『近代風景』喫茶と花と（室生犀星）

『驢馬』籠拔け（西澤隆二）

『新進詩人』地に刄を出したいために來た男（正富汪洋）

『詩文學』一本道（松本淳三）

『原始』田舍出の女工（高群逸枝）豚禍・戲曲（江森盛彌）

『京都詩人』妖星の座・詩劇（田中均）

『詩學』戲曲の自由戲曲の中の自稱智者（ゲルステンバアグ、外山卯三郎譯）

『詩と戲曲』娘・戲曲（倉光賢治）

『野獸群』乞食の大將（金熙明）

『アクシヨオン』遺書（上野壯夫）

『若草』基督の花嫁（橋爪健）母の歲（井東憲）雨（清水孝祐）

『新潮』木枯（室生犀星）

火星が出てゐる

高村光太郎

火星が出てゐる。

要するにどうすればいいか、といふ問は、
折角たどつた思索の道を初にかへす。
要するにどうでもいいのか。
否、否、無限大に否。
待つがいい、さうして第一の力を以て、
そんな問に急ぐお前の弱さを滅ぼすがいい。
豫約された結果を思ふのは卑しい。
正しい源因に生きる事、
それのみが淨い。

お前の心を更にゆすぶり返す爲には、
もう一度頭を高くあげて、
この寢靜まつた暗い駒込臺の眞上に光る
あの大きな、まつかな星を見るがいい。

火星が出てゐる。

木枯が皂角子（さいかち）の實をからから鳴らす。
犬がさかつて狂奔する。
落葉をふんで
藪を出れば
崖。

火星が出てゐる。

おれは知らない、
人間が何をせねばならないかを。
おれは知らない、
人間が何を得ようとすべきかを。
おれは思ふ、
人間が天然の一片であり得る事を。
おれは感ずる、
人間が無に等しい故に大である事を。
ああ、おれは身ぶるひする、
無に等しい事のたのもしさよ。
無にさへ滅した
必然の瀰漫よ。

火星が出てゐる。

天がうしろに廻轉する。
無數の遠い世界が登つて來る。
おれはもう昔の詩人のやうに、
天使のまたたきを其の中に見ない。
おれはただ聞く、
深いエエテルの波のやうなものを。
さうしてただ、
世界が止め度なく美しい。
見知らぬものだらけな無氣味な美が
ひしひしとおれに迫る。

火星が出てゐる。

（生活者）

初冬の日ざし

富田碎花

病に惱んだ日の
何と私の富んでゐたことよ
少くともあの詩心の氾濫に於いて
血の滴りで書き綴つた詩
詩！

それに健康な日の今日は？
素晴しい順序書き
そして空白な頁
頁！

きのふと同じく風は雲を運び
太陽はあたたかく部屋にさし込む
が、枯れた樹葉ででもあることか
こころはそそくさと慌しいばかりだ
かうして書くのは
墓場へのねかしつけの歌——
たどたどしい曲節に
みづからを蝕む日がつづく。

（愛誦）

山茶花

佐藤惣之助

光線の瀧と
霜のするどい澎氣に
清研な眦は裂け

花は花であることを斷言する
ひとよ
わが身も感情の黑髪を切斷しやう
花は幼くして
その花文を斷念した
切々として地に歸つた。

（近代風景）

自畫像

多田不二

齒朶
古い石垣に生えた齒朶の葉
こわれた時計にまとひつく願ひ
おそろしい遺傳が棲む

舊世紀の捨てられた僧帽
感情はひからびた餓
瘠せた哲學者
のこされた雲雀の巢
藝術は　愛は　とほい月暈

（帆船）

望鄕

山にはやくも三たびの秋をかさね

木水彌三郎

しぐれを、怨めど
あたらしき秋衣もなくて、
木の實は
夜々の石、搏つや

雲、搏つや。

（近代風景）

マニキユアーをする夫人

矢部季

するり　するり
爪を渡る　やすり
かすかに　ふるへる　感觸のむずがゆさ
ほつと　ほてる
桃色眞珠の爪
うれしさうに
はねかへす　大空の反射

するり　するり　するり
身にしみるやうな　金屬の
心地よい痛さ　つめたさ
總身の神經が指端に集つて
光る
夢を見る瞳は
アイロンをあてた
瞼毛の
防風林を透して
よどまない湖水の　靜かさを思はする
夜はベルベットの
綠深いカーテンの陰に
しのび泣く　やすりの音
するり　するり　すらりつと

（近代風景）

花火

春山行夫

花火を見るのはいいものだ
碧玉の花束が浮いてゐる穹蒼のまんなかに
(蠟燭に心臓に時計に假面
(クレセント、アンダンテ、ピアーノ、ピアニッシモ
(薔薇に薄紫に猫眼石色
マロニエの葉叢の下の白いベンチに
花火を見るのはいいものだ　(犀)

孤情

林信一

窓には黄ろつぽいちらふそくの灯火のやうな
日射しがとろとろと燃えてゐる。
北窓には終日笛のやうな風の悲鳴が、
絶え間なくつづく……
何時か訪人の足跡も絶えた。
沁沁と澄み透るこの孤獨。
窓を閉してしづかにこの心境にとけ入らう。
魂の在所をつきとめよう。

窓ガラスを凍らせるあの嚴寒の來る日までに　(犀)

未來

佐藤清

路傍に坐つてゐる占師のまへを通る時、
私のこゝろは小供らしい恐れを握りつめる、
そして通りすぎた時、
それをにぎりつぶしてしまふ。
そは叡智への反逆であるか、
それとも無智への不安であるか。
あゝ、だが「今」を祝福せよ、
「今まで」を祝福せよ、
「未來」は「今」と「今まで」にある。
宿命よ、私の心のうらどほりより去れ。(森林)

春の晩

平木二六

汽車は暗い向うの方へと出て行つた
空氣は櫻の花の匂ひがした
停車場はあたゝかくひつそりとして　(詩神)

朝

田邊耕一郎

見晴らしに一人住む
めざめは朝の光のなかにひらく。

青葉が鳴る
木犀が鉢の金魚に散る
新しい日のめざめに自然はかうして香を焚くか
洗面器に住む男のために手を洗ひ
鏡に住む別の男のために齒を磨く。

秋はかうして空よりをり
朝ごとの窓に剃刀を磨ぐ。
剃刀は頰髭とともに昨日の埃を剃り落し
生新な今日の誇りをとりかへす。

誇りかに、爽やかであれ
貧しい凡庸な勤人よ
朝ごとに奈翁の誇りとかゞやきとを持つて
見晴らしから街へをりてゆけ。

（詩神）

雪かみなり

小畠貞一

稻妻に
枯枝の圓い雀のかけがとがつた——
さゝ川の水底には
小魚の泥をつきさす濁りが
いくつももくれ上つてゐる
とほかみ鳴が
ごろごろと水邊のあしをふるはせたとき
雪かげをふくんだ北風が
きくりと一と穂を折り
わたしの髪毛をもじつていつた。（京都詩人）

瞑想

泉浩郎

I

あゝ　遠き瞑想の日よ、
冬枯れは　寂しくもある、
かなたの崇嚴な山の心
千古の冬の姿だ
雜木林の葉は落ちる
小鳥は　群れる
わたしは　少年らしい思索を持つた
村童の日を考へるのだ。

II

村童の一人
吉は今　何處にゐるのやら
去年の　たよりにや
流浪の　勞働者になつたといふ
吉は　鳥打ちの名人ぢやつたが。
八ちやんの墓碑は立つてゐる
シベリアで戰死をしたが
八ちやんの　子供はスクスク伸びてゐる。
三郎よ、
三郎は小作人で　もくもくと働いてゐたが、
親の言ふことを　きかずに
自由勞働者の仲間に入つて行つた。

III

おゝ　ふるさとの山よ、
この世相を見ないか

別離や勞働や放浪や不安や
お正月が來たといふのに
一枚の年賀狀すら家に來ないといふ、
幼き日の　村童を思ふのだ。　（地上樂園）

僧　耶

伊藤喬信

松吠ゆる月明
僧舍の前に彳む君の姿は

竹林うしろに生へたり
このよ稚竹のしのびそだつ
ひゞき　ひゞき　ひゞき
ああ　心さわがし
生れ子よ　生れ子よ

すでにおそれをのゝき。　（詩洋）

佛蘭西アルプス小景

山口宇多子

丘は高い
犬の吠える聲が頭上の丘にきこえ出した。
まばゆい光線を透して
三人の子供の姿が動いて居る。
もう一息だ、そこに牧人の小屋がある！
その忠實な犬がしきりと私達を吠え出した。
まめな犬よ
私達はお前の主人の新しい牛乳を飲みに來たのだ
女主人が犬の聲を聞きつけて來たらしい

一つ姿が增えたやうだ。
今日は！
おゝ犬よ　安心して下りて來るのか
まめな犬よ　さあ案内役だ。

貧しい牧人の子供ながら　フランスのお孃さん
今日は！
薪でこしらへたお人形を抱いたアルプスのお孃
さん！
私達を遠くから眺めて居るけれど
外國人だと云ふ事もよく見わけの出來ない
可愛らしい娘さん。
ほら丘の下の方からお父さんがトボ〳〵と歸つて來た
下の村に買ひ出しに行つて來たか、
大きなパンをかかへて小道を歩いて來る
では　さようなら　娘さん！　（メイジュ附近で）
（詩洋）

貳月

詩・散文詩

『文章倶樂部』嚙られた頭(渡邊渡)木枯し(平木二六)流涙孤獨(古賀殘星)雲のやうな(村井武生)

『近代風景』奉悼曲(北原白秋)芝(三木露風)小さい彼女(室生犀星)夢をうむ五月(大手拓次)秋雪(木水彌三郎)薄ら日(本澤浩二郎)しぐれ(府川惠造)菊(近藤東)化粧(竹中郁)魚(藪田義雄)凧に(中西悟堂)獨樂(百田宗治)卽興二篇(大木篤夫)冬(千家元麿)指の群(大手拓次)

『詩神』美しき憂鬱(加藤介春)老境(服部嘉香)黑猫(福田正夫)十二月(千家元麿)森(金子光晴)沿海地方(石川善助)神樣に與ふ(野村吉哉)世界(土方定一)逆齒に嚙み殺されたる同胞一匹(草野心平)朝靄(八百板芳夫)きせるを磨いてゐる(林靜夫)歡喜(金井新作)埋葬曲(大埜勇次)電信柱(鈴木信治)小指・叙事詩(佐々木秀光)

『地上樂園』北風他六篇(白鳥省吉)どちらが辱かしめられたか(中村恭二郎)種蒔く人(國井淳一)田園に光あり(大澤重夫)曇り日(菊地重三郎)路(胡麻政和)

『新進詩人』春着の裏(正富汪洋)冬中病後(村田勳)象徵詩三篇(吉川則比古)詩三篇(安部宙之助)

『太平洋詩人』夜は凍る(尾形龜之助)無題(神戸雄一)竹の小路で(角田竹夫)砂を嚙むように(林芙美子)第百階級(草野心平)蝙蝠(目次緋紗子)狼(手塚武)天明の歌(黃瀛)墜ちた螢(北川冬彥)卽興詩(平木二六)風・風(兒玉勉伍)暮冬の爐邊(青木茂若)寢臺(森竹夫)瓦斯燈(河本正義)VULVAに就て(淸水孝祐)小犬(新島榮治)或る銃獵家の獲物を見て(尾崎喜八)硫酸とウヰスキー(東宮七男)黑い紙を貼つた!(渡邊渡)死者の傍らに立つて(マルク・ド・ラレギー尾崎喜八譯)病院にて(アルフレッド・フアハツ野川隆譯)

『抒情詩』日沒に(中西悟堂)陽の匂(角田竹夫)ある風景(加藤郁哉)自稱イマジストの詩(青旗青太郎)印象詩派詩篇(井上多喜三郎)くもざる(森脇達夫)白紙の回想(兒玉笛麿)北海の詩(小柄沙皎)靜かなる部屋(米田俊郎)土のもつ宿命(胡麻政和)港から(淸水孝祐)

『詩之家』海(久保田保彥)雨の中のホテル・カシノ(潮田武雄)市街(渡邊修三)靜かな爭鬪(英美子)季節(竹中久七)雪娘と雷神(壺田花子)月・初冬(鹽川秀次郎)黑薔

薇(天野靜子)若き人妻・母なればこそ(岩間純)冬(淸水房之丞)冬(森千魁)

『椎の木』僞妄(後藤八重子)霜柱(菊地ゆき)惡夢(伊藤整)青木(青木茂若)路次のうら(小島與三郎)夕顏(室木豐春)初春雜詠(安藤眞澄)感謝(山縣深雪)濱菜(山口秋月)垣根にむらがるもの(百田宗治)

『詩洋』別辭(前田鐵之助)闇黑(ポール・クローデル前田鐵之助)朝のよろこび(長岡孝一)謎(井上誠)生命(宮本正淸)夕食時(伊藤喬信)

『炬火』萱原にて(能村潔)催眠その他(村野四郎)夏日(小方又星)憂愁を踏みつける(今岡弘)おるがん(近藤益雄)殘雪(一瀨直行)海(下條綾子)

『原始』昨日の部屋の入口に立つて戸を閉めろ(萩原恭次郎)故郷の匂ひ(廣澤一雄)

『太陽花』自轉車(森三千代)名畫(英美子)亂視時代(永瀨淸子)交錯された夜の詩(天野靜子)詩人の一人(佐々木秀光)カフエ(千家元麿)一つの生活(永見七郎)雲(西谷勢之助)わが詩抄(新良孝平)森の中(廣瀨操吉)冬の夜(堀內保)一人の若い納豆賣(森脇達夫)美(山縣深雪)駒澤で・散文詩(角田竹夫)

『街』球(伊藤信吉)兵士と砂金(晴山昌邦)夜の病室(三谷川篤)月と駱駝と少女(井田貞衞)

『亞』春(安西冬衞)早春(瀧口武士)雨と街(尾形龜之助)

『驢馬』腹(室生犀星)天使達が(堀辰雄)道路を築く(中野重治)覺醒が聽えない(西澤隆二)

『新生』夜あけの風よ(素木若之助)白い月(中山伸)太鼓屋の店先で(高木斐瑳雄)木曾の瀨鳴り(伴野憲)友の來た夜は(廣瀨操吉)歲暮近く(伊藤二三夫)春風と町(鵜飼選吉)

『港』無題(三浦第朔)祖先の家の素顏(澤田伊四郎)北陸の熱都(更科源藏)風寒き夜半(谷內一郎)

『新興藝術』太陽のはなむけ(比良尾勝人)痛ましき死だ!(曾根茂)あつ!豫言か?(早川龍二)

『燦火』新しき愛(メリケ・生田春月)氣分としての春(生田花世)旅にある男の歌へる(廡生恒太郎)雪に暮れる(加藤愛夫)

『掌』白夜夢魂詩篇(新村光秋)停電(室木豐春)嚴冬野景(田畑善兵衞)雪と青空(棚木一良)能登へ(島藪秀雄)

『綠林』春を待つ歌(久保格)鍬(後藤宗一郎)

『ミミミノ春』君の身を嘲弄する者の前に(山本浩)雪の蛙(張學)

『蜉蝣』海へゆく道(岩崎二郎)晝の町(島井健吉)別れた後の語らひ(清水好太郎)一個人の自覺(田尾榮一)涙間に(中野友英)

『圓筒帽』神呪寺如意輪觀音像(大谷東策)夕陽と外人(小池榮壽)酒場よ(廣瀨操吉)乞食三態(河見一三)

『牧人』愛別(西澤安雄)長春街上詩篇(古賀世記)

『詩戰』吾等の一九二七年へ贈る(辻善明)曠原の冬夜の二時を歩く「俺」だ(安岡黑村)借錢と人生(多田文三)

『陰陽師』ハチロー鼻唄(佐藤八郎)奥山詩抄(篠田丹後)高層縊死(大西鵜之介)喇叭の音が聞える時(清水好太郎)

『礁』春、陸月の丘に立ちて(植村敏夫)母の命日に(栗川久雄)鄕愁・散文詩(小林勝平)

『新年』手(八木末雄)ゲルマンへ!(草野心平)賭博(寒河江眞之助)舟江冬雨・夜(新島節)

『聖火』仕事の後に(染谷秋月)秋・花火(杉浦杜夫)冬の山への感情(小原義正)寒月の街(山室孝)

『騎馬隊』少女・春の曲者(野長瀨正夫)出漁(和田吾朗)俺の町(石原政明)

『花畑』どすぐろい情熱(深水澄子)崩れてゆく自分(平享爾)冬にゆめみる花々(安藤一郎)羞恥(菊田一夫)

『蟇』龍膽の花をある女教師におくるとてうたへる(佐藤一英)自己撞着のエンベロープ(中村由來人)月夜の窓(杉浦杜夫)

『黎明』古風な森(星野胤弘)

『苦樂』歩みつゝ(北原白秋)

『婦人倶樂部』雪の兩國(川路柳虹)

『婦人の友』マリア觀音(白鳥省吾)

『報知新聞』山村春寒(中田信子)

『亞細亞詩脈』雪明り・一本のシガレット(山本春雄)村の避暑地(清水房之丞)友のひとりに(岩田よしの)落花一面の中に立つ(上田忠男)寢臺(群山弘史)秋の夢(横堀眞太郎)

『生活者』ゴッホ禮讃(眞壁仁)春はつきない(片山敏彦)

『令女界』腹(室生犀星)君の心(三木露風)冬の夜のソネット(尾崎喜八)野に立ちて(勝承夫)鶯は朝を鳴く(赤松月船)

『讀賣新聞』神に就て(原理充理)再びマンモス時代(草野心平)雪(神戸雄一)

『若草』花に雨(廣瀨操吉)

『女性』歩みつゝ(北原白秋)

童謠・民謠・小曲

『近代風景』しのぶ思ひ(青島有美)早春(古村徹二)村童菜果園(平木二六)風(渡邊波光)

『地上樂園』春を待つ・叙事民謠(松村又一)農民小唄(中村孝助)

『新進詩人』抒情小曲(大鹿照雄)

『現代』臺場沖(北原白秋)

『雄辯』むすめ戸あけな(大木篤夫)

『苦樂』藤の花(野口雨情)

『婦人倶樂部』傘なし子雀(藤田健次)

『少女畫報』後姿(加藤まさを)征矢(水谷まさる)あはれいつのまに(下田惟直)

『コドモノクニ』起重機(北原白秋)ニヤンニヤン祭(野口雨情)雪の山(平木二六)お月さま(濱田廣介)

『子供の友』象(三木露風)りんごの皮むき(水谷まさる)ころころころばせゆきだるま(葛原滋)

『コドモ・アサヒ』兎の讀本(野口雨情)おろす(北原白秋)すゞめ(河井醉茗)すゞめ(西村醉香)紙凧(藤田健次)竹馬(三木露風)ころげたこけた(葛原滋)

『少年倶樂部』二月の朝(北原白秋)雪の上の道(相馬御風)梅の花(三木露風)

『少女倶樂部』一つの星(川路柳虹)朝と午後(西條八十)雪(三木露風)みんな遠い(ゆめ・たけひさ)

『赤い鳥』象の子は、二つの部室、鐵工場(北原白秋)

『女性』とぼんとぼん(北原白秋)

『小學文藝』三宅坂(花岡謙二)

評論・批評・紹介・研究

『近代風景』朝は呼ぶ、嵐(北原白秋)印象的散文は詩に非ず(萩原朔太郎)詩壇時事(尾崎喜八)未知の追求(富田碎花)農民詩人コルツオスキー(幡谷正雄)

『詩神』團體的詩運動の利得と不能性(服部嘉香)日本古代の詩と民衆(野村吉哉)藝術の永遠性(廣瀨操吉)驚異すべき收穫(能村潔)評家の態度を論ず(坂本精市)エドガア・リー・マスタース(清水暉吉)ロシヤ現代詩人の印象(尾瀨敬止)

『地上樂園』マアカムの「鍬持つ人」(幡谷正雄)現代英詩講話(モンロー・清水暉吉譯)朝鮮の農民歌謠(金敎煥)昭和二年詩壇豫見(大澤重夫)

『新進詩人』東洋より(正富汪洋)
『太平洋詩人』海洋文學の出發點に於ける一考察(渡邊渡)取殘された大地と兄弟の結合(中西悟堂)詩集『半分開いた窓』私評(尾形龜之助)散彈的月評(草野心平)いろいろな詩(神戸雄一)雜一束(萩原恭二郎)太平洋詩人一月號の詩印象批評(北川冬彥)
『抒情詩』新刊詩集批評(角田竹夫)
『詩洋』詩誌時評(井上誠)詩書大觀(前田鐵之助)
『炬火』自由詩の可能と誤謬(川路柳虹)擴がりゆく對象(能村潔)『歪める月』を讀む(今岡弘)不安なる著述(能村潔)『花と金鑛』(近藤益雄)『北の窓』に就て(能村潔)『悲しき生存』を讀みて(一瀨直行)宗教詩集(倉橋彌一)
『原始』プロ文藝運動の認識錯誤につき(芳賀融)村松正俊氏の『都會趣味藝術』論批判(伊福部隆輝)一つの立場から(壺井繁治)
『太陽花』ゲエテの自然觀(大槻憲二)
『詩學』演劇に於ける俳優の問題(外山卯三郎)自然主義・理想主義・表現主義(マックス・デリー富岡益五郎譯)リヒアルト・テシュナアの人形座(南江二郎)或日の繹迦と阿難の對話(竹内勝太郎)
『驢馬』ギヨオム・アポリネエル(堀辰雄)
『新生』東海詩集を讀みつゝ(勝承夫)一月の詩壇評(高木斐瑳雄)
『烽火』都會詩人大藤治郎論(鈴木惣之助)
『圓筒帽』自由詩撲滅論(涼木優輝)
『牧人』詩壇時評(古賀殘星)
『礁』晩年の山村暮鳥とその詩(津村秀剛)
『聖火』詩評(幡谷正雄)
『騎馬隊』詩壇時評(野長瀨正夫)
『時事新報』プロ文學論の進展(芳賀融)
『朝日新聞』教師としてのヴエルレエヌ(堀口大學)
『亞細亞詩脈』亞・亞の詩人(上田忠男)太平洋詩人評(郡山弘史)
『文藝公論』リアリズムの根據(壺井繁治)
『讀賣新聞』昭和詩壇の展望(廣瀨操吉)英さんの『春の顔』(廣瀨操吉)詩壇以前の詩人(萩原朔太郎)今日の文藝より明日の文藝(井東憲)鄕土詩人の擡頭(西條八十)革命期におけるロシヤ藝術界(尾瀨敬止)

感想・隨筆・紀行・小品

『文章倶樂部』ヨネ・ノグチの言葉(野口米次郎)
『近代風景』大野若三郎の歌(河井酔茗)藪中鶯語(佐藤惣之助)田園百景(横瀨夜雨)木版畫工藝(川上澄生)
パイプ(平木二六)午前十時(北原白秋)
『詩神』トラウベル訪問記(長沼重隆)或日經(佐藤惣之助)新しき朝の發見(岡本潤)子雲亭抄記(廣瀨操吉)
『地上樂園』青雲莊雜記(中村恭二郎)寒村風景(泉浩郎)恐縮ながら一私事を(服部嘉香)
『太平洋詩人』包莖手術(野川隆)吾れ自らのもの(福富菁兒)雜記帳(野村吉哉)ハチロー隨筆(サトウ・ハチロー)葛飾通信(岡本潤)讀者への言葉(尾崎喜八)
『抒情詩』野の光の中で(中西悟堂)
『詩之家』個性の解體(佐藤惣之助)雜藁(惣之助)野筆(惣之助)
『椎の木』卷煙草の箱(室生犀星)感想斷片(相馬御風)寒山を讀む日(生田春月)『雪明りの路』の出發點(服部嘉香)雜筆(百田宗治)
『詩洋』ポール・クローデルに(メタクサ)
『太陽花』藝術と人生(目次緋紗子)
『亞』私と詩(尾形龜之助)鵜(安西冬衛)國境滯在覺書(加藤郁哉)春(瀧口武士)春の鱈(安西冬衛)
『新生』雪路羊腸(伴野憲)
『烽火』ル・ロキと死の手(西崎滿洲郎)
『陰陽師』陰陽師の言葉(清水好太郎)
『現代』遠富士(川路柳虹)
『週刊朝日』梅(野口米次郎)
『時事新報』海鳥(中野秀人)飛躍的想片(伊福部隆輝)
『亞細亞詩脈』蒼茫亭日記(郡山弘史)彼女の踵(後藤郁子)
『文藝公論』大藤治郎の追憶(高村光太郎、井汲清治、金子洋文、井上康文、細田源吉、野口米次郎、佐藤惣之助尾崎喜八)治水の聖(佐藤惣之助)
『令女界』紅茶(水谷まさる)丘に想ふ(西條八十)
『讀賣新聞』雪の信濃路・北陸へ(井上康文)雪難記(佐藤惣之助)『雜誌索引』に望む(湯朝竹山人)
『若草』鳥の聲(野口米次郎)春の來る道(竹久夢二)プリンス・アルバアトの戀(米澤順子)菠薐草(平木二六)
『新潮』上春語(佐藤惣之助)
『日光』朝は呼ぶ(北原白秋)

小說・戲曲

『詩神』重衝と千手の戀・詩劇（田中清一）
『原始』猛獸使ひ（高橋新吉）
『驢馬』後を追ふ（窪川鶴次郎）
『文藝公論』斑點（橋爪健）

日没に

中西悟堂

冬枯の野に
日没の巨大な火龍が跳梁する。

大いなる父、太陽よ！
あなたが曠野のすべての枯枯な木立を
黄金の痙攣に顫はす此の時刻に
私は私の限りもない悲しみと惱みとを通して
人間の一切の悲しみと惱みとを
悉くあなたに差出してしまはう。
人間の廣大な笑をあなたに階和させよう。

燃えて、燃えて、夜の中へ崩れ落ちよ！
私達の世界の最も輝かしい花よ！
あなたは今、西天に漂ふ黒雲の團塊を蕊として
その背後から
上空と下空とへ光の花瓣を投げ
その花瓣の氾濫の中に
曠野と地平線との全眺望を
その全生活を、赫赫たる大沈默を包んでゐる

燃えて、燃えて、夜の中へ崩れ落ちよ！
私達の世界の、光明の紋章よ！

大なる父、太陽よ！
あなたの灼熱が一日の晝を燒き盡し
地上のすべての生活と希望とを夜へと運ぶ時刻

に
私は私の夢を通して
人間の一切の偉大な夢を
皆あなたに預けてしまはう。
明日の夜明のために、あなたと一緒に沒落しよう。

（抒情詩）

かげのなかの女の手

大手拓次

かげのなかにふくらむをんなよ、
おまへの手は　やはらかく　むしあつい、
おまへの手はつばきの花のやうに紅くぽつとりとしてゐる、
おまへの手はしろい兎のえりまきのやうにとろとしてゐる。
をんなよ、
おまへの手はこゑをださないで
しのびわらひをしてゐる。
ああ
おまへの手は　ひかりとひかりとをなひまぜる絹の魚。

（近代風景）

龍膽の花をある女教師におくるとてうたへる

佐藤一英

花は紫　ささりんだう
お前は飜へす太いスカート

だが一體誰が裾をのぞくだらう
その空ざまに蹴上げたスカート

お前は不幸にも、山上に
秋の氣高い尼僧と花咲く

（蜂）

挽歌

吉田一穂

海呼ぶ鷗、胸に遙かな波の鼓動を欲して現となく展ける海景
水脈に搖蕩ふ臨終の、今は水庭の薄明に諦めて
靜謐さ御身……
（そを求めつゝ、知らで過ぎ行く我が船の泡立つ天上の聲を聽くか！）
……婚宴の藁に坐して酌むそが新しき盃に、
汝は見しか！　追想の帆影を、
約環を捨てし洋へと解纜して、再び歸らざる若き水夫の……
空翔く鳥の歌は哀しい、噫！　つひに答ひなく、
海の彼方に相呼ぶ姉妹船
風浪の上に悶せし我が數々の衿恃も、今は虚しくたゞ哭けとや消ゆる航跡に。

（羅甸區）

無聊呪禁

石川善助

濱に麥酒瓶の破片を拾ひ
沖行く船を眺めても
慰めがそこにないのを感じる

欠伸がもたげる手の重さ
靜かに水面をさしのぞけば
私は無窮青の空を負うてゐる
疲れたアトラスの姿であつた。　（詩神）

春

安西冬衛

鴨　春は私から始まるのよ。ホラ『鴨の外には
誰も春を語るものはない。おお、まあ、
なんといふ鴨の群だ』つてチエホフつて
ひとが言つてゐるぢやないの。

猫　フン、『どこからか月さしてゐる猫の戀』つ
てネ。

壁に掛けた地圖　ボカボカしてくると、そこら
中が痒くつて——

吊洋燈　日が永いなあ。　（亞）

夏

天野隆一

コップを持つた人が街をゆきます

そのコップの中にさまざまの光を浴びて
舌のやうな金魚がさみしく眠つてゐます

街角で女がかそけく笑つてゐた。（抒情詩）

薄ら日

本澤浩二郎

青木は青き影をなげたり
けふもまた凍み土に。

いまは飛ぶ
枯葉もあらず。

あらはに冴ゆる桐の木
からからと果をたもちたり。

隣り家の壁に滲む
日影のけうとさ。

しみじみと吾子を抱きて
わが觀入る冬の薄ら日。　（近代風景）

蝙蝠

目次緋紗子

私の心の洞に
いつとなしに巣をくつた
不思議な一匹の蝙蝠は
薄暮がかつたたそがれ時

そつと心の洞からぬけ出して
その情慾の翼を
宵闇の中にひろげた。

眞晝の閒洞の中に身をひそめて
かつて味はつた
その熱い口唇の甘さと
いきれる樣な强烈なにほひ
執念深く充血しきつた彼の瞳！

そして又今宵こそ
思ふ存分陶醉しきつた表情に
最後の秋波を送つて
夜明け方ひそかに洞に歸らうと、

それにしても私の情熱と
眞晝の閒昆蟲の生血を吸つた
わたしの唇はほのほの樣に眞紅だ

人閒が一日のつかれでしほれてゐる時分
私の表情はまるで朝の樣に活々としてゐる
髮も亂れてはゐない
爪も磨き上げたこの美しさ

わたしのたくらみを恐れてか
正直な太陽も
闇の爲に終々おひやられてしまつた
さあ急ごう
闇の中の一人舞臺の飛躍を。（太平洋詩人）

參月

詩・散文詩

『三田文學』後期藝術派（上田敏雄）
『近代風景』冬（蒲原有明）白鷺（北原白秋）昭和新唱（河井醉茗）玻璃戸に映る風景（大木篤夫）松林（大鹿卓）雨（竹中郁）清閑（岡崎清一郎）別れ（近藤東）風景他一篇（黃瀛）晝（大關五郎）貝がら（鈴田義雄）春と秋（川上澄生）悲壯なる夜行列車（岩佐頼太郎）色彩樂「赤」（矢部季）Frivolas（平野威馬雄）ちまた（長尾豐）微塵光（府川惠造）常綠樹（平木二六）青い紙の上に薔薇を置く（大手拓次）
『詩神』To Appationata Op. 57（中西悟堂）北國の冬に居て（杉江重英）けふこのごろ（田中清一）からす爪の詩（宮崎孝政）海と婦（石川善助）鷲（神戸雄一）二月失題（尾形龜之助）嵐（村井武生）憂鬱なる（宮本吉次）廿五歳の色（清水好太郎）絕望に就いて（野川隆）落葉（清水暉吉）新しい橋（春山行夫）海は憧れの遊歩場だ（谷村博武）古風な道標（祓川光義）一つの風（推橋好）
『地上樂園』冬の連禱（白鳥省吾）洞穴（國井淳三）青い空の梢にぽつつりと（中村恭二郎）扉の前に佇む者（大澤重夫）友（田中清一）俺の詩は黴毒患者の注射液でばない（千石喜久）凧（菊地重三郎）小作米納入（胡麻政和）佛蘭西農氏詩（ラルギエ、犬田卯譯）
『生活者』冬の日（高橋元吉）秋だ！（今井武夫）
『森林』雪景待父（石川善助）東京の雪（杉江重英）我れ自からへの詩（杉江重英）薔薇を握る子供（宮崎孝政）
『抒情詩』公平な食卓（大貫芳江）木枯（天野隆一）夜ひらく（青旗青太郎）林檎の木（岩井信實）活動寫眞（白井一二）印象詩派詩篇（井上多喜三郎）峽江（降旗足穗）雲（宮崎紗久子）足（寺原秀雄）あくた火（近藤俊佐久）雪夜に（角田竹夫）如月（加藤郁哉）偶然の偶然（胡麻政和）薄明の散歩（佐野嶽夫）農土詩派詩篇（島田芳文）油の眼（長尾和男）噴水（段塚青一）
『驢馬』寂しくする（西澤隆二）冬の花（窪川鶴次郎）寒い朝（山根八重子）詩（堀辰雄）薄けぶり（田島いれ子）死んだ一人（中野重治）
『詩之家』詩を嚙む（鹽川秀次郎）丸くなつてゐる（門脇英鎭）喜悅のまど（英美子）雪壁に咲く（菊池亮）白彊色の橋（高島茂）海鳴りの日（栗間久）二月詩篇（馬來田靜秋）詩筆を捨てる（戸塚八重子）王女（久保田彦保）主

義者の言葉(潮田武雄)雪(竹中久七)

『港』高原を越へて(更科源蔵)噴水(澤田伊四郎)幼兒の食卓(恩地孝四郎) 武藏野(谷内一郎) ひとつの喜び(三浦第朔)

『椎の木』生業(百田宗治)また月夜(伊藤整) 畫(三好達治)二月の空(長澤三郎)寒月(室木豐春)初冬の畠(青木茂若)海龜(千家元麿)日向(大關五郎)なみのおと(後藤八重子)木枯と女(寺原秀雄)

『河』夜坐(岡島繁)印材を作る(瀧波善雅) 流れ(中込友美)日向の羊たち(更科源藏) お母さん(廣田末松)思ひ出(杉山隆)冬(多田俊彦)詩三篇(八束清) 雪の山(鈴木光毅)海(板倉伊八)旅の歌(宮崎丈二)

『詩壇消息』袋蜘蛛(横瀬夜雨)二月(林信一)郊外電車(角田竹夫)風(藤田健次)泉(平木二六) 冬晴れ(宮崎丈二)なやましき晩(宮本吉次)明るい旅(村井武生) 入日(北川冬彦)メランコリーな市街の一角(島田芳文)フツトボール(春山行夫) 叫喚は叫喚を求めて焔となる(土方定一)五十錢(坂本哲郎)冬と小供(石川善助)柿(神谷鶴)秋生きる(田邊耕一郎)霜柱の中で死んだ蛙(草野心平)たより(小森盛)風の夜(兒玉勉伍)

『詩洋』吾子への詩(前田鐵之助)銃獵家に(中西悟堂)來訪(宮本正清)卒業(田中令三) 彼等は知つてゐる(岡より子)夕暮の子供に送る歌(長岡孝一)無心の歌(井上誠)

『炬火』螢眠(星川清躬)反覆(ウオータース、村野四郎譯)秋の色(川路せい子)感傷風物(近藤益雄)六區街(一瀬直行)晩秋の夜の海(下條綾子)

『作品』偉大なるもの(高村光太郎)決議(萩原恭次郎)

『帆船』一片のセンテイメント(笹澤美明)あいつ(平澤貞二郎)意想詩(多田不二)らんぷ(鈴木穎兒)近火(栗木幸次郎)トランプと女の埃及模樣(大谷忠一郎)

『太平洋詩人』『冬』の歌(中西悟堂)凱歌(岡本潤)一人の肩に(小野十三郎)電線(野川隆) 蛙・冬眠(草野心平)畠の中の一軒家の夜(黃瀛)歌へ人類よ(金井新作)夕方五時の鳴つた街で(兒玉勉伍)北風に(土方定一)夾竹桃(西谷勢之介)秋(北川冬彦)店先で買つて來た「生活」には血が滲みついてゐた(渡邊渡) 晝と夜との讃歌(ウエルフェル、片山敏彦譯) モーツアルト(ピエル・ジヤン・ジウヴ、尾崎喜八譯)

『新興藝術』明方の歡喜(井東憲)平和(宮地耕一路)陰鬱な午前六時の街道(比良尾勝人)搖籃よ(杉澤文月)春(丘詩津子)寒い夜を歩く(柴山群平)

『原始』金策と腹痛(多田文三)自由人(ペドロ、本名隆次譯)何が彼等をさうさせたか(江森盛彌)

『烽火』春の挨拶(アイヘンドルフ、生田春月譯)冬の散歩は街にさびれて(眞船浩)朝の雜曲(杉原邦太郎)音に寄する人生(生田花世)海景(鈴木惣之助) 墓(麻生恒太郎)雪に甦へる心(佐藤信重)

『新進詩人』黑瞳(正富汪洋)旗(安部宙之助)春のカンヴス(川上賤緒)朝の出勤(小田信一)寂光(宮川克己)薔薇の影像(吉川則比古)

『亞細亞詩脈』冬(佐藤清)療養所と花畑のある構圖のDream(上田忠男) 午前零時の新精神(後藤郁子) 寒菊(清水房之丞)二月の思想(山本春雄) ある職業(内野健兒)戀愛詩篇(プリユウソフ、加葉郁哉譯) 馬車(内野壯兒)平行せる二つの逆說よ(山崎比古一)

『新年』白痴(寒河江眞之助)偶然と奇蹟(八木末雄)瞳で愛をおくつてゐよう(新島節)無題(市島三千雄)

『三角旗』額は森のやうに、私はおもくかたむいてしまつた、抵抗、帶、赤い椅子、三角旗、明るすぎる眼、假面夢、ある貴婦人の手紙、雪(友谷靜榮)

『秀才文藝』小さい刑罰(中西悟堂) 抗爭の後(大澤重夫)土に蠢くもの(島田芳文) 朝の寢床(深町瑠美子)ひとりごと(深水澄子)

『太陽花』來る者は一人も居ない(ハーデイ・森脇達夫譯)南爪の花(柳橋好雄)斷片集(千家元麿)詩人の一人・叙事詩(佐々木秀光)松よ(鈴木光毅)秋(更科源藏)のらくら者の生活より、叙事詩(新良孝平)小曲篇(鈴木白羊子) 郵便局の雇員(高嶋茂)妻子と歩く(西谷勢之介)欅並木(森脇達夫)いたづらもの(永見七郎)

『亞』園(瀧口武士)物集茉莉の第一章(安西冬衛)

『PASTRAL』往昔の詩人の聲(ブレーク、鈴木賢之進譯)或る幻想曲(鈴木賢之進)鴎の死(杉山金湖)

『綠林』欲望する歌(久保格)詩三篇(後藤宗一郎)

『ミミミノ春』夢(片岡はな子) 新編新約聖書(朝七七雄)家の夢(山本浩)

『圓筒』少女と樂器(山田義雄)

『花畑』春の月と浮女(安藤一郎)詩七篇(平享爾)

『黎明』暈のある月、星月夜の雪、鴉の群等(星野胤弘)

『街』遺稿詩篇(角田種三)計算(晴山昌邦) 圓戲(伊藤信吉)びらうどの部屋(井田貞衞)

『玖瑰』十月(ジヤロフー、尾瀬敬止譯) 節分の鬼をたをせ(小森松波)哩れた魂の叫び(仁科彈正)

『翁行燈』けつかうなVorticismだ(池田能雄)雪の平原

から(黑田秀雄)柚娘(小畠敏雄)鳶色の雪(陣出達男)秋風から拾つた詩(中田忠太郎)

『聖樹』良緣から追ばれる娘(永井叔)冬のわが部屋(牛井康次郎)明日(浦山響)永遠の世界へ(佐藤義夫)

『翼』母子像(候御葛稔)毛蟲(南部克太郎)夜の街を歩く(佐々木堯)一月の詩(松岡弘)

『歡祭』雪解けの朝(水島滿久男)惡の華開現(湯川宗二)詩二篇(宮本重)大都市路上(神山時雄)地上樂園(松本文雄)詩八篇(江口隼人)

『北地上』朝のこゝろ(島田芳文)ふしぎな葬列(伊藤義二)朝(石垣幸雄)懶惰な港(祓川光義)

『人生』春(水上光太郎)雪後の朝(青宿潔)農村の春二月(宮本武吉)

『地下道』黃昏風景(川波强)更けゆく夜(山田信)思慕(黑田秀一)無題(平手正治)秋日和(近藤秀鄕)愛執(加藤彦三郎)

『雄辯』海潮(白鳥省吾)

『婦人倶樂部』美しき女性(散文詩)(井上康文)

『婦人之友』詩三篇(千家元麿)

『少年倶樂部』三月の詩(サトウ・ハチロー)

『國民新聞』春への雪、秀節の軋り(角田竹夫)希望よ、亡き母(西谷勢之介)

『讀賣新聞』海四章(サトウハチロー)

『令女界』ぴいたあぱん(西條八十)飛ぶ春(西條八十)さゝげばや(米澤順子)

『若草』春の懺悔(中田信子)受胎(尾形龜之助)薔薇(渡邊渡)

『女性』漣は他六篇(北原白秋)

童謠・民謠・小曲

『近代風景』野のエス樣(玉置光三)かたつむり(サトウ・ハチロー)

『秀才文藝』蓼の花(渡邊波光)戀の立山(藤田健次)千代の松原(島田芳文)春風(藤淵忠一)

『現代』雀の號外(赤松月船)

『婦人倶樂部』つくし(藤田健次)

『苦樂』置炬燵(西條八十)

『コドモアサヒ』雀の子(川路柳虹)闇夜の提灯(西谷勢之介)風船(西村醉香)踏切番ノヂイチャン(中島允)ねこやなぎ(生品新太郎)雉子と雀(北原白秋)ウサギノ眼ノ赤イワケ(清水暉吉)

『少女倶樂部』夕方(北原白秋)籠の小鳥(百田宗治)黃水仙(白鳥省吾)

『少年倶樂部』その夜の侍(西條八十)

『少女畫報』嘆息(加藤まさを)お菓子の女學生(下田惟直)涙よ(間司つねみ)アナベル・リー(清水暉吉)春宵(水谷まさる)

『子供の友』すかんぽ(竹久夢二)オンシツ(河井醉茗)春が來るとき(武井武雄)

『コドモノクニ』ヴイ(北原白秋)豆のトン積み(野口雨情)蟻車(濱田廣介)雪のふる日(三木露風)ほねつるべ(渡邊波光)吹けよ春風(武井武雄)日くれの橋(都築益世)

『キング』スポーツの歌・唱歌(尾崎喜八)

『赤い鳥』月夜の仔馬、樺太の春(北原白秋)

『小學文藝』落椿(花岡謙二)

童話

『週刊朝日』小さい光子の人魚(平木二六)

評論・批評・紹介・研究

『文章倶樂部』大正年間の詩と詩人に就て(生田春月)佛蘭西現代の詩人(川路柳虹)

『詩神』現代ロシヤ詩人の印象(エレンブルグ、尾瀨敬止譯)英詩集『スペクトル』の鑑賞(大埜勇次)『すなほすぎる風景』の詩稿を讀みて(加藤介春)詩とは何か(廣瀨操吉)

『地上樂園』舞踊詩劇の研究(樹澤龍吉)農土象徵自由詩論(大澤重夫)朝鮮の農民歌謠(金敎煥)詩壇雜記(白鳥省吾)

『椎の木』詩歌と音樂に就て(春山行夫)『大道藝人』評(整、達治、二郎、豐春、三郎)

『詩洋』詩書大觀(前田鐵之助)

『炬火』詩の對象(川路柳虹)富田碎花氏の『手招く者』を讀む(山崎泰雄)『商業地帶』を讀む(倉橋彌一)『月に向つて』を讀むで(一瀨直行)童謠と小曲について(近藤益世)『春の顏』の詩人(今岡弘)

『帆船』新著詩書評(多田不二)詩誌私見(顯兒・美明)

『太平洋詩人』新興詩壇形成への出發(芳賀融)太平洋

詩人二月號の詩(野川隆)三つの詩集(西谷勢之介)『日本英傑傳抄と野村君』と私(尾形龜之助)
『原始』前衞批判(小野十三郎)根本問題の根本的認識不足(遠地輝武)
『烽火』『關西新詩選』讀後(杉原邦太郎)
『新進詩人』東洋より(正富汪洋)
『亞細亞詩脈』今後に於ける詩の動向(佐藤清、內野健兒、郡山弘史)日本民謠論(田中初夫)女流詩人を評す(後藤郁子)
『秀才文藝』新提唱四題(島田芳文)農民文藝の本質(遠地輝武)
『太陽花』自然詩人としてのブレーク(大槻憲二)
『圓筒』感情原形質について(山田忠夫)
『地下道』藝術の眞實(宮田丙午)
『時事新報』プロレ詩人の進出(三好十郎)ロシヤの現實(尾瀨敬止)
『報知新聞』ヴエルレエヌ詩抄(思久嶺)
『國民新聞』露國現代美術の精神(尾瀨敬止)
『都新聞』トラウベルが憶ふ(長沼重隆)
『中央新聞』確實なる詩人(『春の顏』評)(江口隼人)大衆詩派提唱(大貫よし江)
『東京日日新聞』『海の聖者を評す』(赤松月船)『烏水、小島君』(河井酔茗)『死』の詩人バイロン(矢野目源一)
『文藝公論』文壇論(橋爪健)社會主義作家の心理とその位置(小野十三郎)無產階級藝術の出發理論(伊福部隆輝)
『讀賣新聞』『何もない庭』(室生犀星)
『若草』通俗小說その他(清水孝祐)

感想・隨筆・紀行・小品

『詩神』トラウベル訪問記(長沼重隆)
『近代風景』身のまはりのこと(島崎藤村)白く耀くもの(北原白秋)一劃の空家(川上澄生)田園風景(横瀨夜雨)
『地上樂園』青雲莊雜記(中村恭二郎)大正天皇大喪儀の印象(マセスン・クローデル)
『森林』大黑貞勝を眺める心(宮崎孝政)故阿部仲次歌集『離愁』に就て(杉江重英)
『抒情詩』野の光の中で(中西悟堂)詩の父をさぐる(內藤飯策)
『椎の木』雜筆(百田宗治)

『河』ゲーテの言葉(小栗孝則譯)
『詩壇消息』隨想(宮崎丈二)カルフェノオ(清水孝祐)
詩壇漫語(梶浦正之)FRAGMENT(北川冬彥)更然洞漫筆(西谷勢之介)詩人の內面化(生田春月)誌索者の消息(大澤重夫)詩人と名聲と價値について(目次緋紗子)雪の日の回想(勝承夫)中野重治と岡本潤(萩原朔太郎)詩壇時評(角田竹夫)青邱隨筆(內野健兒)
『炬火』逆說的な美德(能村潔)
『作品』EPISODE(金子光晴)
『帆船』怪魚卷言(多田不二)斷片的なる思ひ出(小田揚)
『太平洋詩人』半公開的私信(尾崎喜八)冬の斷片語(赤松月船)葛飾通信(岡本潤)生命を賭して生命する(野川隆)二月六日(草野心平)手記(渡邊渡)前衞線(萩原恭次郎)僕の次の詩集への覺書として(中西悟堂)驚くべき腦髓(多田文三)釘(渡邊渡)
『烽火』ミュッセ雜稿(西崎滿洲郎)
『亞細亞詩脈』聯詩閑談(內野健兒)
『秀才文藝』土を基調とする民謠(野口雨情)
『太陽花』春待つ記(廣瀨操吉)
『少年倶樂部』春遠からじ(相馬御風)
『報知新聞』重厚なハイカラ(室生犀星)
『國民新聞』亮陰雜筆(日夏耿之介)
『週刊朝日』惱ましい中年の戀(服部嘉香)
『文藝公論』ポオドレエル感想錄(堀口大學)大正文學とその評價(生田春月)
『讀賣新聞』野に住む者の隨筆(中西悟堂)にひるの嘔(辻潤)私達は働く(サトウハチロー)
『令女界』若さ(佐藤春夫)
『若草』硯友のこと(生田花世)星の友情(岡本潤)
『新潮』庭と家(室生犀星)天に怒る(萩原朔太郎)
『女性』フレップ・トリップ(北原白秋)

小說・戲曲

『驢馬』遺族(宮木喜久雄)
『作品』多摩川べりの女(神戶雄一)青い餅(野村吉哉)
『帆船』路賊(ダンセニイ、竹村俊郎譯)
『太平洋詩人』北海道の旅(尾形龜之介)壺(神戶雄一)糞汲みと都會人(新島榮治)
『苦樂』積將棋(井上康文)誰の戀人(勝承夫)
『若草』水族館(金子光晴)

悲壯な夜行列車

岩佐賴太郎

澁面をつくつて
今にも泣き出しさうな
青いろのシグナルを目あてに
まつくら闇の中を
轟々とすさまじい音立てて
貨物と乘客を滿載した
長たらしく連結した夜行列車が
息せき悲壯な驀進をつづけてゐる。
曠野から都會へ！
都會から曠野へ！
惱みも疲れも振り棄てて
向ひ風に逆らひつつ
レールと一緒に
砲彈のやうに飛んで行く。
青いシグナルの
まつくら闇の中を。

（近代風景）

大地

宮崎孝政

僕はきみとともに大地を見てゐる
何にひとつ自分のものとてもたない大地が
はだかの姿で冬枯の世界に
かくも　元氣で生存してゐるのは

あの蒼空が
自分のまはだかの上にかゞやいてゐることを信
じてゐるからだ。
いがみあひ　いどみあひ　虐げられ乍ら
そして　またも汚辱の歴史を繰返してゆく人類
の
あの恐しい跫音を聽きすまし、
あらゆるものゝ滅亡と發達をよそにして生存し
てゐるのは、
自分の誇らかな健康を知つてゐるからだ、
すべての罪業を消化しつくす胃袋のあることを
信じてゐるからだ。
きみよ
僕の指さす大地を抱擁かうではないか。（森林）

落葉

清水暉吉

野の道に添ふた雜木林に
木枯しは吠え、
光は山頂と雲とから消えて
紺碧の空の深みに星の撒かれる時、
濃い夕闇の野の道を
からからと
寒風に追はれてまろびゆく木の葉。
落葉は何と淋しい音を立て
荒れすさむだ野のいて道を
彷徨ふてゆくことか？

おお木の葉！
闇の中に音だけ響く在在！
期節の荒い手が
お前を梢から振り落してこの方
よるべないお前は、大地の漂流者、
涅槃を求める旅僧のやうだ。
落葉よ、しばらく立停つて
見よ、木木の木梢は一様に
大空の星を掃き清め、
上へ上へと延び上つてゐるのを。

（詩神）

一片のセンテイメント

――老犬クラサーターのこと――

笹澤美明

彼女の祖母は波止場で
ドイツ産であると言つて渡されたと傳へられてゐる
ある種の尊敬の心を抱かせる話であるが
彼女は血すじをまつすぐに傳へて
すぐれてよいことは眼と毛並と鼻の感覺だつたよ
それが野ざらしと化したからと言つても
君には一片のセンテイメントも與へまい
ヒマラヤ松の根もとにか深い萱の中にか
しみじみ老い朽ちた彼女の眉毛がしのばれる
丁度風は瓦斯體の及物だつた
それは逝くものを送るだけ送つてしまつた
今頃は燐と化したか
ヒマラヤ松の肥料となればいゝ

おれはその植物を窓のそばに立たせてみたいからだ
彼女が見失はれる前に魚の精製肉の厚切で
彼女の腹を充たしてやつたが
今も交靈のおごそかなことを信じてゐる
かうして精製肉を入れた胃袋は
彼女を遠方に走らせたか
その夜にはかに消えてしまつた
あんぜんとおれのむねに雨がふりかかつた
この一片のセンテイメントを笑ふものがあるならば
さげすむものに炎をかけろ
それは幼い純朴な悲哀であらうし
彼女の野ざらしは深酷なセンテイメントだ。

（帆船）

蜜蜂

森脇達夫

明り窓の障子に
蜜蜂が來てばさつと上つた
朝日が一杯あたつてゐるので
のんきに羽をふるはせたり
足をもみ合つたりしてゐる
その羽のかすかな綾まで
はつきり映つてゐる秋の日和
私は出ばなを挫かれて
また暖い秋の床にもぐりながら
消え易い幸福をそつと抱きしめてゐる。（太陽花）

炬燵の足

井上多喜三郎

羽根蒲團の白百合が
セイ　セイ
呼吸をはづませ、
おお
燵炬に足が生えたぞ
白い足が、
なんて素敵な——
柔かい足だ
粉粉と
粉粉と
僕の血管を愛してくれる足よ。（杼情詩）

たそがれ

藤井芳人

くすんだ、杉の葉の匂をかいでゐると
郷里（くに）のことが想出された
妹よ、日が暮れた
新聞紙でも焚いてあたたまらう。（杼情詩）

四月

詩・散文詩

『改造』詩三篇（堀口大學）詩五篇（千家元麿）
『文章倶樂部』感情詩篇（サトウ・ハチロー）春（春山行夫）親と子（尾形龜之助）夜の氷滑場（北川冬彦）
『近代風景』（散文詩號）雜草と鳥の糞他一篇（蒲原有明）熱のある時（河井酔茗）夢（川路柳虹）香魚（前田夕暮）白きものの陰影（北原白秋）日食する燕は明暗へ急ぐ（大手拓次）途上（府川惠造）アルカンタラの經文（平野威馬雄）天上の嘆き（吉田一穂）夢の中でのラレギイ（中西悟堂）佗しい會話（木水彌三郎）手の詩三つ（高橋新吉）春は（田邊憲次郎）提灯暦一頁（近藤東）動き（藪田義雄）冬の夜（小方久星）青葉（岡崎清一郎）喇叭の音（川上澄生）まぼろしの野（長尾豐）挽歌（春山行夫）進水式（竹中郁）月夜の白鷺（本澤浩二郎）夜明けから朝（岩佐賴太郎）捨てられた赤（矢部季）苦痛を！（大木篤夫）—以上散文詩—掌（木水彌三郎）春の日の女の指（大手拓次）紅葉（平野威馬雄）冬日獨白（岡崎清一郎）病床にて（竹内隆二）大さし指（近藤東）美人（川上澄生）色彩の海（藪田義雄）
『現代文藝』春と氣球（加藤郁哉）冬の日の河原にて（塚原嘉重）冬の月夜に（井上好澄）あなたは人形（伊藤整）
『詩神』冬（千家元麿）夜の歌（村田春海）病床無題（八木重吉）春の鳥の詩（宮崎孝政）早春雜筆（杉江重英）フラマシ畫廊（金子光晴）冬の樹（福田正夫）靜かな冬（米澤順子）凍林集（平木二六）朝（中田信子）海ちかく（宮本吉次）無題（相川俊孝）山の溫泉宿（古賀殘星）雨（伊藤整）朝露（八百板芳夫）そこなどけ昨日奴（兒玉勉伍）蛙・昇天（草野心平）監獄の詩（岡田刀水士）冬（小野十三郎）奔流（神谷暢）ロシヤ（プロツク、尾瀬敬止澤）
『地上樂園』二月の丘の畑にて（中村恭二郎）昆布（國井淳一）都會の川（大澤重夫）朝風呂（千石喜久）春はまだか（泉浩郎）詩三篇（菊地重三郎）農土詩二篇（胡麻政和）
『詩之家』父と子（高橋清一）友情の詞華（岩間純）春宵賦（壺田花子）れこ展望（鹽川秀次郎）
『詩洋』タゴール新詩章（前田鐵之助譯）古典詩抄（吉原重雄）冬日抄（井上誠）燕（長岡孝一）妻（前田鐵之助）
『炬火』スケート（大鹿卓）妬心の冬（小畠貞一）ALTE

RATION(村野四郎)季節の風(川路せい子)料理店(近藤益雄)雪(一瀬直行)

『生活者』冬の日(高橋元吉)秋だ!(今井武夫)

『抒情詩』諧和(中西悟堂)雪と雲雀(内藤鋲策)夜(島田芳文)月夜(天野隆一)棕梠の木(佐野嶽夫)あの頃の瞳(落合茂)滿潮(兒玉笛麿)MY DREAMY SPIRIT(青旗青太郎)思想外形(小柄沙皎)大洋の濤(大貫芳江)朝の海(中村惠吉)風の子(柳橋好雄)明快な青空(柳木一良)覺めた春(角田竹夫)

『椎の木』馬小屋(岡本咲子)孤栖(後藤八重子)春(三好達治)壽に(伊藤整)旅人(大關五郎)兵士(青木茂若)春寒(加藤郁哉)訪れる冬(室木豐春)京五題(安藤眞澄)冬(飯島貞)朝の風景(長澤三郎)影(百田宗治)

『詩壇消息』面影(三木露風)ギターラ(ウートキン・岡田光一郎譯)孤獨の影(藤田健次)火事場の夫人(角田竹夫)五階の男(田邊耕一郎)粉雪の降る日(坂本茂子)ひらめ(小畠貞一)懷郷詩篇(宮本吉次)暗がりの中(尾形龜之助)病後(松村敏子)花貌(内野健兒)病床詩篇(清水孝祐)後期藝術派作品(上田敏雄)月は生きてゐる(目次緋紗子)老女の眼に惱む(岡村二一)雪景異情(石川善助)タマゴの夜景(平木二六)草花の芽(神谷暢)村落燃ゆ(大澤重夫)

『太陽花』助け舟(千家元麿)冬夜詩抄(柳橋好雄)犬(恩地孝四郎)夜(森脇達夫)五月のストツクホルム(永見七郎)寓詩(佐々木秀光)一生を歌ふ(鈴木白羊子)夜櫻(角田竹夫)扉(英美子)ひぐれ(林英美子)

『亞』海(瀧口武士)

『太平洋詩人』懷ふ(高村光太郎)春が來る(尾形龜之助)祖母との對話(岡田光一郎)傾斜せる街(北川冬彦)エミ!に(黃瀛)樹(神谷暢)そこに立つてゐるのは俺だ(今岡弘)一歩退却・二歩前進(田邊若男)空腹な豚(田邊耕一郎)・(草野心平)

『新進詩人』プリムラ(福原清)立春(石川善助)創生(吉川則比古)抒情詩篇(安部寅之助)四月の花籠(川上賤緒)昔の愛人(橋本正一)

『扉』梅花(林信一)小曲(春山行夫)霧(加藤猛太郎)冬の呼吸(馬來田靜秋)少年と木琴(山田義雄)球(森竹夫)

『烽火』現代展望詩(生田花世)朝の雜曲(杉原邦太郎)小夜曲(鈴木惣之助)わが妻におくる(麻生恒太郎)

『表現』あるゆうべ(十河祝)冬の室内(大橋眞弓)野がへりの途上で(胡麻政和)虹(北村榮太郎)

『街』春(伊藤信吉)早春の日記(春山昌邦)孤愁(三谷

川篤)春と木琴(井田貞衞)

『柱冠詩人』大砲始發式(モオラン、梶浦正之譯)愛撫の園(川路柳虹)雪夜・地球の圓味を感ず(梶浦正之)春の海(加藤介春)不思議な大船(吉原重雄)霧ふかい朝(室木豐春)商賣人(下條綾子)繪卷物(井上清志)雨の日(中野靜兒)

『文藝耽美』記號學的反射面(橋本健吉)形而上學Acomedy(上田敏雄)

『花畑』季節(平享爾)酋長(菊田一夫)青夜(深水澄子)早春(安藤一郎)

『秀才文藝』夜明けに(廣瀨操吉)園・春・秋(北川冬彦)風の詩(江口隼人)哀愁(深水澄子)綠色の街(瀧口武士)窓・月(島田芳文)

『掌』降る雪(高津信次)北國の冬(室木豐春)鈴の音(新村光秋)小包(棚木一良)未練(島藪秀雄)

『ミミミノ巻』目(關口節)春(もちづき・ひろし)闇(村岡敏)光林寺の春(片岡はな子)

『新年』祝・故郷デカダン美(八木末雄)自分のこと(松村久子)奥のある風景(新島節)無題(市島三千雄)

『人生』ゲッセマネの百合(大江滿雄)海底に沈んだ春の都會(水上光太郎)太陽に直面した時(白石軍司)

『土民藝術』駄菓子屋の店さきで入日を見る(草野心平)弟へ(緒方昇)

『奔流』交響樂・私の歌(金井新作)

『第一藝術』枝を折る鐵片(仁木二郎)發電所慘詠(伊東欣一)

『詩と笛』默つて眠る(佐川信一)ある旅にて(阿南哲朗)

『村木竹夫パンフレツト』庭園外十一篇

『雄辯』昭和維新の詩(三木露風)

『婦人の友』獨り歩く(富田碎花)

『婦人倶樂部』お七(川路柳虹)鏡(井上康文)

『中央新聞』春だ、春だ(江口隼人)

『朝日新聞』トルコタバコ(西谷勢之介)カタログ(角田竹夫)

『少年倶樂部』少年におくる言葉(尾崎喜八)

『文藝公論』プロレタリヤ物語(萩原恭二郎)未來を呼ぶ(松村久子)

『讀賣新聞』眩暈(門脇文)

『新青年』死なないたこ(萩原朔太郎)

『令女界』哀しき殺人(西條八十)春の月(三木露風)早春(中西悟堂)春の手(竹久夢二)春の羽織(生田花世)叙

事詩物語(萩原朔太郎)
『若草』冬の日(松村久子) 星と波と女の風景(三好十郎)西班牙(草野心平) 赤い椅子(友谷靜榮) 鳥(石川善助)
『北路』牧歌(藤森秀夫)
『解放』冬の追憶(目次緋紗子)
『女性』鵲他七篇(北原白秋)
『中央公論』柳鷺(北原白秋)

童謠・民謠・小曲

『現代文藝』待つてゐたとて(大關五郎)
『地上樂園』逢ひに來た男(松村又一) 燈臺守(大關五郎)蝸牛(小田俊夫)
『桂冠詩人』ウオータ・デ・ラ・メーヤ童謠抄(折本考)
『詩と笛』しづむ秋(中村暢一)
『現代』名なし鳥(西條八十)
『婦人倶樂部』かあごめかごめ(サトウ・ハチロー)
『少女畫報』さびしき誓(西條八十) 窓邊の櫻(加藤まさを)聖母像(水谷まさる) さようなら(間司つれみ)すみれの精(下田惟直)赤い絲(佐藤惣之助)
『子供の友』たま(河井酔茗)ツミクサ(三木露風)春風とつぼみ(水谷まさる)
『コドモノクニ』チンチンカラカラ(野口雨情)クジャク(三木露風)象つかひ(渡邊波光)しやちほこ立ちの先生(濱田廣介)異人の花見(下田惟直)
『少年倶樂部』春は飛ぶ(竹久夢二)
『少女倶樂部』櫻咲いた(玉置光三)妙子(西條八十)春の午後(加藤まさを)朝(相馬御風)
『コドモアサヒ』硝子吹く家(北原白秋) 小象(川路柳虹)鴉(大關五郎)たのしい夢(水谷まさる)
『令女界』桃の畑(佐藤惣之助)
『赤い鳥』白樺の皮はぎ、デンショバト(北原白秋)
『小學文藝』曼珠沙華(花岡謙二)

童　話

『週刊朝日』作三ちいさんと雲雀(福田正夫)
『コドモノクニ』こはれ自動車(サトウ・ハチロー)
『コモアサヒ』バラノオヒメサマ(福田正夫)

評論・批評・紹介・研究

『改造』ウイリアム・ブレークの象徴主義 (土居光和)
幼兒と環境(北原白秋)
『近代風景』朝は呼ぶ・散文詩小論(北原白秋)散文詩解說(川路柳虹) 凡兆に就いて(室生犀星) 匙とソネット(竹友藻風)
『現代文藝』短詩提唱に就いて正富・福富兩氏へ(平野威馬雄)
『詩神』詩の社會性(川路柳虹) 無產階級詩論(小野十三郎)此人を見よ(手塚武) 短詩新研究(春山行夫)文學に就て分離せる二要素(大埜勇次) 恭次郎君に(大埜勇次)杉江重英の詩に就いて(宮崎孝政)
『地上樂園』新しき鄕土詩人(白鳥省吾)舞踊詩劇の研究(椙澤龍吉)現代英詩講話(モンロー、清水暉吉譯)ロシヤ農民詩(エセーニン、尾瀨敬止譯)佛蘭西農民詩(ギオマン、犬田卯譯) 朝鮮の農民歌謠(金敎煥)諸國民謠(原千秋)全國詩誌分布圖(編輯員)
『詩之家』詩の家概評(菊地亮)
『詩洋』詩壇漫評(佐伯郁郎)詩書大觀(前田鐵之助)
『炬火』詩の眞實 (川路柳虹)『何もない庭』をみて(能村潔)譯詩覺帳(柳虹・芳男)『詩の鑑賞』瞥見(山崎泰雄)『龍女の眸』の詩人(倉橋彌一)『大道藝人』と『鄕土』(今岡弘)二つの詩集(一瀨直行)
『抒情詩』印象詩派覺書 (井上多喜三郎)ウイリヤム・モリスに就いて(角田竹夫)前月詩評(島田芳文)
『椎の木』『何もない庭』(室生犀星)余はかく詩を觀ず(光太郎・春夫・大學・省吾・柳虹)『何もない庭』を讀んで(須永善晴)
『詩壇消息』詩形式論と新しき詩精神(田邊耕一郎)
『太平洋詩人』革命的現實派の詩論(麻生義)象徴主義詩の新展開(赤木健介)科學的文藝觀(田邊耕一郎)太平洋詩人三月號詩の印象(友谷靜榮)月評戰への簡單な覺へ書(萩原恭次郎)三月の詩壇を觀る(岡村二一)草野心平君へ(白鳥省吾)
『新進詩人』詩の包容性と傾向詩の產出 (正富汪洋)
『犀』短詩は型に據るものではない(森竹夫)『檢溫器と花』それから(多賀圭三郎)Fudith Perlzweig (草野心平)
『烽火』春の夜(生田春月)
『桂冠詩人』劇詩人ヴキリエ・ドリイルーアダン(南江

二郎)近代英文壇の巨人チエスタートン(松元實) 未來への道に就て一異見(河本正男) ルウパート・ブルツクの梗概(北島春柳)現世界詩壇の欲求點(梶浦正之)

『秀才文藝』中央詩壇の解體と新興詩人(島田芳文)農土詩及民謠詩に就いて(白鳥省吾) 何故の短詩(福富菁兒) 短詩に就いて尾上櫻子に(正富汪洋)詩の地方主義に就いて(角田竹夫)

『第一藝術』藝術は内容を有せず(松元實)

『日日新聞』今年の國畫創作協會展(川路柳虹)

『中央新聞』創作民謠の花環(内田清)詩人よ眞劍に歌へ(大貫芳江)

『朝日新聞』無産婦人と服裝(高群逸枝)

『國民新聞』倭繪の更生 (川路柳虹) 明日の日の創作(大山廣光)

『報知新聞』藝術の日本主義(野口米次郎)農村荒廢論斷片(伊福部隆輝)

『時事新報』逆流する二つの藝術傳統(伊福部隆輝)

『文藝公論』超目的意識論序說(橋爪健)無産階級藝術の出發理論(伊福部隆輝) 新ロシヤ作家の自叙傳(尾瀨敬止)

『讀賣新聞』蕭々氏の『リルケ詩集』に接して (木村正)新興大和繪會の立場(川路柳虹)フヨードル・グラトコフ(尾瀨敬止)未明童話の價値(濱田廣介)文藝批評を獨立せしめよ(伊福部隆輝)

『文藝』詩の坐函標(吉田一穗)

『早稻田文學』山田美妙傳、硯友社と江戸紫、明治二十年以前の雜誌界(河井醉茗)

感想・隨筆・紀行・小品

『改造』西行法師(野口米次郎)

『近代風景』洗耳記(佐藤惣之助)午前十時(北原白秋)

『現代文藝』詩人獨語(井上康文)野村吉哉と別れるまで(林芙美子)

『詩神』回顧的斷想(百田宗治)ルネッサンスに續く廢頽(清水晴吉)大正詩壇の回顧(中田信子)僕はソクラテスだ(萩原朔太郎)總ての刹那に於て(手塚武)・(草野心平)自由印象記(福田正夫) トラウベル訪問記 (長沼重隆)

『詩之家』詩權說(竹中久七)山河立春(高橋玄一郎)其と私(英美子)開花一番(佐藤惣之助) 廻轉する街(戸塚八重子)殺戮せよ・詩壇ゴロを (藪田久雄) 花嫁と普請

(清水房之丞)ボヘミアンの手記より(天野靜子)新民謠不譯(佐藤惣之助)

『詩壇消息』雜纜から(陶山篤太郎) 漫筆御免(尾形龜之助) 感想私の言葉(角田竹夫)山茶花漫話(加藤介春)明窓雜筆(林信一)批評について(能村潔)再び多田不二氏の態度を難ず(春山行夫) 詩の雜誌について(百田宗治)更然洞漫筆(西谷勢之介) 烈女百人一首(中田信子)感想(上田敏雄)松の内(平木二六) 自己開辯其の他(島田芳文)島田清次郎を憶ふ(村井武生)私の手帖から(神戸雄一)開眠語(岡村二一)夢(米澤順子)

『太陽花』大愛(山縣深雪)青野ヶ原行(廣瀨操吉)

『亞』物集茉莉の第二章(安西冬衛)

『太平洋詩人』手記(渡邊渡)葛飾通信(岡本潤)

『新進詩人』人としての正富汪洋氏夫妻(槇本楠郎)感謝(勝承夫)十週年を祝して(角田竹夫)『新進詩人』の賀に際して(中田信子)『新進詩人』と私(岡村二一)

『烽火』ストリンドベルヒの人と自然 (加藤愛夫)『射手』ドウルヴイリイ(西崎滿洲郎)ネーブルをむく(佐藤信重)館高重氏詩集『感情原形質』(鈴木惣之助)

『表現』表現の思出(百田宗治)

『柱冠詩人』二情景(野口米次郎)

『秀才文藝』ありふれた雜感(遠地輝武)

『奔流』思藻(金井新作)

『中央新聞』太陽を戀ふる者(竹内越村)啄木の前半生(細越夏村)憂鬱を焚く(竹内越村)

『朝日新聞』江戸城明渡に付て(高安月郊)

『報知新聞』詩人獨歩を語る(中村星湖)

『時事新報』プランデス(野口米次郎) 北國春信(相馬御風)

『週刊朝日』春を飾る女と街(井上康文)御事夫社會樣(横瀨夜雨)櫻花(野口米次郎) ダグラス・フエアバンクスの夢(金子光晴)

『少女倶樂部』春の筑波(河井醉茗)

『文藝公論』石上好古談(日夏耿之介)ボオドレエル感想錄(堀口大學)

『讀賣新聞』春の感想(野口米次郎) 煙草に就て、書物の裝幀(室生犀星)『家』を書いた當時のこと(島崎藤村)海南小景(佐藤惣之助)

『若草』言葉(佐藤春夫)わが家のこと(橋爪健)

『新潮』特殊の風貌と聲(野口米次郎) 天に怒る(萩原朔太郎)

小說・戲曲

『朝日新聞』慈善（松本淳三）
『文藝公論』四一八浬の戀（富田常雄）

對坐二首

内藤鋲策

×

木の梢にひらひらふかれる月のかけらを眉間に
　ぶらさげてやつて來た人でした。

×

木蓮の白いつぼみが地上のうすやみに點火る下
　をかきわけてかへつてゆきました。（抒情詩）

朝

中田信子

小鳥等の趾から、
　よきほどにぬくもりたるごとく、
楾櫨（くわりん）　椙桲（マルメロ）の樹はなけれど、
　鄙びた明るい板びさしで、
　いつになく上機嫌である。

名笛を彫るかしこさにまして、
わたしも十の指をいたはり、
豐な清水のもつ艶を、
陽を啣む土のすこやかさを、
なにはさてほめやうとする。

蕪を抱けば輝くおもみ、
木の茅漬の風味のこまやかさ、
また杓子にすらよろこびのかくしことばあれ
　ば、

をみなとも、人妻ともなれることの、
ことさらうれしい朝である。

額を包んだ手拭をとらず、
元祿袖ののんきさに、
私も晴れた小島となつて、
夫の心によき程にあまへかゝる、
うららかに美しい朝である。

（詩神）

雪と星

墓場にはまだ雪がある——ヘルマン ヘッセ

片山敏彦

部屋の中では病氣の妻が眠つてゐる。
少し口を開けて眠つてゐるその横顔と
額をふちどる柔かい髪の毛の波のうねりと
それを照らす灯の黄色さとを靜かに心にとめて
夜中の家のそとに出ると
朝から降りつゞいてゐた雪がいつのまにかやん
で空は晴れ渡り
星は悲しく清らかに闇の深淵の上に金の光の庭
を形づくり
風は旅人のやうに、雪と星とを吹いてゐる。
おゝ、大きな影に包まれて
深く深く眠る雪の果のない夢想の靜けさ。
私は立ち、私は見上げる。
私の胸に込み上げて來る河のやうなほの暗いも
のはなんだ。
私は星と雪との匂ひを旅人の風の腕から吸ふ。
私は眠つてゐる樹と動物と家々とを見る。

遠いところで眠りたくて眠れないでゐる人、涙
の冷え乾いた目で天井を見つめてゐる人、死
んで行く人、生れて來る赤ん坊、よろこびの
目を見開いてゐる人のことを思ふ。
又、人々を同じ平安の中へ導いてゐる
廣大な眠りと、地を包むその平等さとのことを
考へる。
又、彼等すべてを搬んで行く大きな箱船のやう
な時のことを考へる。
私は泣きたい。莫然として重い悲しみのために
ひとり雪の上に立つたまゝで泣き出したい。
私は夜の雲がときどき紫を帶びた灰色の行列で
星の光を蔽うのを見る。しかし雲が行き過ぎ
ると
星の光がまた見え出すのを見る。——星は歌ひ
つゞけてゐるのだ。
春のかすかなひゞきが私に解れた。
それは雪の影の際界から吹いて來るのか。
大きな夜よ。君の沈默は僕には少し大き過ぎる。
君はまるで人間を輕蔑してゐるやうに大きい。
いやいやそんなことはない。
ね、あはれな人間は、君の大きさが少しこはい
のだ。
僕は何だか泣きたいやうだが、
泣かずにぢつとしてもう少し君の大きさと押し
くらをして見る。
さうして星の匂ひと雪の匂ひとを風から吸つて
自分といふものを
夜よ。無邊際の戀人である君の、大きな冷たい
胸の中へ融かし込んでやらう。

その冷たさが、もつと僕に暖かく感じられてくるまで、
さうだ、それがだん〳〵暑くなつて
僕の心が笑ひ出して來るまで……
この二月の眞夜中の星と雪との中で。（生活者）

夜明けに

廣瀨操吉

私は熟睡から醒めてから
私はまた蒲團の中で
カチカチ夜廻りの柏子木の音につれて
素晴らしい夜明けの舞臺面が
廻轉して行くのを想像したのだつた
眞闇な街角や、半マントのポリスマンや、犬や
迅驅する汽鑵車や、森林や、河口や
都會の圓頂（ドーム）や、無電機（アンテナ）や、牢獄や
搖籃に眠る小兒の聖らかな顏の上に
跪び寄る黎明の素晴らしい訪れを
私は閨の中で聽いたのだつた
灰色の積み重なつた『夜』を打碎いて
白馬が流星のやうに
進擊の大交響樂を奏でつつ
ドン！　と、太陽を打ち上げるまでの
謎に閉された宇宙の神祕を
想像したのだつた
混沌、混沌！
私の瞳から識らず識らず涙が流れ出た
私は涙を拭かうともせず
凝つと、枕に耳をつけたまま
夜明けのバントマイムを聽いてゐたのだつた。
（秀才文藝）

ALTERATION

村野四郎

時計臺の琺瑯面（エナメル）が朝露の泪をながして見送る
朝影はたゞしく新しい戰線へ　新しい戰線へと
うちつれる
日が沒入（はい）る——
朝に　きらやかな露臺から聲なげた少女は
一日のうちに調子のちがつた訃報（しらせ）を受けて
暗い椅子で嗟嘆（なげ）いてゐる

（それで　人々よ
この酷ごい捷利をかち得たのは　一體誰なのか！）
（炬火）

曼珠沙華

花岡謙二

秋の彼岸のお寺道
ひなたの土手に店出した
赤いかんざしいくつも並べ
さあさ買ひなと店出した
出しても出してもまだ賣れぬ
赤いかんざし曼珠沙華。
（小學文藝）

古巣の小雉

玉置光三

けんけん小雉は
巣の中で
ひとりお留守をしてゐます
風は松葉を鳴らすとも
古巣のなかでお留守番、
九つ小山を飛び超えて
母さん雉は奥山へ
おいしい菜々採り
行きました。

けんけん小雉は
巣の中で
母さん歸りを待つてます
風は野草を搖するとも
古巣のなかで待つてます。

（近代風景）

五月

詩・散文詩

『文藝春秋』電車の中で（西條八十）
『生活者』或日の日記より（高村光太郎）遊行者の詩（高橋元吉）冬の朝（片山敏彦）
『炬火』故事三篇（佐藤春夫）花下仙人に遇ふ（高村光太郎）譯詩二章（アンドレ・サルモン、フイリップ スウポオル堀口大學譯）詩三篇（佐藤清）窓の邊にて（福田正夫）空の恩寵（尾崎喜八）調和（川路柳虹）蒼顏の騎士のセレナータ（山崎泰雄）彼奴が書く詩（村野四郎）わたしの墓へ寄せてうたへる愚かな抒情詩（都築益世）惡業の部屋（板垣芳男）憂鬱なちくおんき（厚見他嶺夫）航海（今岡弘）友情（倉橋彌一）ゆふやみのたれこむるとき（近藤益雄）季節の鈴（一瀬直行）
『地上樂園』歌（バドラク・コラム佐藤清譯）新しい橋（中村恭二郎）儚い希望（大澤重夫）ウイリアム・モリス（田中清一）小作爭議（千石喜久）神（三上英生）乘合馬車（國井淳一）みんな眠つてゐる（菊地重三郎）
『詩洋』斷崖（前田鐵之助）朝のよろこび（長岡孝一）行かう（井上誠）大地の聲をきく（佐伯郁郎）戰車（伊藤喬信）まごころ（田中令三）太陽の生るる夜（宮本正清）古典詩抄（吉原重雄）
『詩神』天上の樂園（田中清一）ソヰエートロシヤプロレタリヤ詩人の詩（黑田辰男譯）月明の夜（森脇逢夫）唄（富田充）はつ秋の日曜に（平澤貞二郎）夕ぞら（木村てるよ）華やかなはね（村木竹夫）隱沼（林靜夫）新月（棚木一良）骸子（江口隼人）雪解け（南光二郎）黑猫（杉江重英）或る千家風の風景（棟方寅雄）芽をさぐる（田邊憲次郎）春日追情（廣瀨操吉）おさなごのわらひ（田中清一）鴉（福田正夫）
『詩學』景物詩三曲（北岡實）
『椎の木』歌（ジュル・ロメン山内義雄譯）朝（伊藤整）病兒（菊地ゆき）林（三好達治）櫻（安藤眞澄）短唱篇（小西武）刑務所風景（野長瀨正夫）薄暮（阪本越郎）自憐（平野義男）赤い繪凧（岡本咲子）私の家（丹野浩木智）あけがたのおんじやう（後藤八重子）上野にて（飯島貞）黃なる花粉學（堀内藤男）椎の木と秋（棚木一良）景色（青木茂若）噴水（室木豐春）南天（長澤三郎）
『新生』發動汽船（野々部逸二）握りこぶし（伴野憲）面影（素木若之助）微風の頌（鵜飼選吉）水族館（岡田淑子

少年と振子の夢(柳木一良)風笛(高木斐瑳雄)

『亞細亞詩脈』窮迫(佐藤清)鯨(内野健兒)蒼魚そのほか(上田忠男)冬便り(岩田よしの)野良辨當 (清水房之丞)奇妙な風格を備へて(後藤郁子)1927・易者 (郡山弘史)白樺の肌(イワン・プーニン加藤郁哉譯)軍隊生活四題(横堀眞太郎)

『白山詩人』或る朝の點景(永村悟一)深夜吠える (澤木隆子)二篇(河本正義)早春(白井一二)

『生誕』詩の道(河井醉茗)水村の春 (北原白秋) 冬の蝿(加藤介春)魚よりもあはれに(大手拓次)怒濤 (岩佐頼太郎)寒い春(米澤順子)夢をみちびく(生田花世)月の壁畫(横山美智子)地中に光る(藪田久雄)散歩 (竹中久七)わりふ(鹽川秀次郎)シゥゾンに(西崎滿洲郎)そのかみ(井上清志)新月(梶浦正之)丘 (西谷勢之介) 俤(相川俊孝)憂鬱篇(大木篤夫)梅(八木重吉) おぼろ夜(壺田花子)小庭 (平木二六)曉 (府川惠造) 魚と落葉(藪田義雄)

『詩魔』僕の Etiguette (春山行夫) 銀座(英美子)夕月のある風景(菊地亮)月光(近藤東) とこやの詩人(河井一三)處女のメカニカル運動について(渡邊修三) 殘された城(杉浦杜夫)春陽(岩間純)

『先驅』詩(エドガア・リ・マスターズ草野心平譯)俺達の歴史(土方定一)詩二篇(高橋久由)深夜パタパタと俺はこのみすぼらしい百姓家を叩きおこした(三野混沌)春 (坂本遼) 動脈(原理充雄) 春(猪狩滿直)闘ふ者(エルンスト・トルラア土方定一譯)

『詩の家』當(藪田久雄)生活のない行動(馬來田靜秋)雄鶏のなげき (清水房之丞) から風に消える街 (森千魁)時(倉橋鎭夫)鎌倉大佛(山本純三)春の水 (高島茂) Le Printemps (椎橋好)The Stone Rider (竹中久七)

『慘敗人』事務所の時計(野村達二)旅鴉の唄 (田邊若男)鴉の軍隊(相澤等)

『艸烟』春(岩崎二郎)窓下の道(柴山義雄)冬夜 (平野義男)寒いところと暖いところ(戸田慶三)

『蠶繭』涙漫主義(安藤眞澄)桄の木(大鹿卓)眼を光らす(半井康次郎)形而上學(上田敏雄)春の喜び (北村草之助)人生(吉澤獨陽)春溫む (興林瑞信)集團地帶 (關澤げんじ)

『疎林』十月の夕暮(青木茂若)雪後の山脈(柴山晴美)高原むかへる春(白谷俊之介)大川よ(高島茂)早春 (松本操)臺所の詩(山室靜)青い星(堀内保)

『花蟲魚』境へきて花蟲魚の人々におくる卽興少し(佐

藤惣之助)利根川の夕景(北島春柳) 青葉の窓に手車を引き(津田正隆)思慕雜景(加藤五郎作)友だちのべビーに(戸塚八重子)利根川(天野靜子)

『新進詩人』薔薇を摘む時(川上踐緒)聖であぼろの饗宴(河本正男)

『歡祭』哀寂の泥溝(湯川宗二)めだか(水島滿久男)新橋際の女乞食(江口隼人)

『新年』身邊への感情的散彈三部曲 (新島節) かたゐ(寒河江眞之助)希臘の時計(上田敏雄)松の花(安西冬衛)無題(市島三千雄)

『青山文學』春(今岡弘)

『石原亮詩作ノオト』箕蟲外四篇(石原亮)

『中央新聞』うららか(大鹿照雄)黒旗の歌(金井新作)

『現代』それでもあなたは日本人(正富汪洋)

『婦人倶樂部』春の野(三木露風)曉の薔薇(白鳥省吾)

『婦人の友』送り返された手紙(川路柳虹)

『少年倶樂部』衍(西條八十)

『文藝公論』汽笛(岡本潤)晴れる迄は曇れ! (三好十郎)汽車(大鹿卓)葬式(三輪猛雄)

『令女界』蠟人形(西條八十)薔薇の雨(川路柳虹)山ほとゝぎす(野口雨情)

『若草』果物店(米澤順子)此の道(岡本潤)春風 (福富菁兒)たんぽぽ(佐藤八郎)

『女性』熊(北原白秋)

童謡・民謡・小曲

『詩神』夢遠し(畑喜代司)線路工夫の唄(前田いさむ)

『亞細亞詩脈』八重子の童謡(後藤郁子)

『雄鶏』おばこの春(井上康文)

『新進詩人』抒情短唱十篇(正富汪洋)古き抒情日記より(小田信一)愛戀祕曲(吉川則比古)抒情小詩 (安部宙之助)

『現代』眞桑越え來て(伊福部隆輝)春の唄(村田信一)お島(藤田健次)

『婦人倶樂部』青い小山の燕(玉置光三)

『苦樂』狂想曲 (佐藤惣之助)

『少年倶樂部』小騎兵(サトウ・ハチロー)

『少女倶樂部』薔薇の肩掛(佐藤惣之助)ピアノ (武井武雄)機織る家(玉置光三)雨の日 (園萱三)

『コドモノクニ』てつきんコンクリート(北原白秋)お化の行列(野口雨情)

『子供の友』ココノオウチ（河井醉茗）きまぐれ竹の子（葛原滋）蟻（武井武雄）

『少女畫報』櫻の花葩と雲雀の聲（加藤まさを）どつちが美しいか（水谷まさる）五月の悲しみ（下田惟直）小曲二篇（サトウ・ハチロー）寂しい心（間司つれみ）

『コドモアサヒ』オ猿サン（三木露風）遠足（渡水暉吉）帽子と春（北原白秋）野のにほひ（藤田健次）山燒（川路柳虹）雲雀の飛行機（野口雨情）袋のドロップ（濱田廣介）

『赤い鳥』煙突雀、誰さん、トラククア、サボウ（北原白秋）

『女性』小さな兵隊、春さき（北原白秋）

童話

『時事新報』星を數へる子（西谷勢之介）

評論・批評・紹介・研究

『炬火』詩の構造（川路柳虹）象徴の彫刻的要素と音樂的要素（能村潔）

『主觀』ホヰツトマン評傳（長沼重隆）

『地上樂園』諸國民謠（益子德三）世紀の新生その他（大澤重夫）菊地重三郎の詩に就て（中村恭二郎）現代英詩講話（ハロルド・モンロー清水暉吉譯）

『詩洋』詩誌時評（井上誠）詩書大觀（前田鐵之助）

『詩神』社會主義詩論（三好十郎）プロ詩人ジイオバニイテイ（清水暉吉）最近海外詩壇消息（Y・H）何もない庭（神戸雄一）成長期の女流詩人（井東憲）二つの詩集（江口隼人）

『詩學』モノドラマの理論（ニコライ・エフレエイノフ、外山卯三郎譯）

『新生』詩集『街の犬』を讀む（鵜飼選吉・柳木一良）新刊詩書への感想めいた紹介（高木斐瑳雄）

『亞細亞詩脈』蒼白の光茫（石川善助）『歪める月』・郡山弘史評（上田忠男）『歪める月』への言葉（佐川信一）日本民謠論（田中初夫）

『先驅』行動・藝術（三野混沌）一將功成萬骨枯る（千塚武）詩集『百姓』に就いて（草野心平）

『艸畑』卓上暦（柴山義雄）

『驫驫』詩集『大道藝人』について（牛井康次郎）

『中央新聞』『ヴェルレーヌ詩集』を讀む（和地泉）『合

唱』を讀む（塚本篤夫）モダンガールのサディズムス的特性を論ず（渡邊渡）

『時事新報』英文壇の新潮流（中野秀人）

『都新聞』詩話（野口米次郎）

『新潮』無產派文藝家等の誤謬觀念（伊福部隆輝）藝術評價と價値の幻想（生田春月）

感想・隨筆・紀行・小品

『文學春秋』十九世紀の情熱（萩原朔太郎）

『生活者』樂しみと遊び（デュアメル・尾崎喜八譯）

『炬火』自然の一考察（野口米次郎）庭（百田宗治）漫談（萩原朔太郎）柳虹の印象（正富汪洋・宮崎丈二・百田宗治・福士幸次郎・吉江喬松・生田春月・上司小劍・竹内勝太郎・角田竹夫・清水暉吉・佐藤清・三木露風・福原清・加藤介春・萩原恭次郎・山田邦子・河井醉茗・福田正夫・高木斐瑳雄・大鹿卓・萩原朔太郎・高村光太郎・西川勉・野口雨情・内野健兒・前田鐵之助・服部嘉香・若山牧水・佐藤惣之助・陶山篤太郎・堀口大學・與謝野寛・千家元麿・尾崎喜八・山内義雄・幡谷正雄・中河與一・西條八十・白鳥省吾・山宮允・南島行（白鳥省吾）竹几日記（横瀨夜雨）私が詩を作るやうになつた經路（菊地重三郎）

『詩神』大正初期詩壇漫談（白鳥省吾）明日へ（中西悟堂）室内散歩（春山行夫）トラウベル訪問記（長沼重隆）詩壇への意見書（古賀殘星）近頃の事（金子光晴）

『詩學』南枝の花出版に就いて（南江二郎）

『椎の木』木爪（室生犀星）余はかく詩を觀ず（吉田一穗・萩原恭次郎・大鹿卓・平木二六・小野十三郎・北川冬彦・安西冬衛・春山行夫・大木篤夫・尾崎喜八・赤松月船）香風機獨語（春山行夫）三好達治に就いて（伊藤整）島の話（三好達治）海その他（阪本越郎）時言（百田宗治）

『亞細亞詩脈』點燭離思（石川善助）

『生誕』花信風・少年歌（佐藤惣之助）私の第二の誕生地（中田信子）日本の詩の愛のために（藪田義雄）『生誕』の諸君へ（中西悟堂）小田原と詩人（壺田花子）相模の若き人々へ（藪田久雄）

『詩魔』詩談草（西條皎）花・花・花（山田忠夫）

『詩の家』夏を待つ（佐藤惣之助）旅行法私議（佐藤惣之助）ろまんす（天野靜子）今日以後の詩（江口隼人）

『慘敗人』朝鮮人と日本人（多田文三）霧が白い（松本淳三）

『驫驫』斷片的な通信（岡本潤）窓の外へ（牛井康次郎）

朦朧派(安藤眞澄)教育者の手記(北村草之助)機械的生活の詩集の序・他(關澤げんじ)

『疎林』ノートより(堀内保)春に移る頃(柴山晴美)

『花虫魚』詞(佐藤惣之助)

『歡祭』詩の雜感(松本文雄)三月號短評(水島滿久雄)

『週刊朝日』初夏のこころ(佐藤惣之助)

『アサヒグラフ』外國人と兼好法師(野口米次郎)解放された足(目次緋紗子)

『東京日日』夏目漫筆(西谷勢之介)

『時事新報』病床生活からの一發見(萩原朔太郎)新ロシヤ文壇樂屋話(尾瀬敬止)

『都新聞』幼きもの(尾崎喜八)

『朝日新聞』消息(島崎藤村)

『現代』日本將來の詩(野口米次郎)新しき詩の行くべき道(三木露風)童謠の理想境(西條八十)童謠の過去と將來(野口雨情)

『苦樂』映畫のラヴシイン(井上康文)

『キング』黑豆(室生犀星)

『文藝公論』賭博の哲學(萩原朔太郎)ボオドレエル感想錄(堀口大學譯)屑の押賣り(小野十三郎)ダダは何所へ行つたか(萩原恭次郎)詩よ詩人よ詩壇よ(橋爪健)

『新潮』天に怒る(萩原朔太郎)

『讀賣新聞』幼年の俳句(室生犀星)

『若草』詩集紹介(小野十三郎)詩人の額に星を生む(室生犀星)蜂の小舍の生活(春山行夫)

小說・戲曲

『全觀』影を作る時代(福田正夫)一つの空席(井上康文)山上の死(清水暉吉)

『詩神』理髮師(金子光晴)

『讀賣新聞』金つば(廣瀨操吉)

『中央公論』秋山小助(北原白秋)

ユウリシス

○佐藤春夫

人生の浪路はるばると
サイレンの島にさしかかる
その歌聲はききたいし
さて白骨にはなりたくない
うまい工夫をめぐらせる
ユウリシスはずるい男である。

鯨

内野健兒

地球をかい抱いてゐる
土の住民は翅望の帆を孕ませ
尨大なうしほの冷情——
鹽分は咽元に結晶して
潮水は硝子の樣にさみしい
陸地からの追放者は悠々
太陽にふきあげの花を射る
ぷろぷろぷろぷろ　ぷろれ
ぷろぷろぷろぷろ　ぷろれ
すぺくとるとなり　霓華となり
思想の極光を蒼穹に橋わたし

群蛾の様に沖へ鹿島立つ

ぷろぷろぷろぷろ　ぷろれ
ぷろぷろぷろぷろ　ぷろれ

弧狀よ　放射狀よ
摩天樓は嚠喨の喇叭をはりあげる
時に潛航し　時に浮遊し
出沒自在な水平線の世界だ　小島だ

土壤を踏んだ後肢は忘却し盡され
前肢の尾鰭は自由の海を搔く。(亞細亞詩脈)

六月

詩・散文詩

『文藝春秋』隣(百田宗治)
『文章倶樂部』ぬかるみ(澁谷榮一)月光(渡邊信義)憂鬱な墓穴(神山康司)眞似(坂本越郎)
『生活者』卽興三首(高橋元吉)靄(今井武夫)雹(片山敏彥)樂しみと遊び(デュアメル隨筆尾崎喜八譯)
『近代風景』羽蟲(北原白秋)黃色い接吻(大手拓次)濡れる展望(仲村渠)村落遊童(岡崎清一郎)風景(竹內隆二)狐(近藤東)石と凝る(藪田義雄)耶路撒冷哀歌(春山行夫)冬の硝子工場(川上澄生)夕(長尾豐)微妙の春(岩佐賴太郎)早春(水木彌三郎)海濱(府川惠造)
『愛誦』旅の二篇(水谷まさる)風嘯(横山青娥)ディエツプにて(寺下辰夫)ヴェニスとナルシス(ヂョオルヂ・ガポリイ堀口大學譯)夕風(百田宗治)
『詩神』詩四篇(大鹿卓)村の祭の日(高木斐瑳雄)黑い手(松村又一)エハガキの裏に書いた詩(武者小路實篤)蟻地獄(杉江重英)詩一篇(宮崎孝政)夜明けまで(福田正夫)驢馬(天野靜子)朝の窓・夜の窓から(兒玉勉伍)稅關風景(石川善助)パイプを捨てよ(森三千代)煉獄詩篇・叙事詩(高橋新二)小指續篇・叙事詩(佐々木秀光)麥は生ひ茂る(村田春海)
『地上樂園』美を見る者(高村光太郎)死の喜劇(加藤介春)窓外(千家元麿)星の消えるまで(福田正夫)垣根(百田宗治)旅人は路を問ふ(白鳥省吾)ある旅の印象(佐藤惣之助)はじめて素足になつた日(米澤順子)茄子の苗(中田信子)
『矜情詩』立體派詩篇(島田芳文)ある感傷(河本正男)直角の憂情(月原橙一郎)種子を蒔く(角田竹夫)
『森林』雪の朝(小島貞一)もう一人の私は(伊藤整)冬・長屋の壁(郡山弘史)暖か(厚見他嶺夫)病室(佐藤清)アイドル・ボーイ?(福田正夫)ぶんぶく茶釜(宮崎孝政)詩五篇(杉江重英)
『銅鑼』永訣の朝(宮澤賢治)幼年(尾形龜之助)サイホン(サトウハチロー)お鶴の死と俺(坂本遼)二十世紀(原理充雄)妹への手紙(黃瀛)第十三時に踊る(森佐一)松林の中でくらしたい(岡田刀水士)詩一つ(高橋新吉)蛙詩篇(草野心平)行進曲(エルンスト・トルラア)
『新生』燕が屋根裏へ歸つてくるころだ(鵜飼選吉)可愛いいでしょ(高木斐瑳雄)朝戸を繰る音(中山伸)海邊

の教師(栗間久)春すぎ(岡田淑子)煤びた「閑適」(伴野憲)火力發電所その他(中村恭二郎)阿見原の詩(泉浩郎)人間の黄昏(菊地重三郎)佛蘭西農民詩一篇(フランソア・フアピエ犬田卯譯)

『炬火』外苑風景(村野四郎)風(川路せい子)未練(今岡弘)雪に馮かれて(厚見他嶺夫)花鋏(都築益世)訪問(倉橋彌一)空車の鬼ごつこ(一瀬直行)

『文藝公論』詩二つ(高橋新吉)●(草野心平)第三の男(三好十郎)

『主觀』蛙詩篇(加川文一)仔羊の群(福田正夫)

『新進詩人』五月の錯覺(小田信一)憧憬の馬(川上賤緒)春のたそがれ(宮川克己)病春詩篇(安部宙之助)

『椎の木』にはとり(後藤八重子)夜の川(阪本越郎)雪に埋れた葡萄園(青木茂若)風車(棚木一良)海の悲しみ(安藤眞澄)私を刻む(伊藤整)春を迎へた松(室木豐春)愛の哲學(新良孝平)

『輪舞』くらげ(島青魚)あゆおよぐ(疋田敏男)印度古詩抄(バーラヂ島青魚譯)

『文學祭』雨の日に生れる子供(松村久子)れんれする父(高橋新吉)月の子守唄(ソロゲウブ岡田光一郎譯)吉原風物詩(サトウハチロー)

『亞細亞詩脈』無題(佐藤清)私は憤怒を嚙んでゐる(郡山弘史)初夏と寫眞師(清水房之丞)壁のない部屋(後藤郁子)これも僕の詩である(横堀眞太郎)

『青馬』廻診(菊地亮)詩を作る(岡部宇一郎)五月(横堀眞太郎)虹(清水房之丞)

『ミミミノ巻』朝(村岡敏)飴賣爺(關口節)

『花烟』鐘乳洞の女(菊田一夫)ロダンの「考へる人(ル・パンスール)」によせる(安藤一郎)

『先驅』おれ達の先祖(岡本潤)二十四歳の冬(坂本遼)アレキサンドル・ウリヤノフ(原理充雄)女・男(猪狩滿直)穴(三野混純)同志に捧げる私の言葉(草野心平)六助爺(高橋久山)詩二篇(カミングス坂本遼譯)ルシンダマトロツク(エドガア・リ・マスタース草野心平譯)

『亞』庭(安西冬衛)ポオル・エリユアールの詩(北川冬彦・三好達治譯)池畔(瀧口武士)

『奈良詩人』秋、滿月に寄する幻想夜曲(野長瀨正文)彼の死(前尾房太郎)哀しき思ひ出(佐藤武子)村人達(紫田正夫)空、風、雨と詩人(酒井良夫)

『街』天使集(上田敏雄)燈臺(サトウハチロー)雨の黄昏(春山行夫)ある子への詩(石川善助)燕(森竹夫)嫉妬に燃えし少年(天野靜子)櫻の實・春(安西冬衛)構圖

(瀧口武士)

『聖樹』土を掴む者(大澤重夫)梅雨(安藤眞澄)たほしての詩(關澤源二)

『奔流』肯定の歌(金井新作)

『青空』飛行船(北川冬彦)春(三好達治)

『想華輪燈』招魂祭の夜(兒玉勉伍)

『鋪道』詩十四篇(本田親男)

『北方詩人』近代的風景(關澤源治)望郷詩章(興林瑞信)

『歡祭』朝のうた(江口隼人)

『風』あの子も不幸か(野々山虎)生命(青木茂若)

『女性』斷章と風景(室生犀星)

『婦人の友』郵便局の窓口で(萩原朔太郎)

『雄辯』天主閣から(白鳥省吾)

『現代』望郷二篇(ブラウニング竹友藻風譯)

『婦人倶樂部』利根川のほとり(萩原朔太郎)扇子(堀口大學)春(川路柳虹)椿(吉田絃二郎)庭(室生犀星)つばめ(野口雨情)未知の妻に(西條八十)ためいき(佐藤春夫)清氣大來(佐藤惣之助)曇り日のオホーツク海(北原白秋)地上の春(三木露風)夜の雨(白鳥省吾)痴情小曲(日夏耿之介)ゆく春(千家元麿)

『中央新聞』野原にて(金井新作)落陽(金井新作)

『讀賣新聞』死せる妻へ(陶山篤太郎)

『令女界』花を持てる女(佐藤春夫)杏かなる涙に(生田春月)

童謡・民謡・小曲

『近代風景』古風な天長節(平木二六)

『愛鶯』庭にて(西條八十)鐘樓にて(間司つれみ)若き母のうたへる(中田信子)

『文學祭』五月・愛蘭民謡(春山行夫)

『奈良詩人』ほととぎす(西條八十)

『苦樂』カクテールの唄(西條八十)

『雄辯』土佐ぶり阿波踊(佐藤惣之助)

『少女倶樂部』青葉の笛(金子光晴)山の鈴蘭(川路柳虹)ねん〳〵小唄(野口雨情)かざり玉(サトウハチロー)

『コドモアサモ』坂道(川路柳虹)白いこども(北原白秋)水たまり(白鳥省吾)木のお馬(西村醉香)小鳥とお爺さん(清水暉吉)

『コドモノクニ』月夜の飛行機(北原白秋)いちごばた

け(都築益世)午後三時ごろ(サトウハチロー)
『子供の友』鳥のびつくり(河井醉茗) いいやいや(葛原しげる)おせんたく(水谷まさる)
『少女畫報』春ゆく宵(川路柳虹)白百合(福田正夫)夕の鐘(加藤まさを)野茨の匂ひ(栗原潔子)るすばん(サトウハチロー)新入生(水谷まさる)濱風(間司つねみ)出帆(下田惟直)
『赤い鳥』追分、山の驛、野っ原、おまはりさん(北原白秋)
『スキート』パンと薔薇(北原白秋)

評論・批評・紹介・研究

『愛蘭』近代佛蘭西詩講話(ルットキツヒ・リユイソーン)詩とは何ぞや(ツエ・ブラウン)
『詩神』社會主義詩論(三好十郎)大正詩壇の遠望的追憶(長沼重隆)現代ロシヤ詩人の印象(イリヤ・エレンブルグ尾瀨敬止譯)
『地上樂園』白鳥省吾論(室生犀星)ホキツトマンの評傳家に就いて(長沼重隆)朝鮮の農民歌謠(金敎煥)現代英詩講話(ハロルド・モンロー淸水暉吉譯)
『主觀』ホキツトマン評傳(長沼重隆)
『新進詩人』思索人の描く世界(木村秀吉)
『詩學』傀儡圖解(南江二郎) 演劇に於ける新な道(ニコライ・エフレエイノフ・外山卯三郎譯)
『森林』狸の灰皿(宮崎孝政) 大黑貞勝散文詩集「午後三時」を讀む(杉江重英)
『亞細亞詩脈』新しく頽廢せる情感性(山崎比古一)日本民謠序說(田中初夫)
『先驅』赤木健介君に(手塚武)次の社會へ(三野混純)
『北方詩人』後期詩壇への言葉(張田友次郎)
『キング』文豪ピエル・ブノア(堀口大學)
『國民新聞』ロシヤ現文壇の中心(尾瀨敬止)
『中央新聞』井東憲詩集を讀む(江口隼人)「街の犬」に就て(堀場正夫)
『讀賣新聞』「南枝の花」を讀む(井上康文) 本能的な、あまりに本能的な(高群逸枝)
『東京日々新聞』「イエーツ研究」尾島君の新著を手にして(野口米次郎)
『若草』プロレタリヤ詩の成立(三好十郎)
『早稻田文學』戰爭と詩歌(河井醉茗)

感想・隨筆・紀行・小品

『詩神』春眠戲筆(佐藤惣之助)個人的なあまりに個人的な(岡本潤)トラウベル訪問記(長沼重隆)
『地上樂園』暮鳥詩碑除幕式の記(大關五郎)
『文藝公論』田舍の芝居趣味(福士幸次郎)
『新進詩人』或日の私(正富汪洋)
『推の木』過去の詩壇(室生犀星)
『抒情詩』きれぎれのことば(內藤銀策)「一九二七年詩集」刊行について(內藤銀策)
『現代文藝』天龍夜話(勝承文)
『文學祭』湧き返へる糞壺(西川勉) 犬の化けもの、蹴蹴、雀、燕(尾形龜之助)
『亞細亞詩脈』綠光の窓から(內野健兒)「合唱」へ贈る言葉(後藤郁子)
『女性』夫婦生活の危機(井上康文)
『雄辯』南國の旅(福田正夫)
『現代』こども(正富汪洋)
『少女倶樂部』夏雨(佐藤惣之助)
『都新聞』移住日記(萩原朔太郎)
『國民新聞』南信濃の靑葉(伊福部隆輝)
『中央新聞』感想(金井新作)
『週刊朝日』野口米次郎氏の貌(西谷勢之介)夏の女の美しさ(井上康文)歌に現はれた山岳美(花岡謙二)プールの飛沫(花岡謙二)
『讀賣新聞』高級車を馳る(佐藤惣之助)
『令女界』晩春詩話(西條八十)
『若草』酒場での一片語(萩原恭次郎)
『新潮』スペインの夜(堀口大學) 巴里の夜の追憶(西條八十)讀者としての大衆(佐藤春夫)
『名古屋新聞』詩歌雜話(北原白秋)

小說・戲曲

『主觀』虛僞(福田正夫)

夜の海

竹内隆二

目醒めゐて聽く波の音
夜もすがら搖らるる如し

岸打てど言葉とならず
つぶやけど心さそはず

脈打ちて呻ける如し
その波か　われのこころか

夜もすがら暗き岸邊に
わびし音の節もかはらず。

（近代風景）

私を刻む

伊藤整

まだ何も知らないお前へ
幼年の環境が後にはおまへの生地となり
いちど軟い心情にしみ込んだものは
永久に拭はれないことも
まだはつきりして居ないお前へ
どうかしたら私を燒きつけやうとするのは
惡い怖ろしい願ひだ
やつといま一人の人間に出來あがつて
軟かな目附きで　あらゆるものを受入れてゐる
のに
あやまつて

感じの鈍つた人へとおなじにして
私を深く刻みすぎてはいけない。（椎の木）

暖か

厚見多嶺夫

冬には珍らしい空の青さ
湯あがりの溫もりで
曇りがちの眼鏡の底から
日向に　さし伸びた梅の枝に
米つぶほどの蕾のありかを
さぐる　ときのまのたのしさ。

（森林）

マチスの素描

宮田丙午

線のやはらかい　まんまんたる南國の女
貝殼の首輪が陽に光つてゐる
女は暑さを腰卷一つになつてしのいでゐる

マチスノ素描はいつ見てもその儘の姿だ
盛り上る乳房の匂ひ
髪に結へたヒアシンスが官能を包み
または肩部のあまりに人間的な寫形が
いつとはなしに涙を誘ふ

マチスの女よ

天鵞絨(ビロード)の海で化粧した女よ
露出した性の影に祕む愁ひのなまめかしさ
均整した東洋風の面ざしよ

素描ゆゑに色彩を超えた藝術觀
マチスの智慧は輕妙のなかに溢れてゐる
私は素馨(ジヤスミン)の國に思ひをよせる。（抒情詩）

ひより山

落合茂

鳥羽の海はすつきりと蒼く
小さな　まだらな島島が美しかつた
小さな波が
白くゆれてゐた
小さなもの等が
ここ　ひより山をふるはせてゐた。（抒情詩）

七月

詩・散文詩

『文藝春秋』星座の中（佐藤惣之助）踏切みちの歌（犬養健）
『近代風景』呪師の歌（蒲原有明）發生（河井酔茗）眞晝（北原白秋）臨終の鳥であるならば（大手拓次）化石（木水彌三郎）早苗田（府川惠造）MAY（岡崎清一郎）偶作（竹内隆二）五月の空氣（岩佐賴太郎）
『三田文學』自然詩人ドルベンの悲しみ（西脇順三郎）
『愛誦』少年行（西條八十）青葉（前田鐵之助）山童女禮讃（柴山晴美）夜に寄する（シモンズ寺下辰夫譯）幸福なる家（中田信子）童貞（森竹夫）
『至觀』スペイン風景（福田正夫）詩を否定する（八百板芳夫）草（加川文一）
『地上樂園』首切場（國井淳一）樹蔭（菊地重三郎）土・娘・町（胡麻政和）
『詩神』神を造る（加藤介春）現代を歎く（服部嘉香）重罪犯人のために（中西悟堂）聲をきく（木村てるよ）あをぞら（田中清一）ソキエート・ロシヤ・プロレタリヤ詩人の人（サモブキトニツク、サドーフイエフ、アレクサンドロフスキー、オプラードキツチ、フリープチエンコ、黒田辰男譯）アベルの裔達（渡邊渡）炎ひの日（佐々木秀光）春の暴雨（角田竹夫）捨てられた MARI ELAURENCIN（田邊憲二郎）勞働頌歌（清水暉吉）光の銅羅（福田正夫）雪線所（大鹿卓）魂は泣き叫ぶ（村田春海）詩二篇（林靜夫）詩人頌歌（金井新作）大空の愛（松田牧之助）ある時（黃瀛）あの人（廣瀨操吉）新緑（大埜勇次）詩二つ（高橋新吉）
『炬火』船人（蒲原有明）おんどろの中の女（加藤介春）空の不思議（ジヤコブ・山内義雄）苦惱（ヴォーン山宮允）梟（能村潔）ひと日の春（福原清）嵐を呼ぶポプラ（厚見多嶺夫）境遇（今岡弘）樂譜（都築益世）雜草と私（川路誠子）街の呼聲（倉橋彌一）近代英詩抄（村野四郎）
『詩の家』樽（藪田義雄）琉璃新古派の蒐集（菊地亮）月の窓の薇薇（壺田花子）離愁（森千魁）季春寥々（高橋玄一郎）夕ぐれの日課（岩間純）海邊の敎師（栗間久）山の子供（清水房之丞）夜の姿（加藤五郎作）梅雨の晴れ間（天野靜子）海讃仰（椎橋好）クレオパトラ（竹中久七）
『文藝公論』海へ下る（佐藤惣之助）詩一篇（高村光太郎）風の頌（上野壯夫）高田保を送る詩二篇（堀口大學）

『詩洋』抱く(前田鐵之助)南海物語(宮本正清)少女へ(井上誠)流れ(長岡孝一)

『新進詩人』近代都會美學(小田信一) 登音(吉川則比古)海濱抒情(川上賤緒)

『文學祭』七面鳥(ルナアル大久保洋) 誕生日(安西冬衛)道化師(目次緋紗子)

『河』詩三章(廣田末松) ひつそりと光をひそめた(板倉伊八)蛙(宮崎丈二)初夏(杉山隆)

『椎の木』フイリップ・スポオ二章(北川冬彦、三好達治)新月(岡本咲子)厠(半井康次郎)母と子(棚木一良)春夜遊行(安藤眞澄)あめ(後藤八重子)採薇(山口秋月)死んだ仔猫(倉辻龍男)豫鈴(飯島貞)春(青木茂若)たそがれ時(百田宗治)風を見てゐる(伊藤整)

『銅鑼』君・僕(土方定一)我等の冬(小野十三郎) ある序曲(岡本潤)淫賣婦(草野心平)寢床と冬(尾形龜之助)冬の詩(黃瀛)冬と銀河ステーション(宮澤賢治)詩一つ(高橋新吉)明日(赤木健介)三等電車(岡田刀水士)大學生(手塚武)

『生誕』夜ぎりに(鹽川秀次郎)松の芽(横山美智子)宿命(藪田義雄)犬(藪田久雄)

『白山詩人』幼童(中村三郎)詩三篇(河本正義)暮れた波浮港(澤木隆子)叱られる(岩瀨正雄)

『日本海詩人』狂人(千石喜久)正義派の日本海洋地圖(菊地亮)六月の魔術(中村俊孝)或る日(開健)寒月の旅(古賀殘星)故郷の電車(大村正次)

『文藝耽美』神祕說(上田敏雄) 第七課藝術誌(橋本健吉)美髮空間の人間學說(上田敏雄) 素性(ザイデル・中村喜久夫譯)海(友谷靜榮)

『富士山』初夏の惱ましき幻想(比良尾勝人) 哄笑(橋爪健)下宿にて(田邊耕一郎)

『奈良詩人』秋の旅(南江二郎) 馬醉木の奈良(米澤順子)野火をたく(中川靜村)夕暮(酒井良夫)

『詩魔』太陽はかくれてゐる(福田正夫) 私の唄(高木斐瑳雄)葉卷箱(春山行夫) 六月の感觸から(菊地亮)不具者(石原政明) 陽の出前(戸塚八重子) 夜の街を歩く(岩間純)長良川(英美子)

『翁行燈』坂(黑田秀雄)發熱(中田忠太郎) 母(小畠敏雄)瀕(池田能雄)

『街』イスラエルの月(伊藤信吉) 六月の女優(三谷川篤)夏物語(井田貞衛)霧と Piate-band(降旗足穗)

『亞』戰後外六篇(瀧口武士)誕生日(安西冬衛)

『花烟』髮(平享爾) 七月の樹木と少女の構圖(安藤一

郎)六月(大久保はる子)アカシヤ並樹路(深水澄子)

『ミミミノ春』さとし・六月(村岡敏)屋根部屋(宮內清野)

『詩服』ぐろてすく・づう・ぶらんたん・ぬうい(河本正男)自序(津田出之)

『新年』餓鬼道(寒河江眞之助)蕈と動物(上田敏雄)アムンセン氏と廿年代(八木末雄) カルミンロート行進(新島節)

『鋪道』詩十二篇(本田親男)

『野人』素足で歩く(木山捷平)

『礁』おぼえてゐて下さい(津村秀剛)母を想ふ(植村敏夫)遭遇した想の相(山中文夫)

『疎林』朝(高嶋茂)田舍の夜(堀內保) 路傍哀唱(柴山晴美)春愁(青木茂若)

『輪舞』カロヴアチカ(金井融)野そのほか(疋田敏男)音樂(島青魚)

『婦人の友』日曜日(室生犀星)

『雄辯』織工の歌(ハイネ生田春月)

『プロレタリヤ藝術』新聞に載つた寫眞(中野重治)彼を倒せ(長谷川進)女たちに(マルチネ佐野碩譯)

『女性』白秋詞華集(北原白秋) 大谷光瑞と薔薇(兒玉花外)

『聖杯』春から夏への詩(五十嵐二郎) 蜘蛛の詩(西口春雄)春の詩(別所明人)プリタニイのイヴォンヌ(鈴木美智子)

『中央新聞』つぶらなる二つの瞳(水島滿久男)

『令女界』ふらんすを想ふ(西條八十)彼女(川路柳虹)ネル(ルコント・ド・リイル、堀口大學)

『若草』私(大野勇次)東京驛(神戸雄一) 悅び(中田信子)藍いろの山(宮本吉次)

『大調和』詩三ツ(高橋新吉)

『昭和詩選』生活他二篇(福士幸次郎)

童謠・民謠・小曲

『詩神』阿房鳥(藤田健次)古疊(松村又一)泣きながら(大關五郎)夜業(渡邊波光)

『民謠』養蠶唄(大關五郎)往く時(渡邊波光)

『苦樂』柳と水(川路柳虹)

『現代』兎になつた男(竹友藻風) 臺灣の民謠(佐藤惣之助)

『婦人倶樂部』やさしいお月さん(西條八十)みそつち

よ(藤田健次)

『少女畫報』履の跡(加藤まさを)七夕祭(平木二六)遠い國(下田惟直)小さいノツク(蕗谷虹兒) 桃の實(サトウ・ハチロー)

『子供の友』ヨウチエン(三木露風)

『コドモノクニ』チユウリツプ兵隊(北原白秋)ひろめや(三木露風)

『コドモアサヒ』おんぶ(三木露風)競馬(中西悟堂)メソメソ泣き(川路柳虹)シイソウ(北原白秋)たなばた祭(藤田健次)

『少年倶樂部』活動寫眞(西條八十) 豐國の旅(竹久夢二)

『少女倶樂部』子子(佐藤惣之助)大漁船(霜田史光)夏の海(加藤まさを)

『赤い鳥』山の月夜、山のホテル、いちご、てくてく爺さん(北原白秋)

『女性』鮭踊り八篇(北原白秋)

童話

『コドモノクニ』フランスの土(西條八十)とほせんぼう(濱田廣介)おもちやの家(サトウ・ハチロー)

評論・批評・紹介・研究

『文章倶樂部』農民を歌へる近代詩(澁谷榮一)「詩魂禮讃」を讀みて(渡邊陸三)

『愛讀』近代佛蘭西詩講話(リユイソーン)歌聖柿本人麿(横山青娥)

『主觀』ホキツトマン評傳(長沼重隆)

『地上樂園』民謠概觀(河井醉茗) 壟の方言など(柳田國男) 民謠と國民生活(白鳥省吾) 叙事民謠二篇(泉芳朗)岩手縣の民謠(織田秀雄)宮城縣の俗謠民謠(根本紫竹女)會津玄女節(桑原忠吾) 茨城縣の民謠(益子德三)越後追分節(岡田久彌)島根縣の民謠(小林傳十)肥後の民謠(藤淵忠一)土佐の「よさこい節」雜考(山本純三)バアンズの民謠(幡谷正雄)

『近代風景』ボオドレエルの二つの戀(矢野文夫)白秋詩の形態的研究(鈴木信治)

『詩神』象徵主義序說(能村潔)

『文藝公論』何を私が詩に要求するか(萩原朔太郎)雜誌プロレタリヤ藝術に就て(中野重治)詩壇新人合評會

恭次郎、淳三、篤夫、月船、潤、十郎、重治、健)

『詩洋』詩書大觀(前田鐵之助)

『新進詩人』私の信ずる詩(野口米次郎)

『文學祭』佛蘭西の詩歌(北川冬彥、三好達治)

『椎の木』故郷圖繪集を觀る(高祖保)

『民謠』民謠と擬聲語(松村又一)

『プロレタリヤ藝術』讃言の自由(中野重治)ソヴイエツトの詩界を捨てた人々(ラデツク・郡源助澤)

『讀賣新聞』阪本勝氏の『洛陽餓ゆ』(大鹿卓)

『新潮』芥川龍之介の人と作(室生犀星)

『英語青年』キリアム・ブレイク(七月十五日より十月一日まで連載(竹友藻風)

『婦女界』一茶と子供(河井醉茗)

感想・隨筆・紀行・小品

『文章倶樂部』郊外散策(生田春月)

『三田文學』感想二つ(野口米次郎)

『主觀』閑臥隨筆(南江二郎)

『詩神』青瓜閑談(佐藤惣之助) 大正初期詩壇漫談(白鳥省吾)

『炬火』斷想五篇(萩原朔太郎)北滿短信(川路柳虹)

『詩の家』或時記(佐藤惣之助) 眞夏の夜の夢(佐藤惣之助)女人年齡考(戸塚八重子)

『新進詩人』青年の戀人(正富汪洋)

『文學祭』小便のことその他(サトウ・ハチロー)蛇・蛇・蛇(大鹿卓)勞働の實際(角田竹夫)ひと昔(門脇文)

『河』ゲーテの言葉(小栗孝則)

『椎の木』詩集の署名(室生犀星)

『銅鑼』非歷史的その他(土方定一)

『生誕』生誕二十輯記念號に對する感想(生田長江、加藤朝鳥、室伏高信、高村光太郎、佐藤惣之助、生田花世、萩原朔太郎)

『日本海詩人』詩をつくるといふこと(大村正次)

『民謠』閑素なる風景(渡邊波光)

『疎林』草に坐りて(青木茂若)山峽の草(蔭柴山晴美)

『週刊朝日』武者さんとの半日(廣瀨操吉) 夏・女・脚(掘口大學)映畫ファンの新愛人(井上康文)

『アサヒ・グラフ』波の中(生田花世)

『東京日日新聞』海と山(井上康文)日本ライン(ヨネ・ノグチ)

『都新聞』綠蔭漫語(相馬御風)

『朝日新聞』月と扇をもつ回想(佐藤惣之助)詩人の詩話(西條八十)
『讀賣新聞』武藏野・七月(中西悟堂)詩人雜考(神山康人)最俊の清淨さ(芥川氏を悼んで)(室生犀星)上海より(井東憲)紫花山房の夏(花岡謙二)

小說・戲曲

『文藝春秋』神も知らない(室生犀星)
『詩神』指臺外道(詩劇)(金子光晴)
『苦樂』怪賊ピコ(金子光晴)
『朝日新聞』山陰土產(島崎藤村)
『報知新聞』山中生活(室生犀星)

發生

河井醉茗

われ生みぬ。
われ人を生みぬ。
人間は、
大地に立ちぬ。

われ、健やかなる
男を生みぬ。
われ、美はしき
女を生みぬ。

わが身、花發いて、
虛しからず。
薰香、脈脈、
土に傳ふ。

わが血、よく廻り、
斷えず淨化す。
生命は新しき
地上に讓りぬ。

われ、無憂樹の下に生れ、
菩提樹の下に行ひ、
沙羅雙樹の下に、
昇華せんと思ふ。

(近代風景)

船人

蒲原有明

碧い海のむかふに何があるのか、
降りそそぐ光ときらめく浪の穂、
しかも深い足どりの物のかげは
惱ましい潮風に衣をひるがへし、
世界をおしつつむ掌の重たさ。
遠い海のあなたに何が待つのか、
折々は泊てる小港もあらうし、
たとへ黑い颶風がおそはうとも、
それはつとめて凌けようが、
それよりも恐ろしい『うつろ』、
その鈍い大きな掌を
誰がこくめいに彫つて彫つて、
金の星を象眼するであらうか。
かくておのが運命を、あやまたず、
大海原の空にかかぐるであらうとき、
これぞ自らの目あての火、
人間の一心の歌、
しかせよ、あはれ、船人のとも、
神かけて、しかあらせよ。

（炬火）

詩二ツ

高橋新吉

1

私は主に猫の泣き聲を聞いて暮らしました
猫を手拭ひと間違えた事もあつた。

2

日の暮れになるが首がくくりたくなる私は
いつも足を顫はしてゐる。
女の裸體畫が一枚空から落ちて來た。
私は接吻するのにも飽いてゐる。
それであるから唇も齒も私は要らない。
私は柿の木の下に埋めやう。
私も、私にも、私は、私を。

（詩神）

梟

能村潔

おぼろな月暈はかたむき
ものふりた梢に梟のこゑがする。
なにを訴へるのか、深まつた思ひは
おのづから盈れて、みづからひびく。
卓にこぼれるあえかな照明が
ひそかないたみに私をさそふ。
ありとしもなく、ただこころの面、
明るき羞らひにかゞやき、
他はなべて　沈默の、陰影の
そこひにしづむ。
そこに何がある。なんのおもひが、——
遙かなるひとをしのべば、しきり鳴き繼ぐ
梟のこゑ
（眠びたる言葉の匂ひ、失はれたる
意味なき言葉、）けれども、
いためるゆゑに

いためる心は　たのしく、
現實の意味と言葉を捉へる。

すべて　徒爾なるものを距れ、
昨日の言葉を、萎へたる現實を。
愛するものの髣髴は　かゝはりもなき
梟の　もの寂びた重復調にこそ、
　　蘇ってくる。
おもひ疲れたのちにこそ、
空しき胸にこそ、愛は。

愛は　求めない。言葉を
あるがまゝの姿にあたへる。愛を
ことさら　語らうとしない。ただ
受くるものの心にゆだねるばかり、

ありふる知慧のさかしらを
　　忌む。
魚鱗をよぶ水は生き、愛に
みちびかれる現實は耀くやう、
それはただひとつの　眞實。

私は捉へる。その眞實を、
みづからの訴へるもののために。
不可見の世界を、可見の世界に
捉へるその眞實を、愛を。
愛を、しかし　その愛を、
　　梟のこゑがやみ、
くらい梢が風に戯れだしたら、
私は梟にとられ、はるかなるひとに
よびかける魂は、

どことなく
　　翔び去らうも知れぬ。
あの梟のやう、現身を
　　ここにのこしたまゝで。
（ああ　窓飾に　不安の陰影が　搖れる。）

八月

詩・散文詩

『改造』花の音(英美子)

『生活者』紙きれに書かれた紙きれのやうな詩(高橋元吉)

『文章倶樂部』セーヌの釣人(蕗谷虹兒)朝(大關五郎)冬の手紙(宮崎孝政)貸家札(杉江重英)蛙(草野心平)庭の風景(神戸雄一)

『近代風景』月光の賦(北原白秋)古調(蒲原有明)プレイク詩抄(竹友藻風譯)踊る蛇(ボオドレエル、大手拓次)水のなかの旅人(大手拓次)晝(府川惠造)白い船(前田夕暮)其葉蓁々(河井醉茗)

『椎の木』梅の實(三好達治)いま歸れば(伊藤整)願望(後藤八重子)蟋蟀うまる(堀内藤男)鶯の子(丹野浩木智)龜(安藤眞澄)街の裏通り(飯島貞)山岳詩篇(半谷三郎)少女(寺原秀雄)電話線(岡本咲子)街から來るもの(半井康次郎)破れたる風景畫(室木豐春)鯉(長澤三郎)

『文藝公論』きあつへの報告(萩原恭次郎)蟲・ハンモック(百田宗治)新聞をつくる人々に(中野重治)胃袋を押し開いて語らう(渡邊渡)おれ達は知つてゐた(岡本潤)

『詩神』『所有の歌』から(尾崎喜八)霧(三好十郎)工場歌と小唄(小野十三郎)新しきネロ(三輪猛雄)僕の三十五(福田正夫)すずめ(田中清一)運動感覺(竹中久七)消へゆく美しきものへ(新良孝平)蝕ばめる學窓で(倉橋彌一)廢港(菊田一夫)苺ミルク(乾直惠)風(關澤げんじ)白い亡國(伊藤信吉)

『地上樂園』近代娘氣質(相川俊孝)團扇(石川善助)土地(泉浩郎)海豚(内野健兒)雨後(岡村二一)ある人に(小方又星)西瓜(大鹿卓)鉢を投げうつ(大澤重夫)春鶯梶浦正之)泉の詩(菊地重三郎)百姓送葬(國井淳一)私は負けたのであらうか(佐々木秀光)暗い季節(杉江重英)裏町漫歩(鈴木信治)光の中に夏は在る(千石喜久)時雨(田中清一)死をみつめて(南江二郎)無題(林信一)村居(平木二六)老ゴヤ(廣瀬操吉)路地の物音(福原清)梅雨あけ(松村又一)幕を開けば(三石勝五郎)ロダンを想ふ(前田鐵之助)さびしすぎる(宮崎丈二)歸宵(宮崎孝政)葬(山崎泰雄)母の肩(古賀殘星)

『詩洋』赤子の空(前田鐵之助)夏の朝(井上誠)靄(吉原重雄)森を愛しよう(宮本正清)牛(阿野赤鳥)

『炬火』詩二篇(堀口大學)『所有の歌』から(尾崎喜八)一月(大鹿卓)一つ星(澤ゆき子)片戀(福原清)自慰的な都會(川路誠子)近代英詩抄(村野四郎譯)誕生日の詩(倉橋彌一)プレクトラム樂器によせて歌へる夏の小曲三章(山崎泰雄)

『文藝春秋』夏の夕(千家元麿)

『詩之家』シヽリアの花嫁(渡邊修三)黃記(高島茂)夢を見る顏(栗間久)沼(天野靜子)山手の町はこう動いてゐる(椎橋好)夕方(佐藤惣之助)

『富士山』八木澤にて(佐々木秀光)窓のそと(林芙美子)

『鋼鐵』施風(野川隆)血管のために(原理充雄)無題(坂本遼)ホラウ戰役の牧歌(プレット・ハアト)蛙・行進曲(草野心平)

『文學祭』花(末繁博一)一日(庄司克三)蛇祭り行進(草野心平)朝(林正武)

『甕』午前五時(清川緋佐雄)今一度リヤ王を讀まんとして(キーツ、早矢仕寶三譯)

『新生』南紀舟遊(高木斐瑳雄)ひと夏のいとなみ(野々部逸二)五月の花(堀場正夫)朝の魔法(岡田淑子)舊堤防の景(永瀨清子)麥笛(鵜飼選吉)集を拂ふ(中山伸)

『蠶蠶』生きとし生けるもの他十七篇(關澤げんじ)眼(半井康次郎)

『影』魂(岡本咲子)濱かへり(山中杏)

『花畑』記憶の山々(安藤一郎)屍骸(長島正男)朝(大久保はる子)いれがての世界(平享爾)

『牧人』五月雨雜詩(中島哀浪)朝の瞳(中尾殘果)共同井戸(古賀喜八郎)黃金奴の群に(西澤安雄)別後(牧瀨柴夫)

『野人』飯を食ふ音、泣け泣け赤ん坊、つるみとんぼ、ボプラの梢(木山捷平)

『玫瑰』犯罪地帶(佐藤惣之助)悲しき思想(永原實)祇園祭(小森松波)

『鋪道』古畫、麻醉(本田親男)

『詩誌』冬の思ひ(金井廣)僕等の晩餐(松本荷澄)

『星座』庭園(村木竹夫)詩三章(宮島義男)空財布(林茂夫)春(和泉幸一郎)春窓獨思(横山貴象)美容院午後二時(杉山金湖)寂しく歌ふ(比留間喬介)五月の庭から(千種一夫)

『壺』風と女、幻想動物詩篇(中屋久憲)

『北海詩戰』初秋(菊池宵吉)除蟲菊畑の娘達(杉澤文月)小驛にて(秋山辰巳)夜更けの街へ(恐神健治郎)野

生の饗宴(平田千代吉)海(海老名禮太) 階段(高橋掬太郎)

『顔』あるシナリオのテーマ(林定治郎)

『光風地』百日紅のある風景(多賀圭三郎)窓があれば(八十島稔)ぽぷらと村落(三枝幸夫)

『聖地』郷土詩抄(玉井雅夫) 鴉(西口春雄) 田園風景(別所明人)小曲斷章(緒方春二)白木蓮花(鈴木美智子)

『現代』眼(シュリイ・プリユードム、西條八十譯)

『婦人倶樂部』勿問ひそれ(堀口大學)

『婦人世界』白き蝶(西條八十) 夏に海を憶ふ(福田正夫)夏の夜の微風(生田春月)夏の戀人をうたふ(大木篤夫)

『婦人の友』湖中の棺(白鳥省吾)風と蝶(北原白秋)

『苦樂』海のまぼろし(沙良峰夫)

『プロレリタリヤ藝術』兵隊について(中野重治)方向を持てる行進曲(佐藤武夫)

『國民新聞』生活と夏(角田竹夫)

『中央新聞』月(神山時雄)

『令女界』水車の唄(西條八十) 山鳩と閑古鳥(三木露風)海に來て(川路柳虹)砂原(野口雨情)天の眞珠(白鳥省吾)

『若草』接待(英美子)白い瓶(友谷靜榮)

『週刊朝日』馬とピアノ(高橋新吉)

『女性』寫他七篇(北原白秋)

童謠・民謠・小曲

『近代風景』しやく五ぼし(横瀬夜雨)

『現代文藝』娘とおたまじやくし(大關五郎)

『現代』あぢさゐ(川路柳虹)

『婦人倶樂部』七面鳥(佐藤惣之助)粉やの粉やのこほろぎさん(ハチロー)

『コドモノクニ』トマト(北原白秋)月夜の兎(濱田廣介)泊り舟(渡邊波光)

『子供の友』オフネノウヲ(河井酔名) 高山植物(河井酔茗)

『少女畫報』蚊帳のなか(佐藤惣之助) 遠き友情(蕗谷虹兒) 海の帆(サトウハチロー) セルの單衣(水谷まさる)

『コドモアサヒ』ボーイスカウト(北原白秋)金魚(三木露風)蟻(川路柳虹)泳いでゐても(西條八十)水鐵砲(花岡謙二)

『赤い鳥』しろい馬、ひとりひとり、沖(北原白秋)

『優等生』砂の山(花岡謙二)

童話

『コドモノクニ』支那靴とインコ(西條八十)

『コドモアサヒ』蟬の音樂會(清水暉吉)居なくなつた光代さん(水谷まさる)

『時事新報』三味線屋のお爺さん(林芙美子)

評論・批評・紹介・研究

『近代風景』地球のごとく(北原白秋) ヘルマン・ヘッセについて(茅野蕭々)

『文章倶樂部』短歌を通して見たる啄木の一面(壺井繁治)無産派文藝現狀概觀(芳賀融) プロレタリヤ詩運動の核心(三好十郎)『曉闇』を讀みて(福富菁兒)

『椎の木』詩學とは如何なるものか(外山卯三郎)

『詩神』象徴主義序說(能村潔)現代ロシヤ詩人の印象(エレンブルグ、尾瀬敬止譯) 波斯詩聖の回想(梶浦正之)

『地上樂園』『昭和詩選』を讀む(佐藤清)『燃ゆる村落』讀後隨想(國井淳一)『悲しき生存』を讀む(棚澤龍雪)『光は濡れてゐる』に就て(菊地重三郎)詩人の偏見を正す(大澤重夫)林一郎とその著書(萩原朔太郎)與文社の『日本童謠集』を評す(白鳥省吾)

『炬火』『故郷圖繪集』に就て(厚見他嶺夫)『燃ゆる村落』(伴野英夫)『桃春』を讀む(倉橋彌一) 夏の窓邊の時評(山崎泰雄)

『銅鑼』無産階級詩人の立場から(小野十三郎)蚕の卵に就て(野川隆)

『文學祭』佛蘭西の詩歌(ベルナアル・ファイ、北川冬彦・三好達治譯)

『新生』『街の犬』評(中山伸)

『驢馬』上田敏雄氏の詩的裝置(關澤げんじ)大いなる手(牛井康次郎)

『プロレタリヤ藝術』藝術運動の組織(中野重治)

『讀賣新聞』渡邊君の『生活を歌ふ』を讀む(花岡謙二)

感想・隨筆・紀行・小品

『近代風景』午前十時(北原白秋)

『文章倶樂部』水邊雜記(春月)蛙は歸る(室生犀星)
『椎の木』輕井澤日錄(室生犀星)江戸川べり風景(丸山薫)
『詩神』言語の靈(佐藤惣之助)詩人の生活態度(西谷勢之介)
『地上樂園』新興詩壇への期待(白鳥省吾)第一詩集の思ひ出(有明、露風、惣之助、犀星、宗治、介春、清、朔太郎正夫、幸次郎、汪洋、醉茗、夜雨、碎花、雨情、省吾、不二)
『詩歌時報』詩歌の現代意識(土田杏村)詩壇の現狀に就て(白鳥省吾)
『詩之家』圓と三角(惣之助)亡妹愛墓(戸塚八重子)
『雄辯』三つの場合(佐藤惣之助)
『現代』羽衣の松・樗牛の墓(正富汪洋)
『苦樂』海(堀口大學)海の夫人を戀ふる(井上康文)
『週刊朝日』蹴球時代來る(花岡謙二)銷夏漫筆(野口米次郎)
『都新聞』芥川論(野口米次郎)バイカル湖を中心として(尾瀨敬止)東京灣頭の涼味(花岡謙二)
『國民新聞』夏の憂鬱(生田春月)
『報知新聞』北窓雜筆(中川一政)
『時事新報』夏の隨筆(野口米次郎)挿話(尾瀨敬止)
『東京日日新聞』感想(野口米次郎)『詩と風景』(河井酔茗)都會を離れて(伊福部隆輝)木曾川(北原白秋)
『アサヒグラフ』北海道の夏(三木露風)夏と少年時代(室生犀星)森の岡(富田碎花)
『讀賣新聞』ブレイク死後百年(幡谷正雄)北海道廳禁壓の眞相(中野重治)海邊小情(服部嘉香)不思議なる因緣(湯朝竹山人)藤村詩碑除幕の日(福田正夫)
『令女界』詩情(室生犀星)
『若草』海扇譜(佐藤惣之助)海の情趣とその文藝(生田花世)海を戀した三人(萩原恭次郎)
『新潮』淺草(室生犀星)

小說・戲曲

『生活者』my Lord the Baby(タゴール、吉田泰司譯)
『近代風景』月夜の葬儀車(大木篤夫)
『甕』二錢銅貨(野村吉哉)
『週刊朝日』馬とピアノ(高橋新吉)
『令女界』山莊に行く日(生田春月)

夏の夕

千家元麿

家を出て
畠の方へゆくと
自然の力に呑れるやうだ
夕映の焰がひろがつた
猛々しい高大の天空に
私は心戰き、異常な感動を覺つた。
限り無く廣袤なこの
神の力に滿ちた
天然の莊美の要素に
打ち挫(ひしが)れる思ひがした。
ふと見れば傍の草原には
綠の中に白い花が燦々と簇り咲いて
蟲の音がもうやさしくすだいてゐる
私はこの壯麗な天と
この靜寂で優しい地とに心自づと革り
涙ぐましくよろこび勇んで
緣を目がけて突貫した。
そう天の清澄の氣を吸つて
美しい聲を放つ蟲よ、
あわれなまで美しい花開く草よ
自然は一切の微小なものにも
生命を與へ、樂しく彼らの夏を約束する
あゝ田園を浸す惠み深い靄然の氣よ
悲しきまでに淨く美しいこの地上の樂しさよ
私を魅し、引きつけ
かくまでに強く感動を植へつける美よ

毎日の天氣續きに
稻の穗の育ちは良く
青田の緣は生々と鮮やかで
何處を見ても、澄んで朗らかな成長の夏よ
子供等が蜻蛉を捕らふと
長い竿を振り廻し
夕映の空の下を馳ける幼い姿にも
何と言ふあわれな優しい感動を覺へることか
私はこの神々しい夕暮の一時に
深い感謝を捧げやう。樂しいよろこびの涙を眼
に宿らせて。

（文藝春秋）

雨後

岡村二一

新鮮な果實の匂ひを地表に漲らして齊れ上つ
た。
倒れ伏したコスモスと孔雀草
露をふくんで一層妖艶なダリヤ
三坪に足らぬ小さな庭にも
夕立はその刻明な足跡を殘して去つた
太陽、向日葵の花の黃に澄む午後三時！
濡れた土が素足に嬌びて粘る

（手術は終つたのだ）
しみ〴〵と愛撫の手を
花草の一葉一葉に添へてやれば
かすかな安心のなかに尙殘る怯えと泣いじやく
りが此の胸に通つてくる。

啼きだしたのはカナカナだが
杉の秀の並びの空の
暮れるにはまだ間がある緣の映ろひ……。

妻よ！　出ておいで
茄子がこんなに大きくなつた。
（何時たべられるの、來年？）
お前はさう云つて笑つたつけ
だが、此のハチ切れさうな艶を御覽！

二人の生活の庭に初めて實つた生產物だ。
今夜の食卓は精一ぱいの空想と抒情詩で充たし
ておくれ
そら！　またカナカナだ

お前の襟足のあたりに黃昏が匂つて
あのころの樂しかつた夜が待つてゐる。

——誕生二十六年の日作——

（地上樂園）

ある人に

小方又星

もう何時だらう
夜はほの白く明けてきた
さつきから遠い寺の鐘が聞えるやうだ
あちらこちらで雞が時をあげてゐる
まだお前はお前が生れた家で
眠つてゐるだらう
さあ僕がこゝから祈つてあげるから

美しい曉の夢を見給へ

お前はなんといふ
美しい顔と心を持つてゐるのだらう
ほんたうに櫻の花のやうだ
あの植物の精のやうだ
深い大きな眼は永遠と幸福の象徴！
高貴な精神と知識は
いよ〳〵お前を美しくするだらう

お前は不思議な匂ひと色と力を持つてゐる
曉の空氣のやうに濕ひと朗かさをともに持つて
　ゐる
すが〳〵しい水の匂ひと
ほんのりと紅い薔薇の色と

限りなく明るい空の青さと……
　お前の美しさは
僕が一番よく知つてゐる

五時の汽笛が海にひゞいた
お前も里の家で目をさましたらう
雞は相變らず鳴いてゐる
雀も囀り出した
松林の上を白帆が辷つてゆく
今日はお天氣がいゝにちがひない
波もしづかだらう
夏の烈しい日は輝りつけるだらうが。

（二年七月一日、Tのために）

（地上樂園）

畫

府川惠造

わきいづる奇蹟のごとく、
弓なりの刹那刹那は
石垣の面にかかりて
蛇は今、わが眼のあたり、
とををにも、つつがなくなく
うつるなり、穴より穴へ。

そのほとり。水はうつりて、
光の輪、木理（もくめ）のごとく
小止みなく　めぐると見れば
黄金色のややに明りて

おのづから滿千坐りて
畫深き憩ひを示す。

（近代風景）

梅の實

三好達治

梅の實は、輪廓に黄いろを含み、はや蝕まれてゐる。
繪本の赤と緑が、少年の顔に反射してゐる。
蜻蛉が、ついと鋭い角度にひきかへして、行つてしまつた。
曇り空と、閉め忘れられた二階の窓と、
五位鷺がとびながら、ふと、太陽の沈む方へ顔をむけた。

（椎の木）

九月

詩・散文詩

『文藝公論』原理(野口米次郎)瀧について(尾崎士郎)
『近代風景』月映の谿(北原白秋)お前の耳は新月(大手拓次)素馨(木水彌三郎)曠野(岡崎清一郎)キイツ詩抄(竹友藻風)
『地上樂園』詩七篇(白鳥省吾)暮鳥詩碑(服部嘉香)洗濯(鈴木信治)喰ふといふことは汗の固形分である(千石喜久)鞦韆(菊地重三郎)散文詩三篇(國井淳一)
『詩神』鶴でも來ないか(高橋元吉)墓參(小栗又一)雪線行(大鹿卓)何物も存在する外四篇(萩原恭次郎)詩二篇(服部嘉香)ソヰエート・ロシヤプロレタリヤ詩人の詩(ポレターエフ・ポモールスキー・ベズヰミョーンスキー黑田辰男譯)I・W・Wの歌(萩原恭次郎)放たれる日(村田春海)或る裏街(杉江重英)正義を忘れる:(三好十郎)芦の葉に書いた詩(平木二六)偶成(川崎長太郎)藁の中に(松村又一)ある時(生田花世)夕景の窓にて(黃瀛)
『プロレタリヤ藝術』勳章(マルチネ・佐野碩譯)プルショア(ゴルハアレン江馬修譯)人々よ、早く手を握れ(長谷川進)法律(中野重治)
『民謠詩人』夜の詩(加藤介春)六月の或る日雷電が(中西悟堂)母の詩(大村正次)波止場(大村主計)
『炬火』母をおもふ(高村光太郎)靈體(佐藤清)子供(小方又星)散文詩(角田竹夫)東方の花(厚見多嶺夫)登攀の方法(村野四郎)しきびの煙り(川路誠子)おそなつ(近藤益雄)天眼子(一瀨直行)近代英詩抄(村野四郎)マノン・レスコオ(福原清)
『詩洋』挽歌(前田鐵之助)續木公大遺稿集より、詩十篇。星の國は遠かつた(阿野赤鳥)朝(長岡孝一)雲(井上誠)
『文學祭』曇天(高橋新吉)神經(竹中郁)白晝無言劇(岡本潤)髮(Bilitis の歌から神原泰)想(門脇文)鯉(神戸雄一)足の印象(生田花世)桐の花(岡田刀水士)白日銀座曲(清水孝祐)諷刺風景(平木二六)黃昏(近藤正治)結末をつける(井上康文)ポオル・エリュアール二章(北川冬彥・三好達治)羊其他(春山行夫)
『椎の木』御使よりも先に(窒生犀星)道(百田宗治)林で書いた詩(伊藤整)朝の水田(青木茂若)函嶺にて(後藤八重子)

『新進詩人』盛夏三章(小田信一)をとめたちに(橋本正一)
『現代文藝』夏の夜の彼女(白鳥省吾)我兒(尾崎喜八)扇(青旗青太郎)坂と噴水のある風景(井上多喜三郎)荒野の二人(國井淳一)願望(後藤八重子)骨壺(平野威馬雄)
『銅羅』清廉(高村光太郎)詩集「ウーロップ」から(ジュールロマン尾崎喜八譯)百姓同志(三野混沌)ゴム風船賣りの車(岡田刀水士)新聞について(鱶十治)詩二篇(高橋待避)驛に於ける貨車の如く(赤木健介)豚になれ(碧靜江)黑い耕地(手塚武)イーハトブの氷霧(宮澤賢治)
『バリケード』支那よ(小野十三郎)北風に(土方定一)赤い煙突と挑戰狀(東宮七男)廻れ右の機會が來る時迄(津田出之)草野虎藏と赤(草野心平)ノートよりの一節(萩原恭次郎)道はただ一つだ(河本正男)ロシヤ農民への交響樂(江壽盛彌)詩人と淫賣(矢橋公麿)仲間に(手塚武)無題(碧靜江)踏み止まる一群の者(尾崎喜八)農村の詩(田邊若男)再びダダイズムの詩を(遠地輝武)續く發足(梅津錦一)
『太陽花』詩四篇(千家元麿)暴虐の聲(西谷勢之介)眼白の生長(永見七郎)わが詩抄(新良孝平)野性の夏(松田牧之助)冬の星(堀内保)
『新生』思ひ出(高木斐瑳雄)麥は刈られてゐる(鵜飼選吉)愚かなる女と子供(永瀨清子)汗をかきます(岡田淑子)夕月を仰ぎ(堀場正夫)
『亞』庭(三好達治)無題(北川冬彥)澄める町(安西冬衛)秋(瀧口武士)
『雲』葬列(胡麻政和)かげをもつ石(後藤八重子)短檠(山獨房(柳橋好雄)山の短詩(松村又一)出舟(荒井星花)
『日本海詩人』鐵砲百合(大村正次)北方の詩脈とその旗(菊地亮)晩秋(藤田健次)小詩五篇(野村青雲)
『詩魔』魚を賣る婦(河井一二)港の晝(椎橋好)秋(岩間純)港季節詩四篇(杉浦村夫)
『翁行燈』續故園續記(山本信雄)幽房題詩(中田忠太郎)白い傷心(小畠敏種)秋の蟲(黑田秀雄)
『愛誦』巴里の霧(西條八十)夕陽の色(前田鐵之助)室內遊泳(横山青我)九月(佐伯孝夫)蜩を聽く(濱名東一郎)步旅(メリケ・生田春月)
『松江詩人』立秋(坂本精市)秋花、雲(佐々木春城)
『金蝙蝠』名殘り(栗木幸次郎)安息日(小田揚)煙草を一本ふかさねばならない(平澤貞二郎)

『麥の穗』おどろき(金井新作)綠の中の街道(眞壁仁)
『鋪道』詩九篇(本田親男)
『龍騎兵』底に渦卷く(能登秀夫)樹木(永井克己)こゝろ(坂本精市)雨を含む月(北村榮太郎)
『歡祭』木槿(江口隼人)日曜日の夜の散歩 (水島滿久男)惡魔はジャズに踊つてゐる(湯川宗治)
『鄉土』西新井にて(平木二六)
『北方詩人』梅雨(阿部哲)純情詩篇(秋川光義)色丹島風詩篇(石川善助)森の雨(大谷忠一郎)
『曲馬詩人』惡の街(湯川宗二)風景(加藤銀二郎)夜の曲馬小屋(井口正夫)月をかじる(日野春助)
『野人』地球よ廻轉を止めろ(木山捷平)
『婦人世界』ふかなさけ(西條八十)童貞女等に (三木露風)
『婦人倶樂部』野葡萄(大木篤夫)
『雄辯』日本の初秋(尾崎喜八)
『現代』夏深し(三木露風)湖上(ゲヨエテ茅野蕭々)
『アサヒ・グラフ』海の人(後藤郁子)
『令女界』星と花と少女(西條八十)水を戀ふ (生田春月)夕芝(平木二六)坂(萩原朔太郎)
『女性』樺太風景、綠り丘夜景(北原白秋)
『東京日日新聞』大川風景・散文詩(北原白秋)
東京齒科醫專校歌(北原白秋)

童謠・民謠小曲

『地上樂園』淺蜊泣く(松村又一)女人夫の唄 (大關五郎)
『民謠詩人』いいえ妾は信じません(堀口大學)とても呑むなら(横瀨夜雨)夜明前のひと時(メリケ生田春月譯)晝の月(生田花世)可愛可愛とて(大關五郎)馬の瘠せたに(渡邊波光)萱の枯穗に(松村又一)陽氣なアプレ者(サトウ・ハチロー)小唄四つ(平木二六)めだか (藤田健次)內側に向いてゐる眼(ラアツソン・外山卯三郎譯)
『愛謳』聖クルウの女舟子達のはやり歌 (十八世紀民謠)(堀口大學)薔薇の蕾(柴山晴美)祭(青木茂若)
『苦樂』煙草(野口雨情)
『婦人倶樂部』あアかいあアかい(サトウ・ハチロー)カッコ鳥(野口雨情)
『現代』銀座(サトウ・ハチロー)
『少女倶樂部』紅殼とんぼ(野口雨情)名ごり虹 (濱田

廣介)いくら數へても(四條八十)秋の空(ゆめ・たけひさ)
『コドモ・アサヒ』鳳仙花(藤田健次)沙の上 (三木露風)ヒトナリ(西村醉香)
『コドモノクニ』山みち(北原白秋)ペタコ(野口雨情)パーハ(都築益世)望遠鏡(石黑露雄)
『子供の友』お月さま(河井醉茗)
『少女畫報』二つの名(西條八十)街にて(サトウ・ハチロー)ふるさと篇(下田惟直)月を待つ(井上康文)
『赤い鳥』海の向う、白い列、山のおや(北原白秋)

童　話

『コドモ・アサヒ』マハリ燈籠と汽車(西條八十)
『コドモノクニ』雨の日(佐藤八郎)

評論・批評・紹介・研究

『改造』横瀨夜雨論(河井醉茗)
『地上樂園』ウオルト・ホヰツトマンへの回想(クレイス・ギリクリスト・フレンド)現代英詩講話 (モンロー・清水晖吉譯)旅で見た鄉土舞踊(佐伯郁郎)
『詩神』新しき戰車(吉田一穗)波斯詩聖の回想 (梶浦正之)象徵主義序說(能村潔)海外詩壇消息
『民謠詩人』弄齋の小唄 (河井醉茗) 松前追分節斷篇(湯朝竹山人)痛罵し又稱へる(佐藤惣之助)埋れゆく民謠(吉田孤羊)川柳に於ける民謠味(前田雀郎)
『炬火』詩書月評(山崎泰雄)
『詩歌時報』俳壇時評(角田竹夫)詩集「鱶沈む」(井上康文)民衆(記者紹介)
『詩洋』詩書大觀(前田鐵之助)
『椎の木』自由詩の研究考(外山卯三郎)詩を日本語と社會へ(伊藤整)
『新進詩人』プレイクと其深い理解者スウインバーン(正富汪洋)新現實主義詩論(小田信一)
『椎代文藝』京都詩壇動靜(兒玉笛麿)現代民謠詩壇概觀(島田芳文)
『新生』東海詩集合評(井上康文、勝承夫、中西悟堂、佐藤一英)
『森林』青蚊帳(杉江重英)寄居蟹(宮崎孝政)眞赤な薔薇の花(バーンズ山宮允譯)都會(恩地孝四郎) 詩四篇(佐藤清)

『詩』夏と太閤秀吉（中山昌樹）友（耕治人）靜夜溺女（吉田功）自然（關俊平）

『亞細亞詩脈』少女の秋（上田忠男）ヤサシキ野蘇（後藤郁子）朝（岩田よしの）花氷（山本春雄）

『愛論』近代佛蘭西講話（西條八十）近代英詩研究（寺下辰夫）詩とは何ぞや（ジェー・ブラウン）詩書小觀（横山青娥）

『都新聞』蘆花と芥川と左右田と（日夏耿之助）

『國民新聞』諸家の農民文學論を評す（伊福部隆輝）第二の莫斯科藝術座（尾瀨敬止）

『週刊朝日』南畫展を見て（千家元麿）

『讀賣新聞』敵國の人（萩原朔太郎君に）（室生詩星）

『若草』文藝時評（生田花世）

感想・隨筆・紀行・小品

『文藝春秋』俊髦亡ぶ（日夏耿之介）

『文藝公論』斷橋嘆（芥川氏の死と新興文壇）（萩原朔太郎）

『近代風景』輕井澤にて（室生犀星）午前十時（北原白秋）

『地上樂園』盆踊放送三日間（白鳥省吾）詩集の事に就いて（横瀨夜雨）

『民謠詩人』民謠愛頌二三（福田正夫）民謠雜筆（中田信子）民謠雜筆（霜田史光）民謠私鈔（松村又一）

『炬火』渡歐短信（川路柳虹）都會斷想（倉橋彌一）

『詩歌時報』詩の時間性（外山卯三郎）

『文學祭』本牧から（正富汪洋）故郷圖繪集（南江二郎）葡萄の葉（佐藤惣之助）

『椎の木』續輕井澤日錄（室生犀星）室生犀星君の心境的推移について（萩原朔太郎）「故郷圖繪集」所感（惣之助、正夫、省吾、光太郎）木楡のパイプを口にして（春山行夫）夏情秋思（百田宗治）

『新進詩人』詩壇を回顧して（三木露風）詩と散文（須藤鐘一）

『太陽花』ブレエク記念號、ブレイクについて（武者小路實、篠千家元麿、岸田劉生、高村光太郎、河野通勢、大槻憲二、永見七郎、廣瀨操吉、森脇達夫、新良孝平、角田竹夫）

『亞細亞詩脈』芥川氏の死とそのころ（國井淳一）死我等の隣にあれば（北川絹枝）

『富士山』芥川氏を悼む（英美子）

『亞』詩壇について（北川冬彦）新秋の記（三好達治）向日葵はもう黑い彈藥（安西冬衛）練習帖（瀧口武士）

『雲』知られざる詩人（西谷勢之介）湖畔より（山中杏）

『郷土』島崎藤村氏の短篇（大崎治郎）

『北方詩人』詩についての斷想（大谷忠一郎）冬眠（安部哲）

『苦樂』女のクローズ・アップ（井上康文）

『雄辯』小さき翳（中西悟堂）釣の味（佐藤惣之助）

『東京日日新聞』弘法大師のこと（野口米次郎）院展所感（野口米次郎）大調和美術展に就て（高村光太郎）

『時事新報』高西風記（佐藤惣之助）

『週刊朝日』波（花岡謙二）綠ヶ丘の秋（北原白秋）

『讀賣新聞』富士五湖の記（中西悟堂）露都雜記（川路柳虹）初秋の越後から（相馬御風）

『新潮』文學者と戀愛に就て（佐藤春夫）

小說・戲曲

『文藝公論』遍路抄（高橋新吉）

『近代風景』恐ろしい發見（大木篤夫）

『詩神』善光寺の秋・詩劇（田中清一）

『朝日新聞』死體を乘せて（西谷勢之介）

『新潮』イワンの聖人（室生犀星）

とても呑むなら

横瀬夜雨

とても呑むなら　伊丹樽
灘の諸白、抜けかし　鏡

未練がましく　杯を
疊の上に　置くのが　惡し

呑まうは　ささうは　酒呑んで
腐る頭なら　腐らうと儘

裏を掻いたる人故に
稀に　涙の落ちよとも　君よ

怨むまいぞや　先ぢやとて
枕に繞る夢もあろもの

まいぼろつぶろ　角出せば
人を突つくに限れるものか

我も昔はのんだくれ
似たよな　似ぬよな　身ぢや程に。（民謡詩人）

かなしき蟲

杉江重英

何といふ蟲かは知らねど
埃のごとく小さき羽蟲らかたまりて

樹洩れ落つる陽溜りに
たはぶれ追ひつ追はれつ
たのしく遊び消えゆかむともせず
そのさま見れば可笑しく
そのさま見ればかなしげなり。（森林）

マノン・レスコオ

福原清

かつて私も中學生でした
……
ユーカリの樹蔭に臥て
「マノン・レスコオ」を讀みました。
白い雲が微笑する

小鳥の翅のきらめきが芝生にこぼれる……
「戀」は純白なエプロンで私をつゝんだ
夢みる眼ざしは私のものだつた

人生のやさしい膝の上に搖られて
私はあはれなねんねだつた
あの遠い五月の日に
全世界は戀の吐息をつくやうに見えたものです
（炬火）

Y子夫人へ

新良孝平

春は戻りくる喜びに
落葉は美くしく

花は咲き
夕星も樂しく
微笑むとき
いかにわが胸は小踊なすか

青空はひろびろと
海のやうに輝き
エーテルはめでたき渇きをしづめ
いまこそわれはまた
新しき生に戻らん

愛人よ！　高貴なる者よ！
いかに幸(さち)あるものよ！
いまは嫁にせし御身なれど
わが凡てを奪ひし昔より

われを死より救ひ
消へざる青春をわれに結びし者よ！

行かまし　行かまし
遙かなる方へ！
わが希ひに誓はあらじ
心の結びめこそ永久なれば
あわれわが想ひよ！
雲雀よりも高くいとも高く上れよ！

（太陽花）

十月

詩・散文詩

『プロレタリヤ藝術』灰白塵を貫くもの（三川秀夫）タンクの出發（林和）犬にされたカスペルの話しかけ（佐藤武夫）

『生活者』晩夏初秋雜詩（高橋元吉）この川岸には（マルセル・マルチネ、上田秋夫譯）一九一六年九月（ルネ・アルコス、上田秋夫譯）曠野を行く者（眞壁仁）

『文藝春秋』都會の夕と夜（三木露風）

『文藝公論』一分間の空想（萩原恭次郎）佛蘭西および日本の若い詩人に贈る（上田敏雄）彈丸の他に俺たちに何がある（野川隆）K を思ひながら（小野十三郎）正義に就いて（上野壯夫）

『文章倶樂部』戯詩二篇（野口米次郎）相傳（百田宗治）市街地（林信一）展望臺（佐藤惣之助）

『近代風景』山峽（北原白秋）青梅哀吟（大木篤夫）東京・山の手（木水彌三郎）街（矢野文夫譯）畸形兒の肖像（平木二六）旋風のなかをくぐる盲の鴉（大手拓次）夜景（岡崎清一郎）郷愁の青馬車（鄭芝溶）頂上（仲村逡）美しい船（ボオドレエル、大手拓次譯）

『詩洋』高原の唱（前田鐵之助）私達は森の中を歩いてゐた（中西悟堂）草を抜く（長岡孝一）樹（井上誠）續木公大遺稿集より（續木公大）ラビンドラナート、タゴールに（宮本正清）蘆荻集が出版されし數日後（田中令三）月なき夜（伊藤喬信）竹に寄す（佐伯郁郎）聖眼（阿野赤鳥）古典詩抄（吉原重雄）トマス・ハーディ詩妙（吉原重雄譯）リルケ、モルゲンシュテルン、マイエル、ダウテンダイ、ハイニケ詩抄（田中令三譯）ギダンジヤリより（宮本正清譯）レニエ、エー・イー詩抄（前田鐵之助譯）

『詩之家』琉球・新古派の蒐集（菊池亮）精神譜（戸塚八重子）思想（潮田武雄）抒情詩（久保田彦保）仕事をしてゐる女（渡邊修三）心臓をきく（竹中久七）菊（高島茂）

『バリケード』一人の俺と千萬の俺達（岡本潤）地上に（伊藤整）サッコ・ヴアンゼッチ死刑の日（井上康文）馬鹿（碧靜江）百萬のサッコヴアンゼッチを救へ（北晴美）或る秋の頃（齋藤峻）嵐と蟇（草野心平）糧（三野混沌）深夜の大道に働く人々に（金井新作）二人の勞働者（村田春海）機關銃（森佐一）夜の聖壕（エス・コーレフ、上脇進）『四つの譚詩』から（デュアメル、尾崎喜八）

『風』萬華鏡（恩地孝四郎）蜃氣樓（川上澄生）蝦蟇（澤

田伊四郎)雨曇る日(谷内一郎) 痴呆症薄暮(村田家光)
向日葵の歌(神保榮之助)

『若草』現代詩人選集(白秋、米次郎、柳虹、光太郎、春夫、大學、露風、朔太郎、雨情、八十、耿之介、春月、元麿、介春、惣之助、省吾、宗治、正夫、汪洋、清、喜八、悟堂、健、月船、光晴、康文、順子、恭次郎、篤夫、篤太郎、承夫、花世、潤、淳三、新吉、信子、一穂、雄一、渡、卓、八郎、十三郎、十郎)

『富士山』月の夜(井上康文)不景氣な夢(野村吉哉)秋はものを云はない(兒玉勉伍)

『現代文藝』幽靈(野口米次郎)朝(中西悟堂) 全甲(井上康文)月が出る(宮田丙午)ヂヤン・コクトオ詩抄(後藤興善)薄暮の想念(鈴木惣之助)家婦詩篇(生田花世)

『詩文學』生の倦厭(正富汪洋) 用心しなさい(三好十郎) 一枚の銀貨のやうに(大西鵜之介) 山居(伊福部敬子) 芭蕉畑で(菊田一夫) 麥畑での無言の返事(尾崎喜八)護謨樹(大鹿卓)彼等の戰場(三輪猛雄)春の雪(坂本茂子)豆色の空(森佐一) 蛙は地べたに生きる天國である(草野心平)膝たわむ(今井武治)

『詩神』詩五ツ(高橋新吉)稻妻(村田春海)泥船の船頭に(金井新作)ウインネツケ彗星に(神戸雄一) 星(田中清一)ソドムの秋(金子光晴) 家の周圍と僕(福田正夫)舊友への挨拶(小野十三郎)夢の中の神樣(三輪猛雄)街へ行く電車(尾形龜之助)煙出しのある風景(平木二六)急行列車(林靜夫)灼熱の夏の中(中西悟堂) ALPHABET幻想(石川善助)炎の日(佐々木秀光) 遠景(クレインボルグ、安齋七之介譯)

『民謠詩人』雀(服部嘉香)三月の夕(中西悟堂)青い夜(米澤順子)風景小品(福原清) 詩(田中清一) 雨晴所見(大村正次)卵のから(平木二六)口笛(山口みさ子)逆戻り(アイヘンドルフ、生田春月譯) メキシコの民謠(清水暉吉譯)現代獨逸譯詩抄(外山卯三郎譯)

『新進詩人』霧(前田鐵之助)黎明(安部宙之助)くろ鳥(高木秀吉)かなしい見送り(橋本正一) 非詩一篇(川上賤緒) 凋落(岡田保雄)

『牧人』幼馴染(清水雅二)永眠(梅村小太郎)故郷を思ふ(長谷川憲雄)晴れ渡つた日の夢(尾關景雄)月のない夜(伊藤二三夫)傴僂の爺さん(鵜飼選吉)

『地上樂園』冬の仕度(菊地重三郎)乞食(國井淳一)麥踏み(松村又一)朝の夏(千石喜久)自覺(三上英生)生きて在り(田中清一)秋の午後(アンリ・パッシラン、犬田卯譯)

『牧人』崎戸の島(古賀殘星)根本海岸にて(佐藤英郎)折襟(服卷紫浪)雞卵(古賀喜八郎) 魚採りの一日(中原勇夫)

『詩魔』豐年(瀨尾貞男)秋と蛇(杉浦杜夫)嬉しき玩具(岩間純)蜩(鹽川秀次郎) 秋空詞篇(久芳開)莫(林芙美子)

『晴天』銀行で(山崎泰雄)十日頃の月(久保田彥保)海のたそがれ(安井龍)釜をかゝえて生きる(兒玉勉伍)秋の音ずれ(梶浦正之)秋の詩(中野靜兒)

『文藝交醋』漂泊へる藝術詩人(花島克巳)

『紀伊詩人』雨と花賣女(奥田孝照) 田園の朧月(上政治)秋(福井久治)ふるさとを去る(胡麻政和)秋(高井みたび)

『花甕』寂(日岐武) 陰遁とテロの家(西條守夫) 秋空(青木精三)秋郊素描(塚田祐次)

『聖樹詩人』秋風の賦(遠地輝武)死面(淺野源兒)秋と淀川橋(吉澤獨陽)くれがた(大西鵜之介)みかん(胡麻政和)

『版畫と詩』麗人は華の中に(大場俊助) 田植圖(露山一穂)秋空(仲村火作)籐寢椅子(山口芳光)秋(有馬潤)

『青銅』梅(神戸雄一)青島行(谷村博武)名も知らぬ花(鷹樹壽之介)蛇の言葉(候御葛稔) 海岸の風景(前川晴夫)秋(重永久雄) 俺の詩に(垂水由藏)

『北方詩人』切斷された風景(大谷忠一郎) 喬木(阿部哲)ひらかぬ花(秋川光義)秋すでに草叢に(吉田迪男)

『聖杯』青狐(鈴木美智子)雲と青草(五十嵐二郎)呪はれた詩から(瀧下繁雄)雀(別所明人)脫線(門田穣)更夜合掌(玉井雅夫) 淨土遍歷(緒方春二) カルト教團僧頌(ダウスン、鈴木美智子譯)

『青山文學』願望(横山格郎)僕の消息(伴野英夫)

『表現詩人』部屋の秋(生田花世)柔和な光の朝に映ずる(中島春宵)庭園の朝餐(十河祝)炎海(島野一衞)散策の途上で(北村榮太郎)學童園(田尻宗夫)緣端の臭さん(堀田道太郎)信仰(白石軍司)

『甕』詩二つ(高橋新吉)明るい山(濱一)ルコント・ド・リイル詩選(金子光晴譯)アポリネエル詩選(川口正人)

『青馬』朝の希ひ(岡部宇一郎)思慕詩篇(横堀眞太郎)黃蜂と戀(森千魁)登山列車(田島嘉之) 晴天白日旗(清水房之丞)

『北國詩人』葉緣素(河井醉茗)斷章(宮下新之介)秋の感觸(河内義之輔)弟への便り(小林茂一郎)七月の阿賀(阿部和登)手紙(上田涓太郎)

『金蝙蝠』何事かを思ひつゞけてゐる(平澤貞二郎)夜更けの道化(栗木幸次郎) 色彩美學(森佐一) 淫賣婦へ(小田揚)

『てのひら』金魚 (百田宗治) 涙(荻原井泉水)みなれた下駄(小西武) 故郷(和泉亮一)野の中に歸る(半井康次郎)風(谷修一)朝の濱邊(飯野晃二) 雨(新村光秋)毀れた門(高祖保)生活(西川喜一)草丘(野澤正春)五月の暮色(西村和文)廣い農園地(清水清)渡鳥(乾癸卯治)はつあき(田畑善兵衛)樹かげ(室木豐春)

『花畑』北東の風・雨(高村光太郎)喇叭(大鹿卓)冬の抒情詩(サトウハチロー)夜の詩(加藤介春)或るこころの風景(安藤一郎)樫(神谷暢)斷腸(菊田一夫)霧の監視兵(黄瀛)近代英詩抄(安藤一郎譯)情魂(平享爾)

『新生』鳶の啼く風景(件野憲)秋を知れ(堀場正夫)秋呼ぶプラ(中山伸)青柿(鵜飼選吉)九月(永瀬清子)無花果の樹(高木斐瑳雄)

『生誕』赤い椅子(壺田花子)秋風(林好幸) 扇(藪田久雄)漕手(竹中久七)餌じき(鹽川秀次郎) まぼろしの波(藪田義雄)

『三角』棄てた麥稈帽(岡西貞)朝の東京ステーション(下田巽)

『曲馬詩人』黒い話(淺野源兒)海岸で(大江滿雄)晴雨計を忘れた蛙(伊藤喜代太郎)娘の夢(湯川宗二)盛裝夫人の昇天(日野春助)それはなんであるか(井口正夫)

『びーばる島』野に立つて生命を報ず(大澤重夫)秋風(千石喜久)青い封筒(中村漁波林) 英詩十篇(中村漁波林譯)

『現代』夕のしらべ(ボオドレエル、堀口大學譯)菊橋のほとり(平木二六)

『婦人世界』高原の女に(白鳥省吾)

『婦人之友』一挿話(野口米次郎)

『キング』救の細指(尾崎喜八)

『雄辯』斜陽(三木露風)菰野湯の山(井上康文)

『燭臺』月影微韻(生田花世)薊花(玉井雅夫)病床百章(吉田常夏)クリスマス(脇坂開介)

『令女界』樂しき空地(西條八十)月の中(佐藤惣之助)蒼ざめた戀(大木篤夫)街のお孃さん(竹久夢二)

童謡・民謡・小曲

『詩神』たんひよこ踊(前田いさむ) 氷屋の娘(青木茂若) 別れ(後藤檜根)苗の植時や(塚本篤夫)

『民謡詩人』美濃關町の唄(野口雨情) デモ民謡(佐藤惣之助) 雲にのつて(濱田廣介)お前の草履(サトウ、ハチロー)笛の音(渡邊波光)時(時雨音羽)老農と娘(山岸曙光子)秋の花(針谷章三)萩雨(石川善助)野火(松村又一)何が恐かろ(大關五郎)椎の實(藤田健次)

『地上樂園』古時計(朔麻政和)白い乳房(高橋たか子)七島灘渡り(泉芳朗)三色聯(月原橙一郎)

『民謡と小曲』馬子唄(藤田健次)身も細る(針谷章三)畑鋤の唄(大鹿照雄)吉原風景(塚本篤夫) 日稼ぎ(益子德三)新作馬子(島野一衛)榛名詣(佐々木綠亭)晩鐘(下田惟直)緣切り小路(間司つれみ)

『かなりや』浮言(本澤浩二郎)接吻(塚本篤夫)別れても(針谷章三)さてもつれない(益子德三)そつとおきよ(松山克巳)

『民謡』田植時(飛鳥井軒一)

『現代』旅(藤田健次)

『婦人倶樂部』庭の徑(三木露風)待つ宵(井上康文)赤とんぼ(藤田健次)

『苦樂』笠と煙管(西條八十)

『少年倶樂部』S探偵(西條八十)すまふ(竹久夢二)小笠原島(サトウハチロー)

『コドモアサヒ』みみづく(松本淳三) 小人とマッチ(西條八十)航空母艦(北原白秋)赤蜻蛉(三木露風)栗の實(花岡謙二)

『コドモノクニ』坊やのきくわんしや(北原白秋)パパア(野口雨情)すすきと月(水谷まさる) 草から(三木露風)

『子供の友』チカミチ(河井酔茗) とけいやさん(恩地孝四郎)

『少女畫報』手紙(西條八十) 初秋の寂しさ(加藤まさを)トランプ(サトウハチロー) 白い窓(下田惟直)あなたの癖(水谷まさる)

『赤い鳥』月夜の波止場、白帝城(北原白秋)

童話

『コドモノクニ』風船と松の樹(西條八十)

『コドモアサヒ』秋のたのしみ(清水暉吉)

『週刊朝日』白い犬をつれた少年(平木二六)

評論・批評・紹介・研究

『近代風景』詩の起源(竹友藻風) 藝術母胎論(伊福部隆輝)
『プロレタリヤ藝術』藝術に關する走り書的覺え書(中野重治)『分裂の眞相』の眞相(小堀甚二君の良心的心切)(中野重治)
『文藝公論』米國文學の輪廓(幡谷正雄)
『文章倶樂部』芭蕉の俳句(室生犀星)
『詩洋』人生の詩聖カピール (宮本正清) 詩人の宗教(タゴール、宮本正清譯) 詩書大觀(前田鐵之助)
『詩之家』『横濱娘』の著者へ(天野靜子)
『バリケード』耽美家的革命心理について (小野十三郎)デュアメルの一譯者として(尾崎喜八)
『現代文藝』ウイルフリッドの詩論(兒玉笛麿)尾崎喜八小論(推橋好)地上樂園の人々(佐野嶽夫)
『詩文學』宣傳藝術としての詩(小野十三郎)非詩論的詩論(三好十郎)尾崎喜八論(松澤保和)赤人西行芭蕉の自然愛に就て(兒玉勉伍) ロシヤ文壇の新勢力(尾瀨敬止)
『詩神』影像派の詩人クレッチャー(清水暉吉)詩壇時評(春山行夫)美から喜びへ(三好十郎)
『民謠詩人』松前追分節斷篇 (湯朝竹山人) 民謠小論(白鳥省吾)能狂言の小唄(南江二郎)
『地上樂園』プロレ現實詩派再展開論(鈴木信治)『小さい芽生』を讀む(月原橙一郎)再び『日本童謠集』に就いて(白鳥省吾)飛彈の古民謠に就いて(福田夕咲)支那の民謠(中村漁波林)青雲莊雜記(中村恭二郎)
『晴天』愛蘭詩人の半映像(井上清志)
『北方詩人』詩集『開墾者』の著者について(中野勇雄)
『花燭』內在律の研究(平享爾)
『都新聞』ロシヤ文學の新しき道(カウズネル、藏原惟人譯)詩話會解散一年(尾崎喜八)
『中央新聞』日東詩壇の沒落(大貫よし江)『藝術の圓光』を讀む(松本德太郎)『横濱娘』を讀む(八十島稔)
『時事新報』惡魔主義?(萩原朔太郎)
『東京日日新聞』詩集『曠野の火』(中西悟堂)英語教育の必要(竹友藻風)福田正夫詩集『種播く者』(井上康文)

感想・隨筆・紀行・小品

『文藝公論』高原帶スケッチ(佐藤惣之助)二十歲の憂鬱(生田春月)修道院志望など(萩原恭次郎)鈴木彥次郎に就て(伊福部隆輝、富田常雄)

『文章倶樂部』秋の夫人(生田春月) 鮮滿日錄(川路柳虹)好きな作中の女性(生田春月、室生犀星)
『詩之家』薔薇の秋風(佐藤惣之助)詩人としての芥川氏を悼む(杉浦杜夫)
『バリケード』月光(松本淳三)烏山から(土方定一)雜言一片(廣澤一雄)浴漕漫語(矢橋公麿)
『風』詩・創作版畫について(恩地孝四郎)
『若草』郁子の棚(米澤順子)芥川氏の遺書(高群逸枝)
『現代文藝』詩書蒐集病(井上康文) りぶろ隨筆(南江二郎)
『詩文學』ハチロー雜筆(サトウハチロー)ジャン・モレアスの小像畫(西崎滿洲郎)批評的精神(宮本武吉)人格者非人格者(坂本哲郎) 惡魔から貰つて來た友情(伊福部隆輝) 河の言葉(松澤保和)
『詩神』雲表と氣稟(室生犀星)詩性反應(井上康文)八丈島雜記(渡邊渡)
『民謠詩人』閑吟集の唄(渡邊波光) 民謠小見(生田花世)民謠雜筆(中田信子) 民謠私鈔(松村又一)川柳に於ける民謠味(前田雀郎)
『主觀』南枝戲花(南江二郎)『恐ろしき私』を讀みて(清水暉吉)
『地上樂園』田園小品(白鳥省吾)
『詩歌時報』詩史の研究(外山卯三郎) 詩書の話(金兒農夫雄)
『新進詩人』花木槿(正富汪洋)
『現代』秋が來た(薄田泣菫)
『婦人倶樂部』戀の民謠をたづねて(松川二郎)
『週刊朝日』港小景(林芙美子)
『アサヒグラフ』美人帝國(井上康文)
『令女界』墓地の岸近く(水谷まさる)
『新潮』詩の金堂(野口米次郎)映畫雜筆(室生犀星)

小說・戲曲

『近代風景』マドロスと幽靈(大木篤夫)
『プロレタリヤ藝術』ドイツ國民黨員(ヘルミニア・ツーア・ミューレソ、中野重治譯)
『詩文學』老人(神戸雄一)窓(尾形龜之助)センチメンタルな秋の夜(清水孝祐)落第(野村吉哉)
『主觀』官海術(清水暉吉)或る朝の出來事(井上康文)
『塞』魚になつた新助(野村吉哉)

雀

服部嘉香

風のやうな流れ
灰と散り、
朽葉と閃く、
一つの生
影ばかり。

野の青葉
輝いて風に惱む、
搖れ、搖れ、惱む弓形、
その前を
聲のない一つの影。

（民謠詩人）

雲にのつて

濱田廣介

夏がいつた　夏が
日傘さして　日傘

ちらりと　とほい
風せん　玉か

赤い　赤い　雲か

夏がいつた　夏が
雲にのつて　雲に

ふわりと　かるい
あの雲　どこへ

天の　天の　果へ。

（民謠詩人）

乞食

國井淳一

此の家には幸福があるがな——？
俺は思ひ出せねえほど長い旅を來たによ
幾度其の路傍の門を潜つて
明るい灯の下を覗いたことかよ。

俺の脊後と前には
はてしもない埃道がうねつてゐるに、
瘦犬が通り馬が通り
その後をとぼとぼと俺は來た乞食だに
此の家には幸福があるがな——？
俺は莚戸を叩き
高く光る玻璃窓にも縋つてみたがよ
あゝ　何處の家からも青白い手が
濕つた食べ物を投げる丈けだに。

子供等が「木の股から生れた」と思つてゐるや
うに
俺は土の中からでも生れたのよ、
そして土が俺の腰を埋めはじめたいま
幸福は風みてえに飛び去つてよ
御天道樣だけがほかほかと

痩せた俺の背中を抱いてくれるだに、
雲も　此の憐れな老人乞食の死顔を
青く澄んだ空から見て通るべえに。

（地上樂園）

麥踏み

松村又一

やだよ
あの人
こちらばかしみてる
麥を
ふんでは
ちよつくら　ちよつくら　やすみ

ちよつくら
ちよつくら　やすんでは
煙草ばかし
すつてる

やだよ
あの人
よう　いつまでも。

（地上樂園）

夜景

岡崎清一郎

樹に樹を重ねて
煌く月明……

あを冴えた谿間よ
銀の湖

わしはかまはず
樅の前景に
斧鑿を加へた。

（近代風景）

夜更けの道化

栗木幸次郎

秋老ひはじめていまだ青ざめて實る庭のトマト
を
夜の目につまんでずらりと机の上に並べてみた
夜ふけのセビヤの卓の上で私は空のコップをも
てあそんだ
冷めたい觸感をあたへる銀メッキの匙を赤い舌
でなめてみた、
私の座つてゐるのは蛾の死骸のあつぼつたい翅
の上ではなからうか
黄に茶けた疊の上に私の影がぶつ倒れてゐる
黑い頭の上では蜘蛛が巣をはつてゐた
私は机の上に水を盛つた器を望んだ、そしてそ
れに泳ぐ一匹の赤い金魚を。
髭ばかり剃るのが人生じあない
私は金魚を輕くにぎつて空間にたゝきつけてみ
たかつた
今夜もカミソリをつかひながら鏡の中に自分を
見失つて終ふのだらうか。
いや燃えさしのマッチの棒を數へるのがいい

それから名刺を並べて遊ぼう
栗木幸次郎
栗木幸次郎
次も栗木幸次郎だ
一列にしてみたり四角に組んだり。
とりちらしてなくした一枚はマッチをすつて探
そう　（金蝙蝠）

まぼろしの波

藪田義雄

波をこへ　波をこへ
とぼざかりゆく澪のなきがらを呼びもとめ、
おもふひとの姿は
黄昏の空へうすれてゆく。
ああ　たんぽぽの白いむく毛は
にほひにたつ、ちらばりつつ
ひかりのおもてにうちしめる、
遙かまぼろしの波をこえ　波をこえ。
（生誕）

十一月

詩・散文詩

『近代風景』月夜の野道（北原白秋）合掌する縊死者の群（大手拓次）繭（府川惠造）哀歌（竹友藻風）現代佛蘭西詩抄（大木篤夫譯）
『生活者』夜の雲（高橋元吉）
『文章倶樂部』殺人鬼（野口米次郎）
『文藝公論』彼等の一人が言つた（三好十郎）投票函（小野十三郎）市ヶ谷の冬（黄瀛）
『詩神』詩六篇（福田正夫）詩二篇（岡本潤）風景（陶山篤太郎）敦賀印象（勝承夫）ものおもふ日（田中清一）田舍の湯屋（千家元麿）葡萄（大鹿卓）嘘二題（三輪猛雄）海底の群（國井淳一）海濱博覽會（岡田刀水士）芝浦からの歸り（黄瀛）黑い聲音（畑山清美）落日街（森三千代）ある露西亞人（松村又一）アメリカ勞働者の詩（萩原恭次郎譯）罌粟（フランシス・タムスン安藤七之介譯）嵐（阪本越郎）笑へる浪人（野村吉哉）
『詩文學』手（手塚武）天の唇（生田花世）勞働を嚙む（角田竹夫）とほいゝ人よ（伊福部敬子）深夜（大村主計トモダチエ！（三好十郎）戀愛後記（尾形龜之助）散文詩三篇（廣澤一雄）ある老人（田尾榮一）路傍の草木（石川善助）神秘の中にありて語る（中西悟堂）
『詩集』「所有の歌」から（尾崎喜八）尾崎喜八に（中西悟堂）裸身に恃む（岡田淑子）炎天神經（窪野親義）油蟬（大村正次）裸身に歌ふ（中村俊孝）老子の小便（繩田林藏）燕岳の頂上にて（奈加敬三）鴉（金子光晴）秘錄・悲憤獨白（南江二郎）秋晴れの輝かしい朝（井上康文）敬虔な戰士に贈る（八百板芳夫）俺たちの血潮（西川喜一）何の痕跡も殘らない人生（平井實）秋（池永治雄）途上無題詩（木村直祐）田舍の秋（高山武夫）月情素描詩篇（佐野嶽夫）高幡山にて（橋本正一）譯詩二篇（デュアメル尾崎喜八譯）舞曲の辭（ルイズ・アンタメイア俵青茅譯）
『バリケード』技術について（小野十三郎）何時も優しい聖母樣（森佐一）俺達は刈り穫る（三野混沌）ハインリッヒ・チルレ（手塚武）悲劇（坂本遼）暴雨の日に（津田出之）この空が裂ける時機が來たら（坂本七郎）小詩二篇（エセーニン上脇進譯）
『地上樂園』磨ぎ上げた鋼鐵の（中村恭二郎）野良犬（國井淳一）普選を詩にして（千石喜久）收穫感謝（菊地重三郎）嫁ぐ妹に（胡麻政和）さびしい人生（櫻庭芳露）

砲彈の中に立つ(五條康雄)秋興斷片(月原橙一郎)一人たそして全體た(鈴木信治)秋日詩章(白鳥省吾)

『民謡詩人』夢(野口米次郎)夕星(百田宗治)心よ心よ(宮崎丈二)柿の實(高木斐瑳雄)能登の海(杉江重英)秋(尾形龜之助)子鳥の尾(福原清)夜の感傷(藤田健次)九月から十月へ(中西悟堂)

『太陽花』白菊(千家元麿)噴水の傍にて(新良孝平)酒の詩(西谷勢之介)痴者(佐々木秀光)野の贈りもの(鈴木白羊子)秋(廣瀬操吉)聖なる暗(森脇達夫)青物畠(堀内保)暮方の森(柳橋好雄)仕事斷片(永見七郎)

『詩洋』父(前田鐵之助)月射す蚊帳の中(阿野赤鳥)發掘の生(宮本正清)月の出(田中令三)秋(佐伯郁郎)庭の朝(續木公大)月の出た(井上誠)憩ひ(長岡孝一)

『炬火』遊牧(山崎泰雄)おや!(福原清)樹(今岡弘)病旗(伴野英夫)ゆうべ(近藤益雄)傷心(倉橋彌一)出産は一つの快樂だ苦しみではない(板垣芳男)雨の中から(川路誠子)近代佛詩抄(ガボリー竹中郁譯)近代英米新詩抄(カミングス、フリント村野四郎譯)秋宵(一瀬直行)

『蠶蠶』街から來るもの他十六篇(半井康次郎)まあるいはなし(關澤源治)雲雀・蒲公英(興林瑞信)光輝ある手紙(シンジ・ニジムラ)この頃の俺(北村草之助)

『新生』屋根の上の(中山伸)電柱(高木斐瑳雄)秋の歌(永瀬清子)私の十月(鵜飼選吉)夜更けに(野々部逸二)畫の前(伴野憲)秋(掘場正夫)人生の縮圖(岡田淑子)秋立つ日(佐藤豐)

『花畑』夜光虫のうた(安藤一郎)山(平享爾)近代英詩抄(安藤一郎譯)

『文藝耽美』澤詩二篇(ルイ・アラゴン上田保譯)生命の頌(上田敏雄)1遠景2遠景(友谷靜榮)

『亞細亞詩人』廻燈籠(大鹿卓)夏の月(室木豐春)死骸が重たい(柴山群平)小春日和(高祖保)雪(關澤げんじ)

『富士山』都會の詩二篇(岩崎純孝)舞ひたい心地(正富汪洋)

『黒流』街路に立つて(宮田勇)彼奴の存在を拒否する(野田欣三)私は田草を取らねばならない(安達實積)愛(齋藤純一郎)月夜(岡田かずる)

『トロイカ』曉の鍬徑をゆく他三篇(石田象夫)心の葉亂るゝ時に(生田花世)柿(堀場正夫)

『A Corner Shop』落葉(森竹夫)消衰(大鹿卓)待つ(サトウハチロー)戯網(伊藤信吉)へちまに寄せる(水

島滿久男)秋(多賀圭三郎)森の中・女・夏草(尾形龍之助)彼女(福富菁兒)

『詩童子』つかのまのゆめ(伊藤濁子)石ころ(大谷吉正)夕ぐれ(高祖保)蛙(安藤眞澄)飛躍を欲する(栗間久)曇天(關澤げんじ)二百十日(室木豐春)蝶(青木茂若)都會(胡麻政和)こほろぎ二篇(伊藤和)

『颱風』去年のカレンダー(渡邊竹二郎)黒旗の飜へる時(山内恭三)黎明(東玲二)胸に咲く花は青い(溫井義信)月の出の地平に序する歌(津田秀夫)

『機械座』フォーチュン・ハンターズ(齋藤光次郎)シネマホールの秋(犬飼稔)秋(松田金秋)瑪利亞樣の繪本(龜山巖)

『柊』雪になれば(篠原義一)夜(池田穣)蘇鐵(藤藤四郎)血(湧口收作)裏街(伊藤精一)

『日本海詩人』らくだ雲(栗間久)乙女の心(錦織正夫)

『鄕土』けふの影(大木篤夫)

『大踏』勞働者うめき(永井一郎)秋(麥屋南莊)山里の池(加藤正信)特急列車にて(石川忠二)

『原始人』詩二つ(高橋新吉)坂道(清水晖吉)晩秋曇りの詩(室咲晃二)

『情熱』青空(相馬かずまさ)うれひ(青木茂若)現實の影(西村普作)漂泊秘戯(細越夏村)

『蛇布』停車場風景(清水信)

『新年』夜を愛することが出來ない(新島節)Hospital Zone(寒河江眞之助)無題(市島三千雄)

『鐘道』怨情(本田親男)

『松江詩人』怪談の蛔(加藤介春)新しき墓標(坂本精市)曇り日の街(栗間久)秋斷章(佐々木春城)秋の一日(宍道達)

『月輪』詩三節(杉田謙作)

『解放自治』一石(野口米次郎)ラルゼの處刑(土方定一)播種者(ゐがり滿直)拒否(三野混沌)歌(手塚武)

『北方詩人』朝(秋川光義)腐敗する自像(野村俊夫)玩具(赤木しらほ)蛾(阿部哲)晩秋(大谷忠一郎)雜冬雜片(角田宏正)秋天(木内進)老農夫(佐藤光路)

『たび路』工場の朝(谷口露花)

『プロレタリヤ藝術』プロレタリヤ(無名氏)イリイッチの長靴(佐藤武夫)誓ひ(緒方貞翁)清算(坂田算一)四つん這ひになつた少年(長谷川進)

『新人詩歌』秋陽(恩田幸夫)酒の詩(西谷勢之介)半透明な秋想(角田宏正)兵隊になつてた時の詩(三枝幸夫)

『山嶽詩人』くされ路の村落(加藤吉治)野に立つて生

命を報ず(大澤重夫)
『文藝解放』もう一度兄弟に呼びかける(岡本潤)君等の葬式を俺は知らない(横地正次郎)この寂しさをぶち破れ!(金井新作)
『詩之家』老婆(久保田彦保)ミサンスロピストの花束(渡邊修三)白骨(門脇英鎭)ゴールド・ラッシュ(竹中久七)禮節(高島茂)
『玫瑰』波止場(中西靜夫)隔離室(池田輝洋)
『野人』その女は他三篇(木山捷平)
『南方人』詩四篇(松田重遠)子供の詩(神戸雄一)妖術秘節(野村吉哉)
『ヴェンテーゴ』卷頭曲(山岡巖)人間の歴史の創られる新しい黎明に(手塚武)●(草野心平)斷章五篇(相川俊孝)煤煙によごれた月(岡本潤)泥醉せる鄕愁(岡田光一郎)勞働頌歌(清水晖吉)
『齎馬』しれまと秋(森千魁)朝雨(田島嘉之)薔薇(岡部宇一郎)十五夜(横掘眞太郎)村の七月(清水房之丞)
『薔薇藝術學說』へんてこな三つの晩(イナガキ・タルホ)Capricciо (富士原清一) Poémes (上田敏雄) 高層記號料理(橋本健吉)第一短篇集(田中啓介)
『新樹』湖畔の朝(塚原嘉重)朝(中西悟堂)光は發狂してゐる(福田正夫)小岩に寄す(高津信次)
『てのひら』虛心(大村正次)見送らう(牛井康次郎)秋の午後(坂本茂子)秋(安藤眞澄)秋の一日(清水清)秋水(丹野浩木智)日なた(阪本越郎)夜(西川喜一)こほろぎ(高祖保)朝顏の蕾(室木豐春)詩神の聲(小西武)私の床屋(田畑善兵衞)
『敎人』怯怖(梅村小太郎)停車場への道で(鵜飼選吉)薄暮低唱(伊藤二三夫)黃昏(長谷川憲雄)屋根裏の私(清水雅二)
『新進詩人』愛(正富汪洋)山巔にて(中西悟堂)生活なき人間(橋本正一)蒼空に描く(川上水夫)こほろぎ(三浦和雄)お天氣(岡田保雄)
『生誕』新月哀墓(藪田義雄)象景集(鹽川秀次郎)この風は(壺田花子)雨の葡萄畑にて(岩瀨久江)犬ころとなつて(林好幸)丁字の花(藪田久雄)
『かげ』秋の詩二つ(大關五郎)煎藥(岡本咲子)ある夜(山中杏)夕方の川(栗田不羈夫)
『愛誦』土偶(西條八十)聲(前田鐵之助)雲と牧牛(横山青娥)冬の夜ふけに(宮崎博史)幻夢に生きる(柴山晴美)嘆きつゝ(麻生恒太郎)秋(青木茂若)或る序幕(加藤憲治)ある日(佐伯孝夫)海のかなたの聖女(喜志邦三)

『亞細亞詩脈』浮標(郡山弘史)
『港街』船長(加藤愛夫)豐沃な武藏野の土よ(眞壁仁)靜思二體(葛西暢吉)月夜にめぐり逢ふ(伊藤整)朝霧の中から(伊藤喬信)淫賣婦となつてゐた乙女に(渡邊茂)連絡船の三等待合室にて(金井新作)東風と翁(更科源藏)
『現代文藝』雀(服部嘉香)一歩(三石勝五郎)アルベール・サマンの雪(春山行夫)植物の詩二つ(平木二六)
『若草』銀座(陶山篤太郎)内氣な壺(米澤順子)縞鯛(大鹿卓)夏の夕べは薫る(友谷靜榮)
『雲』煤けた暦(松村又一)晩餐の詩(大關五郎)
『日本海詩人』紫水晶(藤森秀夫)半生の秋(茅野利一)枯葉(長澤郁朗)詩三篇(菊地亮)秋雨斷片(野村架津正)
『北國詩人』靜物(河内義之輯)夜の客(阿部和登)色盲狂(宮下新之介)秋心(小林茂一郎)
『名古屋詩人』せめて瞬間に忘れやう(石原政明)自畫像(伊藤耕人)秋夜(淺野紀美夫)
『聖杯』佗しさ(五十嵐二郎)大阪景物詩抄一(西口春雄)秋法(瀧下繁雄)アアネスト・ダウスン詩抄(鈴木美智子譯)
『現代』青空に(勝承夫)わが星(ブラウニング野口米次郎譯)
『雄辯』明治節(正富汪洋)
『婦人倶樂部』異國旅情(川路柳虹)
『婦人世界』昨日の薔薇(山田邦子)幼兒の足(柳原燁子)母の歌(茅野雅子)
『婦人の友』詩よりも美しき(河井醉茗)
『週刊朝日』秋の樹(千家元麿)
『令女界』鳳(西條八十)秋の食卓(生田春月)西湖(金子光晴)
『若草』銀座(陶山篤太郎)内氣な壺(米澤順子)縞鯛(大鹿卓)夏の夕べは薫る(友谷靜榮)
『大阪朝日新聞』昭和の日本(北原白秋)
『キング』明治節の歌(北原白秋・相馬御風・野口雨情)

童謠・民謠・小曲

『地上樂園』童謠二篇(小田俊夫)民謠二篇(大關五郎)
『民謠詩人』貽貝とり(西條八十譯)午砲がなつたとて(陶山篤太郎)笹鳴(藤田健次)黑猫の唄(松村又一)山便り(針谷章三)世渡り(中山みすゞ)今樣霧の雨(平木二六)七まがりの坂(西川林之助)有明お月さん(林野貞

夫)工場の汽笛(都築益世) 粉雪ちら〳〵(久保田宵二)尾花(酒井良夫)こうろぎ(佐々木綠亭) そくさいに(山口みさ子) 自由勞働者の唄(山岸曙光子) 紙屑(生田花世)新作二章(尾崎久彌)旅のお人(渡邊波光) 今日はあれから(大關五郎)キチキチ坊子(玉置光三)

『民謠』踊り子(時雨音羽)春ほけた(刈田仁)約束なんぞは(大關五郎)落穗拾ひ(渡邊波光)

『民謠詩壇』旅の民謠四章(野口雨情)泣きな泣きなよ(大關五郎)旅(藤田健次)友禪さらし(岩井信實)しべりや民謠(松村又一)

『愛謠』としより(大關五郎) 小夜曲(森竹夫) 晝の月(濱名東一郎)

『現代文藝』浮世極樂(大關五郎)時は秋(正富汪洋)

『童謠詩人』谿のかげ(平木二六) 秋冷(後藤檜根) 春(島田忠夫)霧(古村徹三)

『現代』秋かぜ(川路柳虹)

『婦人倶樂部』ひとり旅(野口雨情) 猿すべり(玉置光三)

『苦樂』時計(井上康文)娼館哀歌(金子光晴)

『コドモアサヒ』田ン甫ノ秋(川路柳虹) 木の葉(白鳥省吾)踏切(北原白秋)白い息(川路柳虹)飛行機(三木露風)

『コドモノクニ』傘のうち(北原白秋) かたみの鈴(濱田廣介)路のうへ(平木二六)

『子供の友』ツタノハ(河井醉茗)フミキリ(葛原滋)ゆうべみた夢(武井武雄)

『少女畫報』樹下の誓ひ(西條八十) 指の跡(加藤まさを)貝がらの夢(下田惟直)白いショール(井上康文)こほろぎ(古澤武夫)やさしき人(水谷まさる)十一月の便り(サトウハチロー)あこがれ(蕗谷虹兒)

『赤い鳥』秋の日、道ばた(北原白秋)

童話

『かげ』赤い鮨(大關五郎)

『コドモアサヒ』赤鯛とカモメ(藤田健次)

『コドモノクニ』父子の水もぐり(西條八十)ビール箱の本箱(サトウハチロー)

『週刊朝日』薔薇の花と熊(清水晖吉)

『時事新報』幻の未來(平木二六)

「女性」鴨と月(北原白秋)

評論・批評・紹介・研究

『近代風景』朝は呼ぶ(北原白秋)詩の起源(竹友藻風)

ブレイクの繪に就て(山宮允)自由詩の本道はどこにあるか(萩原朔太郎)藝術母胎論(伊福部隆輝)詩に於ける哲學的問題(外山卯三郎)詩集の序(河井醉茗)

『文章倶樂部』上代社會に於ける藝術(伊福部隆輝)

『詩神』詩書の秋(西谷勢之介)プロレタリヤ詩派の方向轉換(鈴木信治)現代ロシア詩人の印象(尾瀨敬止)過渡期の詩人と作品(福田正夫)獨斷的月評(辻本浩太郎)

事愈から見た月評(林靜夫)

『詩文學』眞詩復興(生田春月)詩的精神の顯揚を强調す(芳賀融)都會の兵士——重廣虎雄論 (松澤保和) 詩壇時評(松本淳三)九月號詩誌月評(大村主計)

『バリケード』時事詩の要求(小野十三郎)は如何にして時事問題に對するか(萩原恭次郎) 詩集「たんぽぽ」と坂本遼(草野心平)マルセル・マルチネに送つたジャン・ド・サンプリの手紙(尾崎喜八譯) 速力詩人(中島信)

『地上樂園』歡喜の自然詩人 (大槻憲三) 青雲莊雜記(中村恭二郎) 那須野北部の民謠(松本文雄) 詩壇時評(小島與三郎・松本文雄・島章夫)

『民謠詩人』唐人歌(藤田德太郎) 傀儡と民謠(南江二郎) 民謠の研究(外山卯三郎) 民謠への疑問點(福田正夫)

『詩洋』詩人の宗教 (タゴール宮本正清譯) 詩書大觀(前田鐵之助)

『炬火』詩集「青い空の梢に」評(村野四郎)「蘆荻集」を讀む(山崎泰雄)

『轟轟』日蝕のやうな男 (南江二郎) 寄生蟹でてゆけ(關慧源治)二詩人の覺書(安藤眞澄)

『新生』詩集「稚心に映る」を讀む(伴野憲)十月の詩より合評(伴野憲・堀場正夫・高木斐瑳雄・野々部逸二)

『花烟』詩における內在律の研究 (平享爾)

『文藝耽美』ジアン・コクトオ(佐藤朔)

『亞細亞詩人』陋室詩銘(安藤眞澄)九月の陽だまりにて(高祖保)

『富士山』消へて行く人間(伊福部隆輝)

『松江詩人』輓近詩壇の雜論(坂本精市)

『北方詩人』「北方の曲」に(阿部哲)北方の曲寸感(石川善助)聰明なる漫步者(野村俊夫)「北方の曲」斷片(秋

川光義）

『プロレタリア藝術』如何なる地點を進みつゝあるか（中野重治）

『民謠』古謠選集の用意（湯朝竹山人）

『民謠詩壇』生活と民謠（霜田史光）新民謠の樹立と綜合機關（島田芳文）新民謠の展開點（松山克己）民謠的な餘りに民謠的な（江口耕四郎）新民謠否決を駁す（廣瀨充）散文的民謠時評（塚本篤夫）民謠の生活觀（江崎小秋）

『てのひら』詩誌漫評（高祖保）「稚心に映る」同人評（阪本越郎・小西武・田畑善兵衞・高祖保・半井康次郎・西村和文・棚木一良・室木豐春）

『新進詩人』溺死を免れたスウインバーンを世話したモオパッサン（正富汪洋）獨逸詩人及び詩講話（山口泰一郎）

『詩歌時報』叙事詩と抒情詩（外山卯三郎）詩集・大道藝人の著者（南江二郎）孔雀姫その他（清水暉吉）八重子さんと郁子さん（中田信子）

『愛誦』近代佛蘭西詩講話（ルドヰツヒ・ルヰソーン西條八十譯）アルチュール・ランボオ傳（加藤憲治）詩とは何ぞや（ブラウン）ブレークを生める時代（西條八十）近代英詩研究（寺下辰夫）

『亞細亞詩脈』民謠に於ける詩的觀照の世界（田中初夫）「午前〇時の方向」筆者の勇敢（內野健兒）

『現代文藝』詩集「曠野の火」（中西悟堂）

『現代』歌聖としての明治天皇（北原白秋）

『雄辯』米次郎の人生一夕話（野口米次郎）

『報知新聞』帝展の美術工藝（佐藤春夫）永德山樂柿右衞門（野口米次郎）

『都新聞』「こゝはお國を何百里」の作者（相馬御風）北米土人の民謠（長沼重隆）文學の意味（福士幸次郎）書齊からの眺望（生田春月）

『朝日新聞』文藝的諸問題（中野秀人）

『時事新報』「丘に想ふ」を讀む（横山青娥）ダダイズムの喪身（高橋新吉）民謠の將來（三木露風）

『讀賣新聞』自由詩は散文か（百田宗治）

『新潮』室生犀星論（室生犀星）

『名古屋新聞』ブレークの詩と繪（幡谷正雄）

感想・隨筆・紀行・小品

『近代風景』午前十時（北原白秋）

『文章倶樂部』芭蕉の庭（生田春月）

『文藝公論』既成文壇の崩壞期に處す（福士幸次郎・生田春月・高村光太郎・福田正夫・萩原恭次郎・高橋新吉・岡本潤・伊福部隆輝・日夏耿之介・三好十郎・百田宗治・草野心平）

『詩神』最近の感想（百田宗治）日記の一節（故三富朽葉）僕の詩の評を讀んで思ふ（佐々木秀光）

『詩文學』晩秋の賦（遠地輝武）

『詩集』仕事（勝承夫）

『民謠詩人』僕の景物詩（井上康文）民謠について（矢代東村）七八年前の事など（米澤順子）民謠雜筆（中田信子）民謠私鈔（松村又一）

『炬火』北歐短信（川路柳虹）

『文藝春秋』芥川龍之介君のこと（島崎藤村）

『A Corner Shop』不思議な喫煙者其他（尾形龜之助）

『詩之家』肉體の火（佐藤惣之助）

『童謠詩人』童謠漫筆（島田忠夫）島田忠夫君に宛てゝ感想二つ三つ（都築益世）童謠一家言（仙波重利）

『現代』自然讃美（正富汪洋）明治大帝の御製に就て（北原白秋）

『週刊朝日』秋の感覺（金子光晴）今秋の傑作映畫（井上康文）

『時事新報』洞庭雜筆（室生犀星）光悅の山姥（野口米次郎）大和行（西谷勢之介）

『アサヒグラフ』日本人の洋服（野口米次郎）

『讀賣新聞』鳴門の屋島の秋（三木露風）スペイン文豪ピオ・バローハを訪ふ（笠井鎭夫）『粹の懷』の著者（湯朝竹山人）

『令女界』秋の一感想（野口米次郎）乳母の妹（室生犀星）

『若草』マリイヒの散歩（堀口大學）

『新潮』喫煙雜筆（室生犀星）ネクタイとステツキ（佐藤春夫）

小說・戲曲

『プロレタリア藝術』ドイツ國民黨員（ヘルミニア・シユーレン中野重治譯）

『牧人』つゆ空（古賀殘星）

『アサヒグラフ』よごれ女房（高群逸枝）

愛

正富汪洋

わが家の子猫に
與へようと鰹節取り
鉢に掛くる時
喜びの心示して
小さき頭を
わが手に鉢に
すりつけすりつけ
感謝してやまぬ可愛さ

わが隣家に住む
五歳の小兒
わが妻が避暑に
海岸に行くと聞きて
別れを愛しみ
遠くまであと追ひ來て
涙ぐみて居たる可愛さ
嗚呼、人は皆、木石で無い

可愛さは盗人も知る
我は德寡けれども
愛をもちて人に向はゞ
其の人の心の底の
愛情に泣く日もあらう。

かのクリストの脚に
よき香油を注ぎ

またその脚を洗ひ
おのれの髪をもちて
それを拭ふ程の
やさしみを持たば
キリストならぬ人とて
どうしてその人を捨てよう。

さうだ愛をうくるものは
人を愛するものだ
私は人を愛すること少きに
過ぎる程の愛を見出した
若き、老いたる人の間に
われを憎める人の間に。

（新進詩人）

薄暮

白鳥省吾

夕べの霧が紗のやうに曳いてる
深秋の、衰頽した、心の露はな、しみじみとした吐息
林のうへに、街並の屋根のうへに、崖の赤土に
からみつくうす甘い悲哀の面紗（ヴェール）

郊外電車を待つ人々は
寄るべなく口をつぐんで
舗道に佇み或は歩み退屈してゐる
この夕べ、地にしがみついて生きてる人間の
人間の眼は銅貨のやうだ

眼のまへのあらゆる風景
人間の所有の悲哀
所有せる者も所有せざる者も
その亂調のジクザクな地上の
うす寒い寂しさの心の秋よ。

正義へ
情熱へ
信仰へ
そして結局は虚無へ……。
胸を抱き胸を抱き
モナ・リザの微笑で見る心の秋よ。（地上樂園）

敦賀印象

勝承夫

港ははげしい海をいだいて
蒼茫と北海の夢をはらんでゐた
空には角笛形の月がかゝつて
夕暮の鳥が數十羽
黑い隋圓を描いてゐた

敦賀は烏の多い港だ
町には歪な神經がはびこり
あの日も何處かに死人があつた
思へば　いがらつぽい烏の聲よ
汽船の警笛　老ひたる潮風の音よ

すべて渺茫たる感情をたゝえ
あそこでは　九月の秋は　鐘のやうに
ながい餘韻をひいて暮れて行つた

突堤の端は飛沫の中で
小さな明滅燈臺を支えてゐた
もはや彼方の岬も夕靄に煙つて
海を圍む山々は黑ずんで見えた
山も暮れ　海も暮れ
いまはたゞ夕濤のはげしい飛沫が
港の眺望をひろげる中で
例の不吉な烏の群は
いつまでも〳〵黑い隋圓を描いてゐた。

（詩神）

斷章

相川俊孝

「詩」を
淋しい時の
友としやうとは思はない
飢えたつて
「詩」なんか
食ふものか！
なほさらのこと「詩」と
手をつなぎ
亂舞する程
狂つてゐない私である
さらば？

と訊くならば
鋭い牙にかけて
私は
「詩」を
嚙み碎かう！

■

「詩」を
天使が吹き鳴らす
ホルンを悅ぶ
人々よ——
君たちは
既に「天界の蕩兒」である——
「永遠」に
操られ
フエリーの如く
瓢々乎として
「宇宙」を
施回するものだ——
不吉な鞏よ
惠れたる「白痴」の群よ
ヘルンの
「焦燒」に燒き盡される
曉を思へ！

■

ある詩人は曰ふ——
美しきものゝみ
わが「詩の盞」には盛る——と
さらば
げにげに麗しきものは
何ぞ——と
われ　たからかに訊かむ。（ヴエンテーゴ）

內氣な壺

米澤順子

沈默は壺のやうに
二人の間に置かれます
あなたは若人
まづ
思ひきり逞ましく華かな
罌粟の花でも投げ入れて下さりさうなもの
さうしたら私は
何か
禾本科の雜草の
うす紫の穗を挿しませうよ
だのに內氣な壺は
いつまでも空しく
息づまるやうな雰圍氣を
吐き出してゐるばかりなのです。（若草）

一　歩

三石勝五郎

私の周圍は寒風に吹き廻はされる。
私は熱心に運命を說く——
めづらしく人だかりがして、頭も手も足も血に

燃える。
私の全身は火のやうだ。時間の經過も忘れて、
十一時過ぎの街上に、一つのあかりを守る夜
は、ほうと吐く息にも、白い寒さの結晶を見
る。ガタガタ慄へる程の寒中に、私の心は石
のやうだ。心はさつぱり風を引かぬ。
三寸をたたんで、踏み出す一歩にも、寒さを感
じた。
歸りかけたら、もう心の石はとんで了つた。
一歩にも、このをののき……
一足前の自分は、私でなかつたか。
靈の拔けた鳥のやうに、深夜の底から羽搏いて、
あてもなく冷たい影を小路に消した。

（現代文藝）

逆說

山崎泰雄

祝祭日には美麗な旗をひらひらさせたりして
われら人間は眞摯になつて現世を營んでゐるも
のだ。
そこで仔猿よ。汝は寒い檻の正當さを疑はない
に極つてゐる。

（炬火）

勞働を嚙む

角田竹夫

締切日が二十日を安心して

齒車のやうに
その日その日の勞働を嚙んでゐた。
（その嚙む暇さへないかも知れない）
が　私がわづかの金を握つた日は
締切日を一日すぎてゐた。
原稿　原稿　原稿
ベルトの上をすべる機械感情のやうに
ギリギリ私はいきりたつた。
しかし　私には時がない。
ただ　許された往き歸りの電車の中で
疲れた文字を原稿にさらすだけだ。
低く　低く　斜に走る屋根の小路で
私は〇〇よりも墮ちた犬であつた。
吠えることを知らない犬であつた。
「普選」の準備は私に痛みであつた。
煎りたてる夏が、微笑が
私を向日葵よりも過酷にさせ
陽をはじき調査板をはじく
調査の文字は腰辨
その數字から
インクのしたたりから
「私」が湧く
官衙を嘲笑する私が湧く
詩　詩　詩
しかしそれを書きつける

——私はあまりにつかれてゐる
だが書かねばならない。
しかも電車の中で
混み合ふ省線で郊外電車で。（詩文學）

長い澁滯のあとの輕い記憶

上田敏雄

その時に青い襟の女は花瓶と魚をとらへた
手摺にならぶ花瓶
手摺にならぶ魚

かの女は戀文をかいた。（薔薇・魔術・學說）

旅のお人

渡邊波光

夜夜に
夜寒むの秋となり
山の木の葉も色づいた、

木の葉の頃に
來る筈の
旅の人はどうしたろ、

やさしいからだであつたから
露
いつはりは

なかろのに、

どうやら
つひに待ちぼけを
くはさるるよな氣ばかする、

夜夜の夜寒むの
秋の夜を
どこの旅路にゐますやら。（民謠詩人）

仕事斷片

永見七郎

潮はいつ滿ちるのか
潮は深夜滿ちるのだ

ああ秋の靜夜
萬籟寂として
昔ながらの永遠に歸つた時
胸の中には永遠の潮が滿ちるのだ。（太陽花）

秋晴れの輝かしい朝

井上康文

秋晴れの輝かしい午前、
女の子供たちの嬉々とした話聲が、
私の家の前を通るのをきいて、
私は二階の椽に出て、
その一列の小學生たちを見下ろした、
そしてその列の中に思ひがけなく、
私は私の愛子（あいこ）を見つけだした。

黒い水兵服と、鍔廣の帽子と、
嬉しさうに笑ひながら私を見上げた顔を、
私はすつかり嬉しくなつて、
立派な小學生の愛子に手をあげた。

かつて私が小學生のとき、
先生に引率されて自分の家の前を通つた。
その時私の母親が、
つゝみきれない嬉しさを顔にうかべて
家の前に立つてゐるのを見て
私はすつかり得意な歩調で歩いた、
その私が、いまは、
一列の小學生徒の中に、
元氣な勇ましい自分の子供の行進を見出して
わけもなく喜んでゐた。

秋晴れの輝かしい午前、
私は爽快な光りの中に、
健やかに生長した愛子を見た、
しかも先生に引率されてゆく、
一列の小學生徒の中に見た、
私は嬉しかつた、
胸いつぱいの嬉しさで、
私は部屋の中を愉快な歩調で歩きまはつた。

（詩集）

冬の風景

福永渙

彼は怠惰者で酒好きの詩人であつた。いつも

貧しく、着のみ着のまゝで、戀人もなかつた。
その怠惰者の彼が、その日は珍らしく朝早く床から飛び起きた——玻璃窓の外に素晴らしい冬の風景を見たからであつた。彼は窓に近づいて戸外の光景を眺めた。

地上を蔽ふた雪は銀の楯のやうに堅く冷たく凍てつき、その上を強い風が、いかにも寒むさうに吹いてゐる。が、空は青く晴れ、高く高く地上から遠のいて、淡く星の光を浮べてゐるかに澄み透り、森の影からさすあたゝかな太陽の斜光線が、街道の樫の並木にかゞやいてゐる。そして、大きな森は幽嚴なパイプ・オルガンをかなで、高い碧玉の空には、かすかな合唱隊の甘い詠嘆的な合唱の餘韻がひゞいてゐた。

彼はこの光景を見て、久しぶりの詩作の衝動に驅られた。と、そこへ、詩を作る彼の友人がたづねて來て、彼の瞑想をさまたげた。その友人も貧しかつた。羽織も着ず、素足で、ふるへてゐる友人の姿を見ると、彼は憂鬱になつた。

「どうだ、今日は素晴らしい景色ぢやないか。」

「いや、僕は昨日から何にも喰べないんだ。今日は君に金を借りに來たんだ。」

友人は答へた。そこで、彼は財布の底にたつた一つ殘つてゐる銀貨を投げだした。友人は彼の手を握つて、歸つて行つた。

十分間經つと、第二の來客があつた。その男も詩人で、厚いラクダの外套に身を包んでやつて來た。

「どうだ。今日は素晴らしい景色ぢやないか。」

詩人は同じやうに始めた。

「いや、君、僕はとう〳〵彼女に切りだしたよ。何もかもうち明けたんだよ。」

「それで、彼女は何と云つたね。」

「返事をしないんだよ。今日でもう三日になるが、默つてゐるんだ。」

二人の間に長い沈默がつゞいた。友人が歸つて行く時、彼は云つた——

「君、君は家へ歸つて、詩を作りたまへ。」

貧しい詩人は、ます〳〵憂鬱になつた。彼は戸外の驚嘆すべき冬景色を忘れて、物思ひに耽つた。

それから間もなく、第三の來客があつた。名刺を見ると、彼は一寸まごついた。それは十年も會はない彼の舊友であつた。彼はみすぼらしい部屋の中を見廻はしたり、みじめな寢衣姿を眺めてきまりがわるくなつた。その友達が西伯利亞に行つて、百萬長者になつたことを聞いてゐたからであつた。

友人は十年の間にすつかり年を老つてしまつてゐた。彼は外套ともつかず、フロックコートともつかぬ長い上衣を着てゐた。貧しい詩人はウイスキーの罎を持ちだして、友人をもてなした。直ぐに二人は舊交をあたためることが出來た。詩人は云つた——

「君は西伯利亞で大金持になつたつていふぢやないか。」

「いや。一時は大金を儲けたよ。五十萬圓から儲けた。その金で僕はしたい法題のことをした。澤山の女にも接したし、贅澤もした。しかし、その金はみんな失くしてしまつた。女もみんな

棄てたり、棄てられたりしてしまつた。今では僕の持つてゐる物と云つては、この服一着になつてしまつたよ。」

「その服は何だね。非常に風變りな洋服だと思つて、さつきから見てゐるんだが——」

「これはフロックコートだよ。毛皮を裏につけたフロックコートだよ。それで、こんなにダブ〳〵してゐるんだ。」

「フロックコート！　そいつはいゝ。綿入れのフロックコート！　そいつはいゝ服だ。素敵な服だ！」

詩人は心からうれしさうに云つて、朗らかに笑つた。そして、急に元氣づいて、友達の手を堅く握り、戸外をさして云つた——

「君、あれを見たまへ。今日は素晴らしい冬景色ぢやないか。」

そこで、二人はウイスキーをなめながら、窓の外を眺めた。そこには、詩人が三十分前に見たと同じ、驚嘆すべき冬の風景があつた。雪はやはり銀の楯のやうに堅く冷たく凍てつき、強い風が寒むさうに吹いてゐた。高い空は青く晴れ、あたゝかな日光が樫の並樹を搖り、森は嚴かに、青空は甘美に、致會音樂（チャーチ・ミュジック）をかなでてゐた。

（近代風景）

十二月

詩・散文詩

『文藝春秋』幸福(百田宗治)月光・女(多田不二)
『生活者』笹の葉(高橋元吉)
『文章倶樂部』貧しき信徒・遺稿(八木重吉)夕雲(村井武生)馬場にて(黄瀛)雜草(佐伯郁郎)墓地・遺稿(山本春次郎)父(宮木喜久雄)
『文藝公論』ロマンチストの言葉(林芙美子)颱風(碧靜江)郊外の秋(友谷靜榮)追憶(大井さち子)歸燕(森三千代)秋の夢(米澤順子)
『近代風景』冬眠(北原白秋)十二月悲歌(大木篤夫)アポリネエル三章(堀口大學)蛇行する蝶(大手拓次)木曾にて(木水彌太郎)三月の山(岡崎清一郎)卽興(竹内隆二)神々の消息(近藤東)無題(平木二六)夜綱の後(藪田義雄)十月の女(安藤一郎)暗い城のやうな家(三好達治)夕(府川惠造)
『詩神』猪狩滿直に送る手紙(草野心平)愛するひとみ(木村てるよ)五月の心(小栗又一)青空を忘れた人間(松村又一)踩み潰されたプロレタリアの瞳(田邊若男)兩のオリエンタル(サトウ・ハチロー)鞭(井上康文)洲と白(福田正夫)洗濯(野口米次郎)藍色の雰圍氣(平木二六)蜜柑山(英美子)秋の詩五篇(千家元麿)水の上(廣瀬操吉)盲の愛奴の老人に與ふ(金井新作)日曜日(手塚武)窓から(黄瀛)萎びた筒(北川冬彦)シャルル・ルイ・フイリップ(小方又星)墓參(西谷勢之介)災ひの日(佐々木秀光)藐姑射鷸鶴篇(高橋新二)ソキエート・ロシヤプロレタリヤ詩人の詩(ドロゴイチエンコ・マカロフ、サンニコフ、黑田辰男譯)
『詩集』枝に眠る者(中西悟堂)諸君(陶山篤太郎)續・悲憤獨白(南江二郎)音樂會(井上康文)母性(尾崎喜八)夜(金子光晴)風景(ヴイルドラック尾崎喜八譯)朝2題(窪野親義)分數解題(國吉曉鳥)空に映る風景(木村直祐)水車(東白水)俺は自分を嘲るよ(山河涉)小さき抒情詩篇(橋本正一)月が見ている(岡田淑子)鷗の歌(奈加敬三)チョコレート(池永治雄)秋の詩(横堀眞太郎)歸へりゆく小鳥の群(八百板芳夫)淺草の心臟になりたいです(繩田林藏)
『炬火』空家(福原清)詩二篇(倉橋彌一)街角(川路誠子)山(近藤益雄)星を數へる(一瀨直行)酒僧に寄す(保坂銀藏)ニヒルへの旅(下條綾子)樑原(太田廣)

『民謠詩人』雪の消えた風景(大村正次)
『愛誦』ランボオ二篇(西條八十)高原の唱(前田鐵之助)秋思(生田春月)蒼空を泳ぐ(横山青娥)夜鶯(加藤憲治)仔羊(寺下辰夫)
『亞』眞冬の書(安西冬彦)園中(瀧口武士)夜(三好達治)絶望(北川冬彦)アラン酒(尾形龜之助)
『太陽花』若き木と巨木(武者小路實篤)秋の庭園(千家元麿)海港小景(廣瀨操吉)囚人の散歩(永見七郎)斷片(佐々木秀光)怒れきれなかつた(西谷勢之介)曉の鷄(新良孝平)やもりの詩(森脇達夫)
『森林』晝顔の花(杉江重英)惡夢(佐藤清)友よ(大黑貞勝)
『靈』煤けた暦(松村又一)疲勞(後藤八重子)鋏もちつつ(林野貞夫)晩餐の時に(大關五郎)
『名古屋詩人』鷄飼ひの歌(淺野紀美夫)松風(武田實)言葉(國立富美雄)路上風景詩(石原政明)
『白山詩人』暮天(河本正義)信條(白井一二)或る女像(山本和夫)垣根路(澤木隆子)
『薔薇・藝術・學說』POEMES(上田敏雄)海たち(山田一彦)夢の肖像(上田保)マダム・プランシュ(富士原清一)魔女の灰(亞坂健吉)
『かげ』白い港の憂鬱(田中啓介)採集(白井一二)花と寢臺(麻生恒太郎)
『新生』山上の憂鬱(伴野憲)思ひ出(高木斐瑳雄)落葉による(鶏飼選吉)栗の實(堀場正夫)痛み堪えぬ時に(永瀨清子)
『主觀』私の田園詩(福田正夫)泥蛙(加川文一)奇蹟(木村てるよ)
『南方人』歸鄕(神戸雄一)日本の倆友に(野村吉哉)詩三篇(松田重遠)
『南方詩人』ハインリツヒ・チルレ(手塚武)火(神谷暢)絲滿人(小野整)ラリルレロ音宣言表(金城龜千代)海と牝牛との構圖(安藤一郎)
『感觸』石工・(杉本ふみを)
『新興詩人』檻(西條八十)怒れる海(勝田香月)秋風よ。君に贈らん一章(高山武夫)秋夜狂想(林和雄)
『文藝街道』山百合の人(二宮七太郎)げどう車(新納正雄)
『祭日』白無花果(初山光)乙女たちに(山本初彦)北風寒月(花守朗)
『裸像詩人』北風と小鳥(井上康文)冬に入る生活(多賀圭三郎)秋(麥屋南莊)

『窓』自らなる道（遠藤茂雄）屋上庭園と生活（會田毅）
『TENKEI』水の面（小野仲二）命（北村榮太郎）初秋（鳥羽茂）
『寄樹』惜春編（竹内勝太郎）詩經（南江二郎）ふらんねるの傘（相澤等）轉居（天野隆一）苦悩の釣針（左近司）
『碧桃』詩二篇（關谷祐規）秋風消息（平正夫）島（井上廣雄）Nocturne（黃瀛）
『龍騎兵』生命の鼓動（永井克己）
『亞細亞詩人』秋を見た（牛井康次郎）船中にて（室木豐春）豫感（小田卷次郎）秋の風鈴（高祖保）
『大踏』冬に入る風景（麥屋南莊）
『表現詩人』漁夫生活の秋（岡田刀水士）薄暮の檻（生田花世）星と語る（胡麻政和）壁（岡田光一郎）工場地帶（竹内越村）
『牧人』時雨（中島哀浪）厄年埋葬（古賀殘星）秋の短唱（國井淳一）演習（川副潤次郎）
『三角』病める少年（双葉俊雄）幸福は畠から（水村勝之助）ならひの嫉妬（廣瀨充）
『曲馬詩人』今宵は JAZZ（百瀨清吉）俺は强いのだよ（北村榮太郎）魂はみんな慄へてゐる（湯川宗二）痛快なうた（日野春助）
『河』落葉（宮崎丈二）詩二章（廣田末松）ロダンのアトリエ（更科源藏）晩秋一景（小栗孝則）
『北國詩人』さかまく流のその中から（田所篤次郎）流離の悲しみ（松田喜一）足の裏の詩（小林茂一郎）
『玫瑰』小女の夢（生田春月）勝利の歌（永原實）哀秋（小牧葉二郎）
『A Corner Shop』消衰（大鹿卓）待つ（サトウハチロー）戲網（伊藤信吉）へちまに寄せる（水島滿久男）秋（多賀圭三郎）森の中・女・夏草（尾形龜之助）月夜の秋（井田貞衛）雨と甲板（渡邊哺介）落葉（森竹夫）
『現代』冬日（正富汪洋）
『雄辯』日本の秋（サトウ・ハチロー）
『プロレタリヤ藝術』犧牲者の身うち（森山隆）
『令女界』クリスマス（萩原朔太郎）雪の日の鳩（三木露風）藪柑子（生田春月）八丈島詩篇（渡邊渡）俗謠（野口米次郎）
『若草』旗（萩原恭次郎）
『地上樂園』安息（菊池重三郎）林の中に（千石喜久）山茶花（月原橙一郎）農家（胡麻政和）裾野をめぐりて（福田正夫）田舍の停車場（國井淳一）羽搏く苦痛（鈴木信治）

童謠・民謠・小曲

『詩神』朝の停車場の（大關五郎）
『民謠詩人』荷物片手に（野口雨情）新作三章（尾崎久彌）午の日（サトウ・ハチロー）乳母ぐるま（都築益世）ぽーと鳴るぽー（針谷章三）お月さん（松村又一）
『愛鶴』淺草町（塚本篤夫）夜鳴の鷄（柴山晴美）こほろぎ（青木茂若）指の傷（間司つれみ）
『童謠詩人』たれかさんの散歩（平本二六）機織蟲（渡邊波光）月夜（都築益世）
『民謠』けさの別れ（渡邊波光）夜船（加藤すゞ子）
『民謠列車』蛙（生田花世）風（渡邊波光）潮來の灯（大貫芳江）祭すぎ（大鹿照雄）
『窓』SUMMER（西條次郎）
『かなりや』みそか（島田芳文）口笛（塚本篤夫）案山子（小田俊夫）
『現代』儚なき戀（渡邊波光）雪の夜（井上康文）
『婦人倶樂部』クリスマス（佐藤惣之助）山越え山越え（野口雨情）
『コドモアサヒ』橇をひく馬（三木露風）カラ風お山の鳥（藤田健次）クルクル巾着（西條八十）コンコロコロリン（北原白秋）おいなりさま（葛原しげる）
『子供の友』時計屋の店（河井酔茗）冬ごもり（武井武雄）
『少女畫報』贈物（加藤まさを）花占ひ（水谷まさる）病める薔薇（下田惟直）冬の吐息（サトウ・ハチロー）雪の降る夜（花岡謙二）
『赤い鳥』知らぬふりして、寒い林（北原白秋）
『地上樂園』林の秋（小田俊夫）
靜岡民謠　チヤツキリ節（十七篇、狐音頭、新駿河節二十六篇（北原白秋）

童　話

『コドモアサヒ』エプロンのシミ（水谷まさる）
『コドモノクニ』オスモとコスモ（濱田廣介）れとぼけて（葛原しげる）
『週刊朝日』ふくろの卵を貫つた子供の話（廣瀨操吉）

評論・批評・紹介・研究

『文章倶樂部』昭和二年の詩壇(百田宗治)四國文壇の狀勢(林芙美子)九州地方の文藝界(古賀殘星)音樂と詩の關係(萩原恭次郎)

『近代風景』詩の起源(竹友藻風)

『文藝公論』詩壇の一九二七年度(三好十郎)

『詩神』詩庫を滿す(井上康文) 昭和二年詩壇の新人(古賀殘星)

『炬火』詩書月評(伴野英夫、一瀨直行、倉橋彌一)

『民謠詩人』民謠は深し(藤澤衛彦)民謠の研究(外山卯三郎)國定忠治と民謠(針谷章三)佛典に現はれたる日本的民謠味(滿久秀麿)童謠片語(濱田廣介)武人のつくつた踊りと唄(山本純三)富山のさんさい節(中山輝)本年詩壇思ひ出すまま(中西悟堂)一九二七年・詩壇點綴(石原亮)

『地上樂園』南江二郎の人と藝術(外山卯三郎)門脇英鎭の人と藝術(中村恭二郎)昭和二年の詩壇(古賀殘星)

『農土詩集』の俳句的小感(松村又一)『愛の幻想』の作者へ(月原橙一郎)『冬の仕度』を讀む(櫻庭芳露)蒼雅堂藁筆(鈴木信治)詩と思想方向(千石喜久)昭和二年詩壇詩人詩集に就いて(醉茗、幸次郎、惣之助、介春、正夫 宗治、汪洋、不二、信一、又一、五郎、鐵之助、泰雄、善助、順子、信子、卓、二一、重英、又星)

『愛誦』近代佛蘭西詩講話(西條八十) 近代英詩研究(寺下辰夫)

『表現詩人』明日の詩壇に就て(小島與三郎)詩壇一瞥(島野一衞)

『報知新聞』上代歌謠藝術(伊福部隆輝)

『都新聞』室生氏の「庭をつくる人」の文章(百田宗治)尾崎喜八君の「曠野の火」(正富汪洋)故郷圖繪集と偶成詩集(佐藤惣之助)

『時事新報』詩壇時感(佐藤惣之助)

『週刊朝日』「落合直文集」に就て(與謝野寛)

『プロレタリヤ藝術』ロシヤ革命十周年記念プロレタリヤ詩集について(中野重治)ドイツ革命について(トルラー・瀨木達次)

『讀賣新聞』詩集『竹友藻風』を讀む(寺門照彦)高畠素之氏を駁す(福士幸次郎)ム氏は共和主義か(福士幸次郎)

『若草』昭和二年女流文藝概記(生田花世)一九二七年の詩壇(赤松月船)

感想・隨筆・紀行・小品

『改造』母(横瀨夜雨)

『文章倶樂部』事實小說の事など(佐藤春夫)雁わたる(生田春月)

『近代風景』午前十時(北原白秋)

『詩神』飲水居心持(新島榮治)上野壯夫君へ(小野十三郎)

『詩集』ホレース・トラウベルの追憶(福田正夫)トラウベルに就いて(長沼重隆)詩集創刊記念の會(井上康文)

『民謠詩人』一九二七年詩壇のメランコリア(福田正夫)新作民謠に就て(百田宗治)本年の民謠詩壇私觀(松村又一)几邊の詩書(南江二郎)民謠雜感(玉置光三)

『亞』亞の回想(大學・順子・寛・せい子・碎花・泰雄・利夫・千冬・篤夫・惣之助・光太郎・正・醉茗・行夫・善助・斐瑳雄・心平・格・戲二・清・郁・省吾・信吉・月船・冬彦・嘉香・健兒・弘・瑞枝・健・圭三郎・竹夫・茂・ハチロー・五郎・二六・郁哉・充・笛麿・光次郎・英一・正夫・承夫・信次・鐵之助・花世・基次郎・敏雄・不二・宗治・悟堂・鶴松・汪洋・信一・耕一郎・隆三・鋲策・康文・恭二郎)厥後樸記(冬衞)

FRAGMENT(北川冬彦)佛蘭西の士官は街角をまがつて行つた(尾形龜之助)秋夜弄筆(三好達治)

『童謠詩人』渡邊增之孝(島田忠夫)

『南方詩人』「たんぽぽ」出版前後(草野心平)

『民謠』昭和二年を送る(渡邊波光)

『河』ゲーテの言葉(小栗孝則)

『A Corner Shop』彼女(福富菁兒)A Corner Shop(尾形龜之助)カフエーアホー(森竹夫)

『現代』敏感性(野口米次郎)秋の佗人(薄田泣菫)

『キング』青年と共に往く(野口米次郎)

『報知新聞』蟲・鳥漫筆(中西悟堂)

『時事新報』文藝家協會の詩人加入に就いて(室生犀星)

『週刊朝日』伊藤寛一のことども(赤松月船)

『アサヒ・グラフ』裾野の感情風景(福田正夫)俳諧師走(西谷勢之介)顔(松本淳三)

『讀賣新聞』上海の人(井東憲)昭和二年を回顧して(犀星、朔太郎、幸次郎、敬止等)

『地上樂園』富士山麓の一日(白鳥省吾)

『新潮』神無月(室生犀星)

小說・戲曲

『文章倶樂部』或夫婦(室生犀星)赤の他人(福富菁兒)
『詩神』話(尾形龜之助)囁いた太陽・詩劇(三好十郎)
『プロレタリヤ藝術』ドイツ國民黨員(ルミニア ミューレン中野重次)
『令女界』橇の鈴の音(福永渙)
『新潮』死と彼女等(室生犀星)

冬眠

北原白秋

ねむれよ、やすらかに、
冬のあひだ、
まどろめよ、和み靈の
香にとろみて。

ねむれよ、おだやかに、
蛇よ、かはづ、
まどろめよ、おのが肉、
食み足らひて。

ねむれよ、このもしく、
夢も欲らず、
まどろめよ、土の室
塗りとざして。

ねむれよ、息の緒の
あるかなしに、
まどろめよ、ゆるぎなく
醉ひほうけて。

ねむれよ、やすらかに、
日ももとめず、
まどろめよ、こごり凍む
地をいとひて。

ねむれよ、神ごころ、

冬のあひだ、
まどろめよ、ほろと、ただ、
ああ、とろみて。

（近代風景）

荷物片手に

野口雨情

こんな戀しい
　この土地すてて
どこへ行くだろ
　あの人は
どこへ行くのか
　わしや知らないが
荷物片手に

傘さげて
わしも行こかな
　この土地すてて
荷物片手に
　あの人と

（民謡詩人）

月光・女

多田不二

家中こほろぎの聲でいつぱいだ
玄關も勝手も赤ん坊の寢てゐる蚊帳の上も
いぎたなく轉寢してる女の枕許でも
きろろ　きろろ　と
まるで澄んだこほろぎの聲の洪水だ

二階の窓をあけて
わたしは青白くけぶるひかりのなかへ
やせた片手をつきだした
さんさんと降りそそぐ月のしづくの下に
指はほそりにほそつて　骨だけになつた

わたしと並んで　幾本も幾本も
細い細い　きやしやなX光線の手が突き出てゐる
前の家の癆咳の娘が
その患者達のなかに
ひるがほのやうな白い病みつかれた顔で
霧と降りそそぐ蒼い光の絲をあびながら
かなしげに　ぢつと遠方を見戍つてゐる

古い鳩時計が　わたしの書齋から
ポポー　ポポー　ポポー　と午前三時をつげた
記憶よ、齒車にからみついた枯れしだよ、
別れた許嫁と　きれいな肺病娘と　やきもちや
　きの女と
入り亂れて胸のなかで喧嘩だ
階下ではこほろぎのオーケストラ
屋根の上はお月さんのサーチライト

（むすめは去年死にました）

（文藝春秋）

諸君

陶山篤太郎

現實は俺の血の對照だ
吾々の人生はいつたのしかつたか
時代の奔流から——洪水から
はつきりしてくる無產者の聲が
俺の背中にひびいてくる
戰ひは公示されてゐる
諸君——俺の試練は迫つてゐる、

明日のパンは
いじらしい子供の願望は
老ひたる母の憩ひはいつ
亡妻の墓石はいつ

俺はつんぼのおどおどした母の姿を見てる
俺にしがみついてくる愛兒を見る

だが——昨日の如く今日もあらねばならぬか
國家の血稅者が、
一兵卒である俺が
〇〇の義務兵になぜなれぬのか
諸君——首をたれて俺は沈痛を嚙みしめる。

（詩集）

十二月悲歌

大木篤夫

——續現世抄——

あらしは昴宿の鎖を吹きちぎつた
わなゝく十二月の枝々のうへに
流れて散るぞ　青い炎！

鴉はさけぶ
影のゆがんだ街路に
枯葉の子らはざわめき出した
ひきつれて電線もうなる痛い豫感に
大氣も硫黃の包ひにむせる

雷だ
いなづまだ
氷雨だ
雹だ

兄弟とツ走らう
一つ外套にくるまつて
街燈は一齊にふッ消えた

屋根が　塔が　時計がくづれる
悲しい響をたて、て
もろもろの心臟は硝子のやうに毀れる

兄弟瞬く間に滅びてしまふた
美しい夜景が

眞暗闇だ　百鬼夜行だ
血にかわいて
動物園の豹が　檻をやぶるかもしれぬ
人間の潮騷は
かざされた松明の下に暗い

兄弟　大都は暗黑の顏をして
沒落の淵をのぞいてゐる

街が　赤錆びた廢船のやうになるだらう
そこにうつろな海が鳴るだらう
盲目の魚ばかり
さびしく冷血の相貌をひらめかすだらう

ああ　また雷だ
大空の　山々の　爆ける音だ
白紫色のいなづま明りに
見よ、するどい雹と隕石
礫のやうに落ちてきた小鳥の群の
累々たる骸
きえてゆく羽搏き

兄弟　とにかく歌は絶えたのだ

急がねばならぬぞ、いよいよ
われら白き手の貧者は
……何處？
おそらく世紀の棺車が待つてゐるところへ

兄弟　行かう
氷が花咲く十二月の棘の蔭に
行つて　しづかな　化石の眠りを續けよう
……何故？
地上の冬が　ほがらかに明けるのを待つために

（近代風景）

斷片

佐々木秀光

組んだ足の左の指先が
肉色の靴下の中で動いてゐる。
呼吸するたびに
薄い衣が靜かな海のやうに
規則よく繰返し波うつてゐる。
左の手は伏せた小さい本の上に
右の手は肱ついて
親指で頰の肉をおしてゐる。
他の指にはさまれて
他の指にはさまれて
煙草が耳のあたりから
細あをい煙りを一筋にのぼらせてゐる。
も一つうすい白い煙りは
唇を出たものであらう。
鼻から洩れる幽かな煙りが

薄い髭をなぶり
紅と白粉で小さめにつくられた唇を流れる。
パッチリと開いて瞳は何を見つめてゐる。
長い睫毛を合せて
瞼が黑い曲線を描く時
何を考へてゐるだらう。
丹念なお化粧のおかげで
若々しくは見えはするが
額や眼尻には皺のあとがある。
夫人は——足を組みかへて
煙草を口へもつていつた。
白い前齒が金の吸口をおさへた。（太陽花）

墓參

西谷勢之介

私は茫然と佇んでゐた
秋風の靜かに流るる中に——
悲しくはなかつた
何思ふこともなかつた、
八年ぶりにまみえた
父母の朽ちた塔婆にささやきながら
閼伽桶の水をねんごろにそそいでゐた。（詩神）

落葉

宮崎丈二

夜道を歸つて來ながら
足元でガサガサ云ふ落葉の音

その音を聞くのが
なんとなく心うれしい

月明りでうづ高く積つてゐるところを見つけて
は
わざとその上を踏んで行く

一日々々と葉を落して
靜かな姿に歸つて行く木達よ

おまへ達のことを思ふと
私の心もたのしく安らかになる。（河）

厄年埋葬

古賀殘星

——呪はれし二十五の春——

初冬十一月の風は
護國寺の青錆びた屋根を越えて、
僕の獨居の窓をゆすぶる、
落葉は今日も軒端を埋めた。

過ぎ行く歳——
回想は僕の心を、
月夜の青笹のやうにふるはせて、
憂鬱はひろごる蒼白の煙である。

梅の蕾がふくらんで、
宵に積つた淡雪がとけてゆく朝、
病みほゝけた母の眼は永遠に冷たくとざされた
雲雀は青空に沈み、
老ひこんだ春は新綠の季節へいそぐ頃
おゝなんといふ恐しい運命の悲劇であつたか！
父の骸は凄じい爆音に傷しくうちくだかれた。

人生廿五の厄年、
呪はれたこの歳よ！
霧ふかい初冬の夜、
僕はとほくで、
菩提寺の卒徒婆にふりかゝる落葉を聽く。

附記　私の母は本年二月二十一日に病死し、續いて四月十三日父は全く不慮の死を遂げた。この年は私にとつて永遠に忘れられない厄年であつた。

街角

川路誠子

（牧人）

風が街角で飛び上る
焦立つ呼笛が吹きちぎれて
自轉車が枯葉に成つて轉がる
ガソリンの匂ひが髪の毛に搦んで
刻々に腦髄が濁される
此處では起重機が人間を憂鬱にするのだ
秋は片隅の街路樹に立ち竦むで
昇天しさうに空を見つめて居る
太陽は風のひまから溫い手で
背を撫て慰めては吳れるが
大建築の壓力に私の息は苦しい
プラタヌよ　誰れも見向かない街の秋を
私と共に拾はう
此處で必要のは交通整理器と
器械人形だけではない
稀に通る人間に吸入する爲めに
蹴散らされた秋を拾つて置かうよ。（炬火）

鷗の歌

奈加敬三

かもめ、
かもめ、
喜びの聲があがる、
夏の日の　遠泳の　疲れ果てた眞午どき、

目指す沖の小島の洲の上に
群れ出迎へる小人の群。

かもめ、
かもめ、
かもめは逃げる、
洲の上に這ひ上り　あじかの樣にねそべる子、
なほも元氣にかもめを追へば
かもめは一尺二尺飛びながら戯れにげる。

かもめ、
かもめ、
かもめは一齊に飛び上つた、
わたしらの頭の上　黃金の太陽　綠の島かげ
かもめ　かもめ

どうして遊んでくれないのだ。

かもめ、
かもめ、
ふたゝびわたしらが海に入り
島をはなれると、
また洲に下りてその尖端にむれ
ぢつと見送る小人の群。

かもめ、
かもめ、
いま冬の日に、
山の家の　緣側の夕ぐれの籐椅子
お前の無言の哀しい愛が
わたしに寂しくよみがへる。（詩集）

詩書一覽

一月

柴山晴美詩集
『花と金鑛』（森林社）
東野純詩集
『商業地帶』（泰文堂）
伊藤整詩集
『雪明りの路』（椎之木社）
安藤眞澄詩集
『大道藝人』（椎之木社）
英美子詩集
『春の顏』（平凡社）
間司つねみ抒情詩集
『君忘れねば』（交蘭社）
野口雨情・岡本歸一共作
『童謠かるた』（普及社）
郡山弘史詩集
『歪める月』（L・S・M社）
石井白村譯詩集
『英詩集』（進省堂）
加藤四朗詩集
『月に向つて』（さめらう書房）
井上好澄詩集
『秋の花束』（情熱時代社）
上田秋夫詩集
『自存』（啓明社）
佐藤惣之助隨筆集
『酒はまだある』（春秋社）
與謝野寛他二氏篇
『日本古典全集』（同刊行會）

二月

堀口大學譯詩集
『ヴエルレエヌ詩抄』（第一書房）
日夏耿之介詩集
『定本詩集第一卷轉身之頌』（第一書房）
幡谷正雄譯ロングフエロー
『イヴアンヂエリン』（新潮社）
水谷まさる譯
『新譯トルストイ童話集』（富山房）
淺原六朗詩集
『青ぞらのとり』（フタバ書房）
野口米次郎感想集
『舞臺の人々』（第一書房）
梶川櫻村童謠集
『夢の母さん』（横濱・三光堂）
村山槐多遺著
『槐多の歌へる』（アルス）
田尻征夫詩集
『赤い窓から』（さめらう書房）
藤淵忠一編
『民謠自選集』（熊本・民謠研究會）
高島宇朗詩集
『せせらぎ集』（福永書店）
八十島稔詩集
『紅い羅針盤』（ミスマル社）

三月

森三千代詩集
『龍女の眸』（紅玉堂）
塚本篤夫詩集
『靜かなる風景』（卅紀詩人社）
大西鵜之介詩集
『亞鉛風景』（大阪・高踏詩園）

三野混沌詩集
『百姓』（福島・土社）
中西悟堂編述
『評釋詩讀本』（日本篇）（紅玉堂）
百田宗治詩集
『何もない庭』（椎之木社）
百田宗治論集
『詩の鑑賞』（厚生閣）
百田宗治編著
『小曲新辭典』（資文堂）
北原白秋編
『日本民謠作家集』（大日本雄辯會）
井東憲詩集
『井東憲詩集』（驫人社）
須見岩礁詩集
『路傍に出た小鳥』（神戸福井書店）
南光二郎小曲集
『緣しの琴線』（交蘭社）
河本正義詩集
『魔法花火』（耿美社）
北原白秋感想集
『藝術の圓光』（アルス）
竹友藻風論文集
『書物と人』（斯文書院）
藤森秀夫著
『Dauthendeys Grzahluugen』（南江堂）

四月

室生犀星詩集
『故郷圖繪集』（椎之木社）
辰巳・玉崎共編
『大和民謠集』（紅玉堂）

トムラ・テイジ編
『世界名詩集』（米澤あづま詩社）
小松清譯フランソアコベエ
『悲哀の娘』（白水社）
坂本哲郎茂子合著
『合唱』（日本詩壇社）
伊野憲詩集
『街の犬』（名古屋・新生詩人會）
山崎春郎詩集
『惱みの幻想』（秀芳閣）
秋元蘆風譯
『註釋シルレル詩選』（南江堂）
北澤金藏詩集
『人生初夏』（東京堂）
秋元蘆風譯述
『ゲーテ以後の獨逸抒情詩』（南江堂）
瀨川重禮詩集
『煙れる心臟』（森林社）
大黑貞勝散文詩集
『午後三時』（森林社）
松川一郎編
『山の民謠・海の民謠』（博文館）
下田惟直編述
『愛誦詩物語』（金星堂）
尾崎喜八譯ロマンロラン
『花の復活祭』（叢文閣）
片山敏彥譯ロマンロラン
『時は來らん』（叢文閣）

五月

薄田泣菫隨筆集
『猫の微笑』（創元社）

水谷まさる小曲集
『薄れゆく月』（大日本雄辯會）
武田正夫詩集
『放　浪』（春秋時報社）
島田芳文詩集
『農　土　思　慕』（抒情詩社）
茅野蕭々譯
『リルケ詩抄』（第一書房）
木村直祐詩集
『神・人・けもの』（紅　玉　堂）
後藤大治編
『臺　灣　詩　集』（臺灣其社）
大澤重夫詩集
『燃ゆる村落』（大　地　舍）
松村ろしふ詩集
『砂　丘　の　夢』（山陰詩人）

大貫芳江編
『代表的名詩選集』（泰　文　館）
野口米次郎詩集
『第三表象抒情詩』（第一書房）
勝田香月感想集
『逆　境　征　服』（大　明　堂）
高村掬太郎抒情詩集
『若き日の墓』（東　京　閣）
井上康文編著
『詩の作り方』（素　人　社）
金子光晴、森三千代共著詩集
『鱶　沈　む』（有　明　社）
篠原好藏詩集
『赤い目の薔薇』（ピレネー社）
南江二郎詩集
『南　枝　の　花』（新　潮　社）

飯尾謙藏編詩集
『緣　青』（交　蘭　社）

六　月

神戸雄一詩集
『岬・一　點　の　僕』（作　品　社）
外山卯三郎譯ジアンヌアーラン
『ジアニンの歌章』（東京詩學協會）
竹下彦一詩集
『朝鮮愛慕詩集』（日本大學詩人會）
橋本正一詩集
『迷　路』（新進詩人社）
泉芳朗詩集
『光は濡れてゐる』（大　地　舍）
室木豐春詩集
『稚心に映る』（金澤詩話會）

白鳥省吾編
『昭和詩選』（新　潮　社）

七　月

戸塚八重子詩集
『横　濱　娘』（詩の家出版部）
抒情詩社編
『一九二七年詩集』（抒情詩社）
中村漁波林詩集
『小さい芽生』（大　地　舍）
坂本精市詩集
『遠　き　蠟　人』（松江詩話會）
野口雨情編著
『童　謠　讀　本』（啓　文　社）
天野康夫遺稿集
『天野康夫詩集』（草　原　社）

東海詩人協會編
『東海詩集』（名古屋・東文堂）

八月

○佐藤春夫集
（『現代日本文學全集』の內）（改造社）
生田春月著
『山家文學論集』（新潮社）
山本巖詩集
『美苦留里』（清光社）
石川徹郎譯
『陶淵明詩集』（新しき村出版部）
後藤郁子詩集
『午前○時』（森林社）
恐神健治郎詩集
『閑古島』（北海道詩人聯盟）
田中清一詩集
『夢見てはいけないのか』（春陽堂）
河野都紫王詩集
『支那街』（日本詩人會）
佐藤寬編
『啄木抒情詩集』（紅玉堂）
秋元蘆風選註
『ゲーテ詩選』（南江堂）

九月

飯島貞詩集
『樹の間の道』（自由詩社）
渡利節夫詩集
『日本海』（さめらう書房）
前田鐵之助詩集
『蘆荻集』（詩洋社）

笠原利雄編著
『唐詩選詳解』（大同館）
渡邊波光民謠集
『朝霧』（仙臺民謠社）
北島春柳詩集
『春を呼ぶ』（日本詩人會）
尾崎喜八詩集
『曠野の火』（素人社）
藤森秀夫譯詩集
『ゲエテ詩集』（聚英閣）

十月

落合貞三郎他三氏譯著
『小泉八雲全集・詩論續々』（第一書房）
繩田林藏詩集
『けがれた王座』（詩集社）
胡麻政知詩集
『農土詩集』（大地舍）
大谷忠一郎詩集
『北方の曲』（文武堂）
畑喜代司編著
『泰西名詩の味ひ方』（資文堂）
幡谷正雄論著
『ウイリアム・ブレイク』（新生堂）
寺下辰夫譯詩集
『緣の挨拶』（交蘭社）
中村恭二郎詩集
『青い空の梢に』（大地舍）
笹本正男詩集
『南京玉の指環』（大阪市文雅堂）
堀口大學譯著
『近代劇全集・二四』（第一書房）

菊地重三郎詩集
『冬の仕度』（大地舍）
福田正夫詩集
『福田正夫詩集第一輯』（同刊行會）
西條八十隨筆集
『丘に想ふ』（交蘭社）
高野盛義叙事詩集
『愛の幻想』（大地舍）
粕谷眞洋譯詩集
『ハイネ詩集』（南山堂）
正當汪洋論著
『スキーンバン』（新進詩人社）
岡本唉子詩集
『木馬』（麥風社）
幡谷正雄譯詩集
『ブレイク詩集』（新潮社）
百田宗治詩集
『偶成詩集』（椎之木社）
伊波南哲詩集
『南國之白百合』（詩之家）

十一月

プロレタリヤ藝術聯盟編輯
ロシヤ革命十週年記念『プロレタリヤ詩集』（マルクス書房）
林野貞夫民謠詩集
『うすなさけ』（麥風社）
福田正夫詩集
『福田正夫詩集第二輯』（同刊行會）
岩澤金作詩集
『美しき收穫』（黃風林書房）
向田しげる詩集
『青い樂器』（足尾詩話會）

松本達次郎民謠集
『昨日の夢』（川崎行路社）
茅野蕭々編著
『上田敏詩抄』（岩波書店）
久保田彦保詩集
『夕の花園』（詩之家）
幡谷正雄譯詩集
『ワアヅワス詩集』（新潮社）
井上誠詩集
『季節の風』（詩洋社）
上田忠男詩集
『幽鬱なる信號』（亞細亞詩脈協會）
竹友藻風詩集
『詩集』（新潮社）
佐藤八郎譯著
『世界名詩物語』（文洋社）
日夏耿之介詩集
『定本詩集第三卷黃眠帖』（第一書房）

十二月

山口武美詩集
『自稱イマジストの詩』（抒情詩社）
小此木恒太郎編著
獨文『シルレル詩選』（北耀社）
京都詩人協會篇
『京都詩集』（京都詩人協會）
土井晚翠詩集
『晚翠詩集』（博文館）
勝田香月感想集
『詩に惠まれた生活』（東京閣）
青木茂若詩集
『雪に埋れた葡萄園』（椎之木社）

竹中久七詩集
『中世紀』（詩之家）

佐藤春夫詩集
『十年集』（南宋書院）

横山青娥詩集
『青空に泳ぐ』（交蘭社）

山崎泰雄詩集
『春苑詩抄』（山雨房）

藤森秀夫詩集
『紫水晶』（金星堂）

室生犀星詩集
『愛の詩集』（聚英閣）

福田正夫詩集
『福田正夫詩集第三輯』（同刊行會）

福田正夫叙事詩集
『空翔ける美女』（新潮社）

佐藤八郎抒情詩集
『いとしき泣きぼくろ』（文祥堂）

西條八十詩集
『西條八十詩集』（第一書房）

詩集一覽と詩

一月

『花と金鑛』

柴山　晴美

東京市外青山南町七ノ二森林社（定價一・五〇）

花と金鑛

蒼茫たる波濤に浮ぶ
孤島の内の廢坑に
寥しい運命を擁いて誕生した一塊の金鑛。
それは夜雨　淨淨と降るに濯はれて
蒼穹に透ける蛛網のごとく清雅な美學と
言葉ない幽邃の思想を
燻んだ鑛石の翳から閃かせてゐる。

眼覺めの朝の新鮮さに
柔らかな玄土をほぐして伸び
雲霧のなかへそうそうと生育する一莖の植物。
美と夢の探求に咲き出た白青色の花は
古雅な樹梢の尖端に安居して
流るゝ風に震へながらも
巡る地軸の惶急しさに群れ
浮華な想念を哀愁しむのである

私の靜かなる意志は澄み透つて
和漢の詩書から、異國の哲學から
かゝる不思議な花と金鑛のみを
終日、禿筆もて爲す性質を刻みつけた。

殊に哀傷のひたひたと漲る薄暮
弟妹と隱り住む古ぼけた家屋に

香炎縷々と焚いて
外面に呼ばふ新月の纖細な眉を感じ
愛燐胸にせまる風聲を耳にして
孤坐する私は
花と金鑛の爲に勤行を續けるのである。

『春の顏』

英　美　子

東京市神田錦町三ノ三平凡社（定價一・〇〇）

初夏の思慕

——百合子へ——

全く、これは思ひ掛けない緣の蔭だ
佛國歸朝の、マドモアゼルの訪れの聲だ。

純白な皿の上に
赤い苺が七つ八つ
銀のプティット・フールシエットを
器用に動かしてゐる、私の前の
たをやかな指——
貴女の餘りにも華やかな笑顏は
鷗の翼にでも包んでをきたい
眞蒼な初夏の風の中に
一人さみしく、プラターヌを植ゑて
切ない思情の花を、傷める。
更け易い銀座の夜の
苺、苺……

『歪める月』

郡山　弘史

仙臺市同心町通四六館内方　L・S・M社（定價一・二〇）

燕の巢へ

たましいは歪みくだかれて

黄色い旗の賑かにゆらぐ支那人街の祭の宵を
覆面しながら踊つてゆくのです
小さな白い靴の娘さん達を追つかけ追つかけ
跛引いてゆくのです
燕ののこして行つた灰色の巣へ
ひそかに歸つてゆく獨りの娘さんを見つけ
不具の心が
暮近い野道をいつしんに走り出したのです

『秋の花束』

井上　好澄

東京市神田表神保町三　情熱時代社（定價一・五〇）

墓あれば

かへりゆくべき
墓あれば
をさなごころとなりて
かへりゆきたし
しづかに　しづかに
あきの日に——。

『大道藝人』

安藤　眞澄

東京府下中野二七五六　椎之木社（定價〇・九〇）

青葉は成長する

粗い樹木の枝頭で
今朝私は貝殻のやうに光つてゐる
その一つの青葉を見た
生き〳〵とした微風の手のなかで
成長する青葉の息吹を感じた

二　月

『日夏耿之介定本詩集』

第一巻「轉身之頌」

東京市芝區下高輪二二　第一書房（全三巻一五・〇〇）

雙手は神の聖膝の上に

雙手をあげよ
こころゆくまで
脈搏途絶えて
火ゆる血行の　ことごとく萎えはてむまで
天心たかく——　眶ひたと瞑ぢて——
氣澄み
風も死したり
ああ善良き日かな
雙手はわが神の聖膝の上にあらむ

『赤い窓から』（童謡集）

田尻　征夫

東京市青山南町七ノ七　さめらう書房（定價〇・五〇）

朝の月

さらさら　ほすすき
朝の月
ほつそり　ほそくて
さむさうだ
さらさら　ほすすき
霜のみち
だまつて　お馬は
ついてくる。
腰のお畚はからの畚
鵜鳥三羽は

波に鳴く。

『民謡自選集』

熊本市安巳橋通り十一　熊本民謡研究會（定價一・〇〇）

戀

泣かしやつた
泣かしやつた
戀ゆゑに泣かしやつた
ご新造さまは
死なしやつた

（濱田　林樾）

『紅い羅針盤』　八十島　稔

東京市牛込區新小川町二ノ八　ミスマル社（定價〇・五〇）

春

馬の眼は空を向いてゐた
私たちは赤いネクタイに月ほどの可愛いい斑點
になつて煤けた街に手を投げる。

三　月

『龍女の眸』　森　三千代

東京市日本橋區檜物町九　紅玉堂（定價一・〇〇）

自轉車

驟雨のあと。
矢車草の花のなかの
午前十時の太陽
川柳やポプラの茂み深い
郊外の低い塀沿ひに
兒を抱いて、私は下ばかりみて歩いてゐる。
父よ。母よ。
私はまだ〳〵弱りはしません
旋風（はやかぜ）の樣に自轉車が
泥をはねてそばをつきぬけた
私ははつとして兒をかばひしめた。
生活はいつもこんな風に
私達をおびやかしてすぎるのだ
ふりあふいだ
銀（しろがね）のかもめが二羽
大空の海を高々と涉つてゆく。

『何もない庭』　百田　宗治

東京府下中野上町二七五六　椎の木社（定價〇・六〇）

人　生

よき寢床あり
明日食べるだけの麵麭があり
臺所にその寒さをふせぐだけの炭があれば
——家のうへに屋根あり